# 大洲市内遺跡調査報告書Ⅰ

―旧街道・中世城館跡の調査―

宇和島街道烏坂峠越
八幡浜街道夜昼峠越

猿ヶ滝城跡
高尾城跡
白石城跡
八黒城跡
橘城跡
笹の森城跡

令和４（2022）年３月

愛媛県大洲市教育委員会

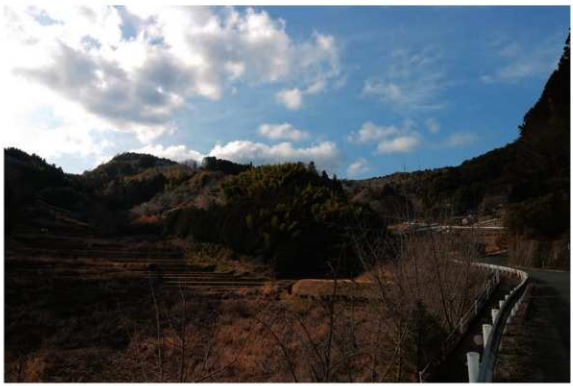
宇和島街道鳥坂峠越(終点) 俯瞰(南西から)

宇和島街道鳥坂峠越　石造物群

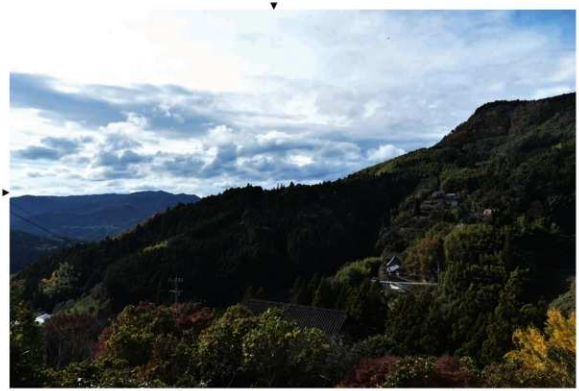
八幡浜街道夜昌峠越(終点) 俯瞰(南西から)

猿ヶ滝城跡 全景(南西から)

高尾城跡 全景（猿ヶ滝城跡上空／東から）



白石城跡 全景（東から）



笹の森城跡 全景(北東から)

橋城跡 全景(南西から)

# 大洲市内遺跡調査報告書Ⅰ

―旧街道・中世城館跡の調査―

宇和島街道烏坂峠越
八幡浜街道夜昼峠越

猿ヶ滝城跡
高尾城跡
白石城跡
八黒城跡
橘城跡
笹の森城跡

令和４（2022）年３月

愛媛県大洲市教育委員会

# 序　文

大洲市は、愛媛県南部の南予地方に属し、市内を流れる肱川とともに歴史を積み重ねてきました。近年では、４つの櫓が現存する大洲城跡や、本市出身の豪商・河内寅次郎がつくり出した景勝地にたたずむ臥龍山荘を主軸とした、近世から近代にかけての古建築物の観光活用に取り組んでいます。

一方、本市には先史時代から連綿と人びとの営みが続いており、その痕跡として多くの遺跡が残されています。大洲市教育委員会では、こうした多種多様な遺跡の調査を実施してきました。令和元(2019)年度からは国庫補助を受けることで、さらに事業を拡充して進めてまいりました。

本報告書は、令和元(2019)年度から調査に取り組んできた中世城館跡、旧街道及び遍路道の調査成果をまとめたものです。いずれも、大洲市の歴史や文化的背景の一端を理解し、復元するうえで重要な成果となっています。皆様の学術研究、教育などの基礎的資料として御活用いただけることを切に願います。

この調査事業を進めるに当たり、御指導御助言を賜りました専門家の方々や関係各位、並びに、調査に御協力をいただいた土地所有者や地元の皆様に対し、厚く御礼を申し上げます。

本市は平成30(2018)年の西日本豪雨において未曾有の水害に遭い、保管していた埋蔵文化財も、その収蔵庫が天井まで浸水するなどの大きな被害を受けました。被災した文化財の救出、復旧に当たっては、市内外を問わず多くの方々に駆けつけていただき、多大な御支援を賜りました。被災以降、今般の調査事業を進めることができたのは、ひとえにこれらの皆様のお力添えあってのことであり、この紙上をお借りして深謝いたします。

令和４(2022)年３月

大洲市教育委員会
教育長　東山　宏

# 例　言

1．本書は、大洲市教育委員会が令和元年度～５年度まで実施する大洲市遺跡確認調査事業(国庫補助事業)のうち、令和元年度～３年度までに実施した調査の成果報告書である。

2．調査事業にあたり、下記の指導を得た。

　下條　信行　(考古学、愛媛大学名誉教授)

　日和佐　宣正　(考古学、愛媛県教育委員会 文化財保護課 主幹)

3．調査は、下記が担当した。

　藏本　　論　(大洲市教育委員会 文化スポーツ課 学芸員)

4．調査および本報告書の作成に関する体制は、序説に記載する。

5．試掘調査作業については、亀井泰基、吉良　玄、黒田清三、中岡　武、此平道夫、白石寿行、鶴岡由寛、森田　修、横山義之、和藤孝洋の協力を得た。整理作業については、主に藏本および桝上知恵子(大洲市埋蔵文化財センター 会計年度任用職員)が作業にあたり、此平、横山が一部を補助した。

6．第２章で表示した座標・標高・方位等は、世界測地系平面直角座標系Ⅳ系にしたがった。

7．土層・遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1967)に準拠している。

8．本書に掲載した地形図は、大洲市農林水産部農林水産課から提供を受けた等高線図(林野庁作成公共測量成果)を基図とした。なお、この等高線図は、林野庁長官の承認を得て複製したものである(承認番号 令和元年７月22日 元林整治第246号)。

9．第２章に掲載した地形測量図は、株式会社ダイニンに業務委託して作成した地形測量図、および、西予市教育委員会より提供を受けた地形測量図を、上記等高線図と合成した。

10．第３章に掲載した縄張図は、日和佐宣正氏が作成したものを上記等高線図と合成した。

11．本書に掲載したトレンチ平面図・断面図等は藏本が作成し、浄書ならびに製図は藏本がおこなった。

12．本書に掲載した遺物実測図の作成は藏本・桝上がおこない、浄書と製図は藏本がおこなった。

13．本書で使用した調査時の写真は藏本が撮影し、遺物写真の撮影は藏本のほか、白石尚寛(大洲市教育委員会 文化スポーツ課 専門員)の協力を得た。また、無人航空機を用いた高所写真は藏本が撮影したほか、城戸輝芳・横山の協力を得た。遺構の３次元およびオルソ写真撮影は笹田朋孝氏(愛媛大学法文学部 准教授)、正司哲朗氏(奈良大学社会学部 教授)の協力を得た。

15. 本書の執筆・編集は、岡崎壮一(大洲市教育委員会 文化スポーツ課 専門員)の指示のもと、藏本がおこなった。なお、第3章第2～7節第1項(「城館の構造」)については、日和佐氏に執筆いただいた。

17. 本書で報告した調査に関わる記録類や出土遺物は、大洲市埋蔵文化財センターおよび肱川歴史民俗資料館で保管している。

18. 調査の遂行にあたり、次の職員から助言、協力を得た。
白石尚寛(大洲市教育委員会 文化スポーツ課 専門員)、山田広志(大洲市立博物館 係長)、安藤咲笑香(大洲市教育委員会 文化スポーツ課 会計年度任用職員)

19. 調査の遂行にあたり、次の方々よりご助力・ご指導を賜った(順不同、敬称略)。
村上恭通(愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター)、笹田朋孝(愛媛大学法文学部)、柴田圭子(愛媛県埋蔵文化財調査センター)、正司哲朗(奈良大学社会学部 教授)、宮里　修(高知大学人文社会科学部)、兒玉洋志(西予市教育委員会)、宇都宮菜乃(八幡浜市教育委員会)
畦崎伸穂、戒野嘉孝、中野孝廣、二宮賢一郎、山田秀招、山本栄治、西予市教育委員会、八幡浜市教育委員会、大洲市南久米公民館、大洲市平野公民館、大洲市農林水産部農林水産課、大洲市農林水産部農山漁村整備課

# 目　次

巻頭図版
序　文
例　言
目　次
挿図目次
表目次
写真目次
図版目次

序　説　　調査の経緯と経過 …… 1
1．調査にいたる経緯 …… 1
2．調査の目的と概要 …… 1
3．発掘調査・整理作業の体制 …… 2

第1章　　大洲市の環境 …… （藏本　論） 3
1．地理的環境 …… 3
2．歴史的環境 …… 4

第2章　　遍路道・旧街道の調査 …… （藏本　論） 9
1．調査の経緯・目的・経過 …… 9
2．宇和島街道鳥坂峠越について …… 11
3．宇和島街道鳥坂峠越の調査成果 …… 16
4．八幡浜街道夜昼峠越について …… 38
5．八幡浜街道夜昼峠越の調査成果 …… 42
6．まとめ …… 57

第3章　　中世城館跡の調査 …… （藏本　論・日和佐宣正） 61
1．調査の経緯・目的・経過 …… 61
2．猿ヶ滝城跡の調査成果 …… 64
3．高尾城跡の調査成果 …… 88

4．白石城跡の調査成果 …… 94
5．八黒城跡の調査成果 …… 98
6．笹の森城跡の調査成果 …… 101
7．橘城跡の調査成果 …… 105
8．まとめ …… 111

図 版

# 挿図目次

第１章　大洲市の環境

図 1-01　愛媛県大洲市の位置…… 3
図 1-02　調査対象と市内主要遺跡…… 5

第２章　遍路道・旧街道の調査

図 2-01　宇和島街道鳥坂峠越全体図…… 12
図 2-02　鳥坂峠越旧版地形図…… 13
図 2-03　宇和島街道鳥坂峠越地形図 -No.1 …… 17
図 2-04　宇和島街道鳥坂峠越地形図 -No.2 …… 18
図 2-05　宇和島街道鳥坂峠越地形図 -No.3 …… 19
図 2-06　宇和島街道鳥坂峠越地形図 -No.4 …… 20
図 2-07　宇和島街道鳥坂峠越地形図 -No.5 …… 21
図 2-08　宇和島街道鳥坂峠越地形図 -No.6 …… 22
図 2-09　宇和島街道鳥坂峠越地形図 -No.7 …… 23
図 2-10　宇和島街道鳥坂峠越地形図 -No.8 …… 24
図 2-11　鳥坂峠越　１トレンチ平面図・断面図 …… 25
図 2-12　鳥坂峠越　２トレンチ平面図・断面図 …… 25
図 2-13　鳥坂峠越　3A トレンチ平面図・断面図 …… 26
図 2-14　鳥坂峠越　3B トレンチ平面図・断面図 …… 28
図 2-15　鳥坂峠越　4A トレンチ平面図・断面図 …… 28
図 2-16　鳥坂峠越　4B トレンチ平面図・断面図 …… 28
図 2-17　鳥坂峠越　5A トレンチ平面図・断面図 …… 29
図 2-18　鳥坂峠越　5B トレンチ平面図・断面図 …… 29
図 2-19　鳥坂峠越　６トレンチ平面図・断面図 …… 30
図 2-20　鳥坂峠越　７トレンチ平面図・断面図 …… 30
図 2-21　日天社　１トレンチ平面図・断面図 …… 31
図 2-22　日天社　２トレンチ平面図・断面図 …… 32
図 2-23　鳥坂峠越　石造物実測図・拓本（１） …… 33
図 2-24　鳥坂峠越　石造物実測図・拓本（２） …… 35
図 2-25　八幡浜街道夜昼峠越全体図…… 39
図 2-26　夜昼峠越旧版地形図…… 40

図 2-27　八幡浜街道夜昼峠越地形図 -No.1 …… 43
図 2-28　八幡浜街道夜昼峠越地形図 -No.2 …… 44
図 2-29　八幡浜街道夜昼峠越地形図 -No.3 …… 45
図 2-30　八幡浜街道夜昼峠越地形図 -No.4 …… 46
図 2-31　夜昼峠越　1トレンチ平面図・断面図 …… 47
図 2-32　夜昼峠越　2トレンチ平面図・断面図 …… 47
図 2-33　夜昼峠越　3トレンチ平面図・断面図 …… 48
図 2-34　夜昼峠越　石積1立面図 …… 48
図 2-35　夜昼峠越　4トレンチ平面図・断面図 …… 49
図 2-36　夜昼峠越　石積2立面図 …… 49
図 2-37　夜昼峠越　5トレンチ平面図・断面図 …… 50
図 2-38　夜昼峠越　6トレンチ平面図・断面図 …… 50
図 2-39　鳥坂峠越　石造物実測図・拓本 …… 53

第3章　中世城館跡の調査

図 3-01　調査対象および周辺の中世城館跡 …… 62
図 3-02　猿ヶ滝城跡　縄張図 …… 65
図 3-03　猿ヶ滝城跡　E-1 トレンチ平面図・断面図 …… 68
図 3-04　猿ヶ滝城跡　E-2 トレンチ平面図・断面図 …… 68
図 3-05　猿ヶ滝城跡　郭2採集遺物実測図 …… 68
図 3-06　猿ヶ滝城跡　E-3 トレンチ平面図・断面図 …… 69
図 3-07　猿ヶ滝城跡　E-4 トレンチ平面図・断面図 …… 70
図 3-08　猿ヶ滝城跡　E-5 トレンチ平面図・断面図 …… 70
図 3-09　猿ヶ滝城跡　E-6 トレンチ平面図・断面図 …… 70
図 3-10　猿ヶ滝城跡　E-5 トレンチ出土遺物実測図 …… 70
図 3-11　猿ヶ滝城跡　郭3採集遺物実測図 …… 70
図 3-12　猿ヶ滝城跡　E-7 トレンチ平面図・断面図 …… 71
図 3-13　猿ヶ滝城跡　E-8 トレンチ平面図・断面図 …… 71
図 3-14　猿ヶ滝城跡　E-9 トレンチ平面図・断面図 …… 72
図 3-15　猿ヶ滝城跡　W-1 トレンチ平面図・断面図 …… 73
図 3-16　猿ヶ滝城跡　W-2 トレンチ平面図・断面図 …… 73
図 3-17　猿ヶ滝城跡　W-3 トレンチ平面図・断面図 …… 73
図 3-18　猿ヶ滝城跡　W-4 トレンチ平面図・断面図 …… 73

図 3-19　猿ヶ滝城跡　W-5 トレンチ平面図・断面図 …… 74
図 3-20　猿ヶ滝城跡　W-6 トレンチ平面図・断面図 …… 74
図 3-21　猿ヶ滝城跡　W-6 トレンチ出土遺物実測図 …… 74
図 3-22　猿ヶ滝城跡　郭 11 採集遺物実測図 …… 74
図 3-23　猿ヶ滝城跡　W-7a トレンチ平面図・断面図 …… 75
図 3-24　猿ヶ滝城跡　W-7b トレンチ平面図・断面図 …… 75
図 3-25　猿ヶ滝城跡　W-8 トレンチ平面図・断面図 …… 75
図 3-26　猿ヶ滝城跡　W-9 トレンチ平面図・断面図 …… 75
図 3-27　猿ヶ滝城跡　W-10 トレンチ平面図・断面図 …… 77
図 3-28　猿ヶ滝城跡　W-11 トレンチ断面図 …… 78
図 3-29　猿ヶ滝城跡　W-11 トレンチ平面図 …… 79
図 3-30　猿ヶ滝城跡　W-11 トレンチ出土遺物実測図 …… 81
図 3-31　猿ヶ滝城跡　郭 12，13 採集遺物実測図（1）…… 81
図 3-32　猿ヶ滝城跡　郭 12，13 採集遺物実測図（2）…… 81
図 3-33　猿ヶ滝城跡　郭 12，13 採集遺物実測図（3）…… 81
図 3-34　猿ヶ滝城跡　過去採集遺物実測図（1）…… 82
図 3-35　猿ヶ滝城跡　過去採集遺物実測図（2）…… 83
図 3-36　猿ヶ滝城跡　過去採集遺物実測図（3）…… 84
図 3-37　高尾城跡　縄張図 …… 88
図 3-38　伝・高尾城跡採集茶釜実測図 …… 89
図 3-39　高尾城跡　1 トレンチ平面図・実測図 …… 90
図 3-40　高尾城跡　2 トレンチ平面図・断面図 …… 90
図 3-41　高尾城跡　3 トレンチ平面図・断面図 …… 91
図 3-42　高尾城跡　4 トレンチ平面図・断面図 …… 91
図 3-43　高尾城跡　5a トレンチ平面図・断面図 …… 92
図 3-44　高尾城跡　5b トレンチ平面図・断面図 …… 92
図 3-45　高尾城跡　6 トレンチ平面図・断面図 …… 93
図 3-46　高尾城跡　7 トレンチ平面図・断面図 …… 93
図 3-47　白石城跡　概測平面図 …… 94
図 3-48　白石城跡　1 トレンチ平面図・断面図 …… 95
図 3-49　白石城跡　1 トレンチ出土遺物実測図 …… 95
図 3-50　白石城跡　2 トレンチ平面図・断面図 …… 96
図 3-51　白石城跡　3 トレンチ平面図・断面図 …… 96

図 3-52　八黒城跡　概測平面図…… 98
図 5-53　八黒城跡　1トレンチ平面図・断面図 …… 99
図 3-54　八黒城跡　2トレンチ平面図・断面図 …… 99
図 3-55　八黒城跡　3トレンチ平面図・断面図 …… 100
図 3-56　八黒城跡　4トレンチ平面図・断面図 …… 100
図 3-57　笹の森城跡　縄張図…… 101
図 3-58　笹の森城跡　1トレンチ平面図・断面図 …… 103
図 3-59　笹の森城跡　2トレンチ平面図・断面図 …… 103
図 3-60　笹の森城跡　3トレンチ平面図・断面図 …… 103
図 3-61　笹の森城跡　4トレンチ平面図・断面図 …… 104
図 3-62　笹の森城跡　5トレンチ平面図・断面図 …… 104
図 3-63　笹の森城跡　6トレンチ平面図・断面図 …… 104
図 3-64　橘城跡　縄張図…… 105
図 3-65　橘城跡　1トレンチ平面図・断面図…… 107
図 3-66　橘城跡　2トレンチ平面図・断面図…… 108
図 3-67　橘城跡　2トレンチ出土遺物実測図…… 107
図 3-68　橘城跡　3トレンチ平面図・断面図…… 108
図 3-69　橘城跡　4トレンチ平面図・断面図…… 108
図 3-70　橘城跡　5トレンチ平面図・断面図…… 109
図 3-71　橘城跡　5トレンチ出土遺物実測図…… 109

# 表目次

第２章　遍路道・旧街道の調査

表 2-01　宇和島街道鳥坂峠越　石造物一覧表 …… 37

表 2-02　八幡浜街道夜昼峠越　石造物一覧表 …… 56

第３章　中世城館跡の調査

表 3-01　猿ヶ滝城跡　土器・陶磁器・土製品一覧表 …… 86

表 3-02　猿ヶ滝城跡　石製品一覧表 …… 87

表 3-03　猿ヶ滝城跡　金属製品・鉄関連遺物一覧表 …… 87

表 3-04　伝・高尾城跡　金属製品一覧表 …… 93

表 3-05　白石城跡　土器・陶磁器一覧表 …… 97

表 3-06　橘城跡　土器・陶磁器一覧表 …… 110

表 3-07　橘城跡　金属製品一覧表 …… 110

# 写真目次

第１章　大洲市の環境

写真 1-01　塚穴古墳 石室内部 …… 6
写真 1-02　滝ノ城跡と肱川 …… 6
写真 1-03　大洲城跡 …… 7
写真 1-04　麟鳳閣（新谷藩陣屋跡） …… 7

第２章　遍路道・旧街道の調査

写真 2-01　現地確認の様子（宇和島街道鳥坂峠越） …… 10
写真 2-02　現地確認の様子（八幡浜街道夜昼峠越） …… 10
写真 2-03　試掘調査の様子（八幡浜街道夜昼峠越） …… 10
写真 2-04　現地指導の様子（八幡浜街道夜昼峠越） …… 10
写真 2-05　現在の仏陀懸寺 …… 14
写真 2-06　お接待場とされる地点 …… 14
写真 2-07　旧府県道（峠付近） …… 41
写真 2-08　千賀居隧道（八幡浜市） …… 41
写真 2-09　氏神祠 …… 54

第３章　中世城館跡の調査

写真 3-01　縄張図作成の様子（狼ヶ滝城跡） …… 61
写真 3-02　試掘調査の様子（白石城跡） …… 61
写真 3-03　西予市指定文化財「岩本将監の墓」 …… 67

# 図版目次


図版1
1．日天社1トレンチ調査前状況(南西から)
2．日天社1トレンチ完掘状況(南西から)
3．日天社現況(南西から)
4．日天社2トレンチ完掘状況(南西から)
5．鳥坂峠越1トレンチ調査前状況(南東から)
6．鳥坂峠越1トレンチ完掘状況(南東から)
7．鳥坂峠越2トレンチ調査前状況(北から)
8．鳥坂峠越2トレンチ完掘状況(北から)

図版2
1．鳥坂峠越3Aトレンチ調査前状況(北東から)
2．鳥坂峠越3Aトレンチ完掘状況(東から)
3．鳥坂峠越3Aトレンチ完掘状況(北から)

図版3
1．鳥坂峠越4Aトレンチ調査前状況(南西から)
2．鳥坂峠越4Aトレンチ完掘状況(南西から)
3．鳥坂峠越4Aトレンチ石敷(南西から)

図版4
1．鳥坂峠越3Bトレンチ調査前状況(北東から)
2．鳥坂峠越3Bトレンチ完掘状況(北東から)
3．鳥坂峠越4Bトレンチ調査前状況(北東から)
4．鳥坂峠越4Bトレンチ完掘状況(北東から)
5．鳥坂峠越5Aトレンチ調査前状況(北東から)
6．鳥坂峠越5Aトレンチ完掘状況(北東から)
7．鳥坂峠越5Bトレンチ調査前状況(東から)
8．鳥坂峠越5Bトレンチ完掘状況(東から)

図版5
1．鳥坂峠越6トレンチ調査前状況(北東から)
2．鳥坂峠越6トレンチ完掘状況(北東から)
3．鳥坂峠越7トレンチ調査前状況(北東から)
4．鳥坂峠越7トレンチ完掘状況(北東から)
5．鳥坂峠石垣南面東半および西面
3次元モデル(南から／参考)

図版6
1．鳥坂峠越 石造物01
2．鳥坂峠越 石造物02
3．鳥坂峠越 石造物03
4．鳥坂峠越 石造物04
5．鳥坂峠越 石造物05
6．鳥坂峠越 石造物06,07

図版7
1．鳥坂峠越 石造物08,09発見時
2．鳥坂峠越 石造物08
3．鳥坂峠越 石造物09

図版8
1．鳥坂峠越 石造物10
2．鳥坂峠越 石造物(その他)
3．鳥坂峠越 石造物13
4．鳥坂峠越 石造物12

図版9
1．鳥坂峠越 石造物11
2．鳥坂峠越 石造物11(裏)

図版10
1．鳥坂峠越 石造物14
2．鳥坂峠越 石造物15発見時
3．鳥坂峠越 石造物15
4．鳥坂峠越 石造物16,17

図版11
1．鳥坂峠越 石造物18,19,20と井戸
2．鳥坂峠越 石造物18,19,20

図版12
1．夜昼峠越1トレンチ調査前状況(東から)
2．夜昼峠越1トレンチ石敷(東から)
3．夜昼峠越1トレンチ完掘状況(東から)

図版13
1．夜昼峠越２トレンチ調査前状況(北東から)
2．夜昼峠越２トレンチ完掘状況(北東から)
3．夜昼峠越３トレンチ調査前状況・石積１(北東から)
4．夜昼峠越３トレンチ調査前状況(北から)
5．夜昼峠越３トレンチ５層検出状況(北から)

図版14
1．夜昼峠越３トレンチ上部完掘状況(北から)
2．夜昼峠越３トレンチ下部完掘状況１(北から)
3．夜昼峠越３トレンチ下部完掘状況２(北から)
4．夜昼峠越３トレンチ下部完掘状況３(北から)

図版15
1．夜昼峠越４トレンチ調査前状況(南東から)
2．夜昼峠越４トレンチ完掘状況(南東から)
3．夜昼峠越 石積２(南東から)
4．夜昼峠越５トレンチ調査前状況(東から)
5．夜昼峠越５トレンチ完掘状況(東から)

図版16
1．夜昼峠越６トレンチ調査前状況(北から)
2．夜昼峠越６トレンチ完掘状況(北から)
3．夜昼峠越 従軍者記念碑(南から)
4．夜昼峠越 石造物21,22
5．夜昼峠越 石造物23上部
6．夜昼峠越 石造物23下部
7．夜昼峠越 石造物23発見時

図版17
1．夜昼峠越 石造物29
2．夜昼峠越 石造物24,25
3．夜昼峠越 石造物27
4．夜昼峠越 石造物26
5．夜昼峠越 石造物28
6．夜昼峠越 石造物30

図版18
1．夜昼峠越 石造物31
2．夜昼峠越 石造物32
3．夜昼峠越 石造物33
4．夜昼峠越 石造物34

図版19
1．猿ヶ滝城跡 E-1トレンチ完掘状況(南西から)
2．猿ヶ滝城跡 E-2トレンチ調査状況(南から)
3．猿ヶ滝城跡 E-2トレンチ完掘状況(東から)
4．猿ヶ滝城跡 E-3トレンチ完掘状況(南から)

図版20
1．猿ヶ滝城跡 E-4トレンチ完掘状況(南から)
2．猿ヶ滝城跡 E-5トレンチ完掘状況(南東から)
3．猿ヶ滝城跡 E-6トレンチ完掘状況(東から)
4．猿ヶ滝城跡 E-5トレンチ遺物出土状況(南から)
5．猿ヶ滝城跡 E-7トレンチ完掘状況(南から)
6．猿ヶ滝城跡 E-8トレンチ完掘状況(北西から)
7．猿ヶ滝城跡 E-9トレンチ完掘状況(南東から)

図版21
1．猿ヶ滝城跡 E-9トレンチ完掘状況(南から)
2．猿ヶ滝城跡 W-1トレンチ完掘状況(南東から)
3．猿ヶ滝城跡 W-2トレンチ完掘状況(北西から)
4．猿ヶ滝城跡 W-3トレンチ完掘状況(西から)
5．猿ヶ滝城跡 W-4トレンチ完掘状況(北から)

図版22
1．猿ヶ滝城跡 W-5トレンチ完掘状況(西から)
2．猿ヶ滝城跡 W-6トレンチ完掘状況(西から)
3．猿ヶ滝城跡 W-7aトレンチ完掘状況(西から)
4．猿ヶ滝城跡 W-7bトレンチ完掘状況(南から)
5．猿ヶ滝城跡 W-8トレンチ完掘状況(東から)
6．猿ヶ滝城跡 W-9トレンチ完掘状況(東から)
7．猿ヶ滝城跡 W-10トレンチ完掘状況(東から)
8．猿ヶ滝城跡 W-11トレンチSP05遺物出土状況
(東から)

図版23
1．猿ヶ滝城跡 W-11トレンチ柱穴状況(北東から)
2．猿ヶ滝城跡 W-11トレンチ柱穴状況(南西から)
3．猿ヶ滝城跡 W-11トレンチ柱穴状況(東から)

図版24

1．猿ヶ滝城跡 W-11トレンチ完掘状況(北東から)
2．猿ヶ滝城跡 W-11トレンチ土層堆積状況
(a-a'、南から)
3．猿ヶ滝城跡 W-11トレンチ土層堆積状況
(c-c'、南から)
4．猿ヶ滝城跡 W-11トレンチ土層堆積状況
(f-f'、南から)
5．猿ヶ滝城跡 W-11トレンチ土層堆積状況
(b-b'東半、南から)

図版25

1．猿ヶ滝城跡 郭2採集遺物
2．猿ヶ滝城跡 E-5トレンチ出土遺物
3．猿ヶ滝城跡 郭3採集遺物
4．猿ヶ滝城跡 W-6トレンチ出土遺物
5．猿ヶ滝城跡 郭11出土遺物
6．猿ヶ滝城跡 W-11トレンチ出土遺物
7．猿ヶ滝城跡 郭12,13採集遺物(1)

図版26

1．猿ヶ滝城跡 郭12,13採集遺物(2)
2．猿ヶ滝城跡 郭12,13採集遺物(3)
3．猿ヶ滝城跡 郭12,13採集遺物(4)
4．猿ヶ滝城跡 過去採集遺物(1)

図版27

1．猿ヶ滝城跡 過去採集遺物(2)
2．猿ヶ滝城跡 過去採集遺物(3)
3．猿ヶ滝城跡 過去採集遺物(4)
4．猿ヶ滝城跡 S01立面

図版28

1．猿ヶ滝城跡 過去採集遺物(4)
2．猿ヶ滝城跡 S03立面

図版29

1．伝-高尾城跡 採集茶釜
2．高尾城跡 1トレンチ完掘状況(東から)
3．高尾城跡 2トレンチ完掘状況(東から)
4．高尾城跡 3トレンチ完掘状況(南から)
5．高尾城跡 4トレンチ完掘状況(北から)

図版30

1．高尾城跡 主郭土塁-5aトレンチ(西から)
2．高尾城跡 主郭土塁石積-5bトレンチ(北東から)

図版31

1．高尾城跡 5aトレンチ完掘状況(郭内側南西から)
2．高尾城跡 5aトレンチ完掘状況(郭外側北西から)
3．高尾城跡 5aトレンチ完掘状況(西から)

図版32

1．高尾城跡 6トレンチ完掘状況(南東から)
2．高尾城跡 7トレンチ完掘状況(南から)

図版33

1．白石城跡 平坦面1(北西から)
2．白石城跡 平坦面1から望む高尾城跡(北西から)
3．白石城跡 1トレンチ北壁土層堆積状況(南西から)
4．白石城跡 1トレンチ完掘状況(南東から)

図版34

1．白石城跡 2トレンチ完掘状況(南から)
2．白石城跡 3トレンチ完掘状況(南から)
3．白石城跡 1トレンチ出土遺物

図版35

1．八黒城跡 堀切跡？ (東から)
2．八黒城跡 1トレンチ完掘状況(南東から)
3．八黒城跡 2トレンチ完掘状況(北東から)
4．八黒城跡 3トレンチ完掘状況(北東から)
5．八黒城跡 4トレンチ完掘状況(北東から)

図版36

1．笹の森城跡と京の森(南東から)
2．笹の森城跡 腑郭(東から)
3．笹の森城跡 郭2からみた主郭(南東から)
4．笹の森城跡 堀切(南から)

図版37
1．笹の森城跡 1トレンチ完掘状況(南東から)
2．笹の森城跡 2トレンチ完掘状況(東から)
3．笹の森城跡 3トレンチ完掘状況(東から)
4．笹の森城跡 4トレンチ完掘状況(北東から)
5．笹の森城跡 5トレンチ完掘状況(東から)
6．笹の森城跡 6トレンチ完掘状況(東から)
7．笹の森城跡 6トレンチ作業状況(西から)
8．笹の森城跡北西 石造物(南から)

図版38
1．橘城跡 主郭と八幡神社社殿(南東から)
2．橘城跡 郭2と主郭(東から)
3．橘城跡 堀切(西から)
4．橘城跡 1トレンチ完掘状況(南東から)
5．橘城跡 2トレンチ西壁土層堆積状況(南東から)

図版39
1．橘城跡 2トレンチ完掘状況(南東から)
2．橘城跡 2トレンチ作業状況(南東から)
3．橘城跡 3トレンチ完掘状況(北東から)
4．橘城跡 4トレンチ完掘状況(北から)
5．橘城跡 5トレンチ完掘状況(北東から)

図版40
1．橘城跡 2トレンチ出土遺物(1)
2．橘城跡 2トレンチ出土遺物(2)
3．橘城跡 2トレンチ出土遺物(3)
4．橘城跡 2トレンチ出土遺物(4)
5．橘城跡 5トレンチ出土遺物

# 序 説

## 1．調査にいたる経緯

大洲市内には142件の埋蔵文化財包蔵地があり、そのうち約7割が中世城館跡となっている。ただし、これまで実際に調査された遺跡の数は、ごくわずかに留まっている。これは、幸いにも市内の新規開発が少なかったということを示す以上に、遺跡の正確な範囲や構造について、長らく把握されてきていなかったことを示しているといえる。この状態が続けば、遺跡の価値や重要性が知られぬまま、新たな開発や自然災害によって遺跡が損傷あるいは滅失することにつながりかねず、大きな懸念事項となっていた。

さらに、四国八十八箇所霊場を結ぶ遍路道の現状把握なども課題となっていた。現在、四国4県では「四国八十八箇所霊場と遍路道」の世界遺産化に向けた取組みをおこなっており、調査も本格化している。愛媛県では、平成22（2010）年度から実施した第60番札所・横峰寺（愛媛県西条市）の調査が皮切りとなり、以降、札所および周辺の総合的調査を愛媛県教育委員会が、遍路道もしくは遍路が利用した道の調査を県内各市町が担当することとなった。

大洲市内に88か所の寺院（霊場、もしくは札所）は所在しないが、遍路が利用した道が市内を貫いている。これらの道は、「歴史の道」のひとつとして愛媛県教育委員会主体による調査がおこなわれており、『宇和島街道』（愛媛県歴史の道調査報告書第6集、1997）、『八幡浜街道』（愛媛県歴史の道調査報告書第9集、2012）の調査報告書が刊行されている。一連の調査によって、経路の復元や、道沿いに残された石造物や社寺などが整理されるなどの成果があった。

ただし、試掘調査など考古学的手法を用いた調査はおこなわれておらず、地下遺構の有無や周辺地形の把握などについては、依然課題として残されていた。

以上のような課題に対し、大洲市教育委員会は令和元（2019）年度から国庫補助を受け、市内遺跡の確認調査を実施する運びとなった。冒頭でも触れたように、とくに分布数が多い中世城館跡に対象を絞って調査を進めることとし、同時に遍路が利用した街道の現状把握調査も並行して実施する運びとなった。

## 2．調査の目的と概要

前項のとおり、事業は令和元（2019）年度から開始した。事業主体は大洲市教育委員会であり、実際の発掘調査・整理作業を大洲市教育委員会文化スポーツ課が担当した。国庫補助を受け、大洲市内遺跡発掘調査等事業として事業を展開し、（1）中世城館跡の調査、そして、（2）遍路が利用した街道の調査を進めた。

いずれの調査でも、遺跡範囲や遺構の存否を確認したうえで、文化財的な価値づけをおこない、遺跡の適切な保存・保護を図り、そして遺跡の重要性を周知することを目的としている。

（1）中世城館跡の調査では、考古学的手法による調査をほとんど経験していない中世城館跡の試掘調査および縄張図の作成をおこなった。

（2）遍路が利用した街道の調査では、地形測量、試掘調査、沿道に残されている石造物などの実測といった、考古学的手法を中心とした調査を実施した。また、地元住民による聴き取り調査も並行して進めた。

年度ごとの事業概要については、次のとおりである。なお、各調査の詳細な経過については、各章で整理し掲載する。

［令和元（2019）年度］
宇和島街道鳥坂峠越の調査に着手。
橘城跡、笹の森城跡、白石城跡を調査。
［令和２（2020）年度］
宇和島街道鳥坂峠越の調査を継続し、調査完了。
八幡浜街道夜昼峠越の調査に着手。
八黒城跡・高尾城跡・猿ヶ滝城跡を調査。
［令和３（2021）年度］
八幡浜街道夜昼峠越の調査を継続し、調査完了。
汗生城跡を調査し（調査継続中）、猿ヶ滝城跡を補足調査。
本報告書、刊行。

## ３．発掘調査・整理作業の体制

本事業における大洲市教育委員会の発掘調査および整理作業の体制は、以下のとおりである。

**令和元（2019）年度**
［大洲市教育委員会］
教育長　東山　宏
教育部長　井上　徹
［大洲市教育委員会 文化スポーツ課］
課長　村上　司
課長補佐　脇坂　剛
専門員　白石　尚寛（日本史）
係長　岡崎　壮一（考古学）
学芸員　藏本　論（考古学）
［大洲市埋蔵文化財センター］
嘱託　桝上 知恵子

**令和２（2020）年度**
［大洲市教育委員会］
教育長　東山　宏
教育部長　井上　徹
［大洲市教育委員会 文化スポーツ課］
課長　村上　司
課長補佐　脇坂　剛
専門員　白石　尚寛（日本史）
専門員　岡崎　壮一（考古学）
学芸員　藏本　論（考古学）
会計年度任用職員　安藤 咲芙香（日本史）
［大洲市埋蔵文化財センター］
会計年度任用職員　桝上 知恵子

**令和３（2021）年度**
［大洲市教育委員会］
教育長　東山　宏
教育部長　井上　徹
［大洲市教育委員会 文化スポーツ課］
課長　脇坂　剛
課長補佐　大津 宝丈
専門員　白石　尚寛（日本史）
専門員　岡崎　壮一（考古学）
学芸員　藏本　論（考古学）
会計年度任用職員　安藤 咲芙香（日本史）
［大洲市埋蔵文化財センター］
会計年度任用職員　桝上 知恵子

以上の体制のもと、実際の発掘調査は藏本が担当した。整理作業については藏本、桝上が担当した。

# 第１章　大洲市の環境

藏本　諭

## １．地理的環境

愛媛県は、その東部と島嶼部とを東予、中部を中予、西南部を南予と呼び、大きく３地域に区分されている。このうち大洲市は南予に属し、県庁所在地である松山市から、直線距離で西南に約50㎞にある。東は喜多郡内子町、西は八幡浜市、北は伊予市、南は西予市に接する。平成17(2005)年１月11日に、(旧)大洲市、喜多郡長浜町、肱川町、河辺村が合併し、現在の市域が形成された。

大洲市は、市域の中心を一級河川である肱川と、その支流である河辺川、矢落川などが流れ、流域に沿って田畑や集落、市街地が形成されている。市域面積432.12㎢のうち、70.6%は森林で構成されており、豊かな農林業地域を形成している。中央部は大洲盆地が開き、盆地の周囲は高山寺山(標高561.2m)や神南山(標高710.4m)、妙見山(標高535.3m)などの山塊に囲繞される。西部は伊予灘に面し、東部は四国山地に接し、内子町との境界にある雨乞山(標高1213.3m)が市内では最高所である。

大洲市は、こうした山海に囲まれるため、東西方向で気候が大きく異なる。海に接する西部は典型的な瀬戸内海式気候であり、温暖少雨な気候となっている。中央部は内陸性盆地型気候に属しているため、昼夜の温度変化の差が大きい。また、夏は高温多湿になり、秋から冬にかけては霧や靄が発生し、日照時間が短いという特徴がある。東部の山間部は内陸性気候に属し、寒暖の差が著しい。

大洲盆地を蛇行しながら流れる肱川は、愛媛県下では最長であり、幹川流路延長103㎞、流域面積1,210㎢を誇る。大洲盆地は肱川の氾濫原であり、近年では平成30年７月豪雨によって大規模な浸水被害を受けるなど、河川整備が進んでもなお水害の常襲地として知られる。これは、肱川が瀬戸内海に注ぐ河川としては河床勾配が非常に緩やかであること、盆地から河口に向かうほど狭隘な谷が形成され、平野の広がりが少ない先行河川であること、盆地に支流が集中することなどに起因する。そのため、集落は盆地底よりも盆地縁辺部の河岸段丘上に形成される傾向が強い。

大洲地域は、中央構造線と御荷鉾構造線とに挟まれた三波川帯(三波川変成コンプレックス)と、御荷鉾構造線と仏像構造線とに挟まれた秩父帯(秩父累帯北帯の付加コンプレックス)との両方にまたがっている。前者は、白亜紀に低温高圧型変成作用によって生じた変成岩類が主体であり、後者は、前期ジュラ紀に形成された泥質混在岩および泥岩が主体となる〔坂野・水野・宮崎2010〕。

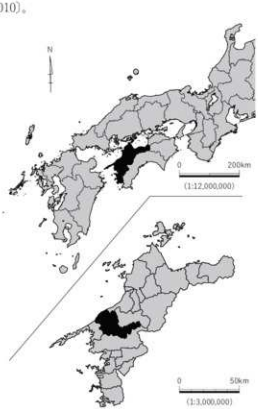



図1-01　大洲市位置図

## 2．歴史的環境

**旧石器時代**　低丘陵地の上須戒地区で、旧石器時代にさかのぼると考えられる石器が数点採集されている。また、肱川中流域右岸の長瀬遺跡では、角錐状石器が採集されている。今のところ市内で確認されている旧石器資料はわずかだが、肱川流域で主要石材となる赤色珪質岩は、神南山とその周辺で産出することが知られている。このため、近年では石材や集団の移動についても言及されるようになってきた。

**縄文時代**　新谷地区の田合遺跡で縄文時代早期の押型文土器が出土するほか、石鏃、トロトロ石器などの石器も出土している。また、柚木遺跡では新冨士橋架橋工事の際、河床面下 13 ～ 15m で押型文土器が出土したとされる。前期～中期の遺物は、今のところ確実な出土例がない。後期は、田合遺跡、慶雲寺遺跡などで沈線文土器片が採集されているほか、常森遺跡では磨製石斧が出土したとされる。晩期については、慶雲寺遺跡で沈線文を施した深鉢が採集されている。

また、山間部に位置する馬場ノナル遺跡、長瀬遺跡では、サヌカイト、姫島産黒曜石、チャートなどの石鏃や剥片などが採集されている。これら資料は、これまで縄文時代前期と評価されてきたが、時期の判明する土器が採集されておらず、詳細は不明である。また、近年では、山鳥坂ダム建設工事に伴う試掘調査によって岩谷岩陰遺跡の存在が明らかになっており、ここでは縄文時代後期の厚手無文土器数点と赤色珪質岩剥片とが出土している。

**弥生時代**　市内の弥生時代遺跡は、大洲盆地の縁辺部に形成される傾向にあり、盆地底部は少ない。これは、肱川による度重なる氾濫が要因のひとつと考えられる。十夜ヶ橋遺跡などは氾濫原中央に位置する遺跡で弥生土器が出土しているものの、これまで遺構は発見されていない。

前期の資料は限られるが、慶雲寺遺跡で遠賀川式土器の壺、甕が採集されている。ただし、こうした北部九州的な資料の流入は例外的であり、定着はしない。高速道路建設に伴って調査された底なし田遺跡では、包含層ではあるものの、まとまった資料が出土している。土器は前期末から中期初頭に比定されるものが大半で、南予から土佐にかけて分布する地域色の強い「西南四国型甕」も多数出土している。遺構に伴わない包含層出土ではあるものの、南予における基準資料のひとつとなっている。

中期になると、全体的に遺跡の数が増加する。山腹や高台に形成されるものが多く、麓からの比高差はおおよそ 100m 以内におさまる。元城跡、中山東遺跡、大叉遺跡などが該当し、都谷遺跡や石斧生産で知られる村鳥宮の首遺跡も当てはまる。元城跡や田合遺跡では、瀬戸内海沿岸部を中心に分布する凹線文土器が出土し、大叉遺跡では東九州の影響を受けたと考えられる重弧文の壺が出土するなど、さまざまな地域との交流・交易を示唆する資料も出土している。

後期は遺跡数が減少に転ずる。田合遺跡や中山東遺跡などで土器が採集されているが、中期ほどの量ではない。

大洲盆地以外では、肱川河口部右岸の山腹で、弥生土器数点を発見したという新聞記事が残る（昭和 18（1943）年）。ただし、現在までにこの採集資料は伝えられず、実態は不明である。

**古墳時代**　古墳時代の集落遺跡は、今のところ発見されていない。矢落川遺跡で須恵器片や土師器片が出土したとの報告もあるが、出土状況など詳細は不明である。

大洲市内で現在までに確認されている古墳は、久米地区の阿蔵古墳 1 基、新谷地区の田合古墳 2 基（1 号墳、2 号墳）、塚穴古墳 1 基の 4 基であり、出土遺物や石室形態から、いずれも古墳時代後期に属すると考えられる。

大正 8（1919）年に調査された阿蔵古墳では、須恵器のほか、鉄剣や金環などが出土している。田合 1 号墳は、直径約 10m の円墳で墳丘を周溝が囲繞する。内部主体は両袖式の横穴式石室であ

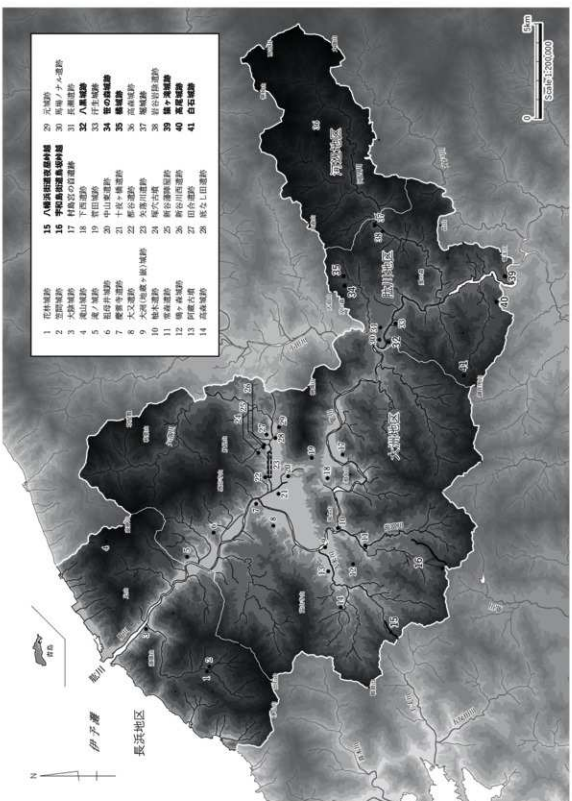



図 1-02　調査対象と市内主要遺跡

り、調査時には下半部のみ残されていた。石室内の出土遺物は須恵器提瓶・横瓶・短頸壺・坏・蓋、土師器甕、鉄製刀子・耳環などで、時期は6世紀後半に位置付けられている。墳形は不明だが、2号墳も部分的に掘削されており、こちらも両袖式の横穴式石室と考えられる。塚穴古墳は、大洲市内で現存する唯一の古墳である。墳径約10mの円墳で、内部主体は横穴式石室である。出土遺物は今のところ確認されていない。

**古代**　大宝律令による国郡里制の制定を受け（大宝元（701）年）、伊予国南部に宇和郡が設置される。貞観8（866）年には、組織再編によって宇和郡の北部が分立し、喜多郡が成立した。喜多郡は、矢野郷、久米郷、新屋郷の3郷からなり、このうち久米郷と新屋郷とが現在の大洲市域に相当する。

『扶桑略記』には、承平4（934）年、藤原純友の乱に乗じた海賊が、喜多郡の不動穀（公的な貯蔵米）3千石あまりを奪取したという記録も残る。

大洲地域における古代の考古学的資料は少ない。ただし、大又遺跡と新谷川西遺跡とでは、緑釉陶器、赤色塗彩土師器、暗文入り土師器などが出土しており、官衙のような公的施設が付近に存在した可能性を示している。

**中世**　承久3（1221）年の承久の乱前後に、宇都宮氏が伊予国守護として任官する。宇都宮氏は、代々伊予国守護のほか喜多郡地頭職を与えられており、喜多郡は宇都宮氏の一族の所領であった。元弘3（1333）年の鎌倉幕府倒壊の際には、喜多郡地頭宇都宮貞泰の代官などが反幕勢力と激しく戦ったものの、結果的に宇都宮氏は元弘の乱によって守護の地位を追われている。しかし、宇都宮氏一族は、喜多郡地頭としての勢力は残しつつ、室町、戦国期には有力な国人領主となった。宇都宮氏の居城は、地蔵ヶ嶽城（のちの大洲城）とされる。

戦国期における喜多郡は、宇都宮氏を中心とする多くの在地領主が存在したほか、喜多郡の北にある河野氏、南にある西園寺氏に挟まれており、緊張の絶えない地域であった。永禄11（1568）年には、喜多郡と宇和郡との境界にあたる鳥坂峠において、河野氏・毛利氏と宇都宮氏・土佐一条氏との間で、「鳥坂合戦」が勃発している。この合戦は、南予としては戦国期最大の衝突として位置付けられている。合戦の背景には、（1）河野氏が宇都宮氏に対して任官妨害をしたこと、（2）南予の国郡境目の小競り合いが複雑に発展したことなどの要因が考えられている。

この合戦に敗退した宇都宮氏と一条氏は衰退することとなり、宇都宮氏の求心力を失った喜多郡は、中小の在地領主が乱立するようになる。そのため、肱川下流域では、河野氏・毛利氏に帰属する領主が現れるようになる。とくに、宇都宮氏に従って下野国から移ってきたとされる津々喜谷氏は、南北朝時代よりこの地域で活動していた肱川下流域の有力領主である。肱川中流域では、大野氏のように、土佐の長宗我部氏と結び付く領主も現れている。

天正3（1575）年には、長宗我部元親が土佐国を統一し、さらには国境を越えて喜多郡・宇和

写真1-01　塚穴古墳 石室内部

写真1-02　滝ノ城跡と肱川

郡にも侵攻している。とくに宇和郡では、西園寺氏らが一進一退の攻防を続けたものの、三滝城(西予市城川町)が攻略され、御荘(愛南町)や三間(宇和島市)が制圧されるなどしており、結果として西園寺氏は長宗我部氏に服属している。

以上のような争乱を背景に、大洲地域には大小さまざまな城館が築かれている。大洲地域の城館跡は、大半が山城である。こうした山城は、河川沿いや交通の要衝となる地点に集中して立地する傾向にあり、基本的に比高差は200mを超えない位置にある。なかには、地蔵ヶ嶽城、菅田城、祖母井城、滝ノ城、大除城など、地域支配の拠点となる城もある。一方、標高820mの河辺高森城、標高726mの滝山城などは、突出して高い地点に築城されているが、これは遠方を見通すことができるという地理的特性を活かし、周辺の警戒や監視の役割を担ったことが想定されている。

このほか中世喜多郡の情勢については、津々喜谷氏の菩提寺である西禅寺に残された『西禅寺文書』(愛媛県指定有形文化財)にみることができ、当時の情勢を考察するうえで基礎的な資料となっている。ただし、中世喜多郡について記された史料はまとまっておらず、考古学的資料も限られている。このため、当時の状況を探るには、『大洲秘録』や『大洲舊記』など江戸期以降に編纂された記録類に依拠せねばならないことが多い。

**近世**　天正13(1585)年、豊臣秀吉による四国征伐により、大津城(地蔵ヶ嶽城の後身、現在の大洲城)は小早川隆景が統治する。天正14(1586)年には、伊予国内の城郭整理がおこなわれ、祖母井(祖母井城)、滝之城(滝ノ城)、下須戒(大除城)の統合などが命じられるなか、大津城は存城となった。以降、戸田勝隆、藤堂高虎、脇坂安治・安元が入城している。なお、大津城の近世城郭化は、藤堂高虎以降におこなわれたと考えられているが、明確な時期を示す史資料が残されておらず、諸説紛々とした状態にある。元和3(1617)年、伯耆国米子藩から加藤貞泰が大津城へ入城すると(6万石)、以降は明治期にいたるまで、大洲藩は加藤家が13代にわたって統治することになる。なお、「大洲」という名称の初出は、万治元(1658)年を待たねばならない。

寛永16(1639)年には、藩内分知のかたちで新谷藩(1万石)が成立している。

考古学的調査は、大洲城跡や新谷藩陣屋跡などでおこなわれている。平成11(1999)年に実施された大洲城天守跡の発掘調査では、天守の建替え痕跡が確認され、新旧2時期にわたる天守の存在が想定されている。また、豊臣秀吉や秀吉直臣の居城で出土例がある菊紋瓦なども発見されており、大洲城が重要な城郭に位置付けられていたと考えられる。このほか大洲城跡では、平成29(2017)年から断続的に石垣保存修理工事が実施されており、絵図に描写のない石垣の存在が明らかになるなど、現在も新たな成果があがっている。新谷藩陣屋跡では、陣屋内の建物礎石を検出し、また、評定所や調見所であった麟鳳閣(愛媛県指定有形文化財)に関連する石敷遺構を検出するなどの成果がある。

写真1-03　大洲城跡

写真1-04　麟鳳閣(新谷藩陣屋跡)

【参考文献】

坂野靖行・水野清秀・宮崎一博　2010『大洲地域の地質』地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅、高知（13）第 59 号、NI-53-34-7）、独立行政法人 産業技術総合研究所 地質調査総合センター

# 第２章　旧街道・遍路道の調査

藏本　諭

## １．調査の経緯・目的・経過

（１）調査までの経緯・調査目的

いわゆる四国八十八箇所とは、四国４県に点在する、弘法大師にゆかりのある88か所の寺院（霊場、もしくは札所）のことである。この四国八十八箇所を巡拝することを「四国遍路」や単に「遍路」、「四国巡拝」などと呼ぶ。現在では、徳島県鳴門市の第１番札所・霊山寺を始点とし、四国を時計回りして各札所を巡り、香川県さぬき市の第88番札所・大窪寺で結願するのが一般的である。大洲市に四国八十八箇所の寺院は所在しないが、四国別格二十霊場である出石寺（大洲市菅生）と永徳寺（十夜ヶ橋、大洲市東大洲）の２寺を擁し、参拝客も多い。

平成18（2006）年から、四国４県では「四国八十八箇所霊場と遍路道」の名称で、寺院や遍路道などの世界遺産登録を目指している。同年、四国４県は共同で「四国八十八箇所霊場と遍路道」を、世界文化遺産登録の前段階となる「暫定リスト」へ記載することを文化庁などに提案したが、これは継続審議となった。翌平成19（2007）年、四国４県のほか、四国遍路に関係する市町村も加えて「暫定リスト」記載を再提案したが、ここでもリスト記載までにはいたらなかった。しかし、文化審議会世界文化遺産特別調査委員会からは、「生きている伝統」を表す資産として価値が高いとの評価を受け、今後「提案書の基本的主題を基に、提案地方公共団体を中心に作業を進めるもの」として「カテゴリーⅠａ」に位置付けられた。

ただし、「暫定リスト」記載までには課題も多い。現状として寺院や遍路道など構成資産の多数が文化財として保護されておらず、構成資産も広範囲にわたっており、これら資産を文化財指定・選定することで保護措置を図ることが求められている。加えて、「四国八十八箇所霊場と遍路道」が、世界的にも巡礼の典型例であるということ（普遍的価値）の証明も求められている。とくに前者の課題について、遍路道を中心とした資産の多くが文化財として保護されていないことを重くみた愛媛県教育委員会は、平成22（2010）～23（2011）年度にかけて「愛媛県歴史の道総合計画」を策定し、基本構想と詳細構想とを報告書として刊行した〔愛媛県教育委員会 編 2012a,b〕。

この報告のなかでは、「歴史の道や沿道文化財等の遺存状況と復元度の区分」を、文化財として重要なものから順に、タイプⅠ～Ⅴに分けている。大洲市内では、（１）大洲城下から宇和島城下にいたる街道として機能し、同時に、第43番札所・明石寺（愛媛県西予市）と第44番札所・大寶寺（愛媛県久万高原町）とを結ぶ遍路道としても機能した「宇和島街道」のうち鳥坂峠越の部分、（２）大洲城下から八幡浜へいたる街道として機能した「八幡浜街道」のうち夜昼峠越の部分、の計２か所が、タイプⅠ（道が往時の形状をとどめ、将来の指定を含め史跡である道を核として周囲の景観の活用を図るタイプ）と評価された。

今回の調査は、文化財としての内容・価値を見定めることが目的であるほか、将来的な史跡指定を見据え、保存・活用に向けた方針を定めることを目的としている。

なお、本書における各道の名称や調査範囲などについては、各道の項目で説明する。

（２）調査の方法

調査では、（ⅰ）道とその周囲の測量調査、（ⅱ）試掘調査、（ⅲ）石造物などの記録、を実施した。

（ⅰ）では、遍路道・旧街道における里道部分とその左右10m程度の範囲を中心に地形測量し、道に関連する社寺等も地形測量した。地形測量と

同時に基準点測量もおこない、３級および４級基準点を道沿いに打設している。地形図は 1/500 の精度で作成し、等高線は 1m 毎で出力した。なお、地形の理解を促すため、測量範囲外の部分については、大洲市農林水産部農林水産課より提供を受けた等高線図を合成している。

（ⅱ）では、主に街道上に複数の試掘坑（トレンチ）を設定し、遺構の検出や道の構造解明を目指した。掘削はいずれも人力でおこない、埋め戻しも人力でおこなった。これら試掘調査における測量は、（ⅰ）で打設した基準点をもとに、トータルステーションを用いて実施した。

（ⅲ）では、道沿い、もしくは、その周辺に残された遍路や交通に関係するものを調査対象とした。とくに、近世にさかのぼる石造物については、可能な限り実測と拓本とによる記録も採った。

（３）調査の経過

「宇和島街道鳥坂峠越」および「八幡浜街道夜昼峠越」は、令和元（2019）～３（2021）年度の３カ年で調査を実施した。

「宇和島街道鳥坂峠越」は、令和元（2019）年度に調査を開始した。株式会社ダイニンに測量調査業務を委託し、７～９月にかけて測量調査を実施した。次いで、翌１月～３月にかけて、試掘調査および沿道の石造物等の調査も実施した。なお、沿道に付随する小社殿（日天社）と周辺については、令和２（2020）年２月に調査を実施している。図面などの整理作業は令和３（2021）年度に終了した。

「八幡浜街道夜昼峠越」は、令和２（2020）年度に調査を開始した。「宇和島街道鳥坂峠越」と同様、株式会社ダイニンに測量調査業務を委託し、11～翌３月にかけて測量調査を実施した。試掘調査および沿道の石造物などについて調査は、令和３年１～２月、11 月にかけて実施した。図面などの整理作業は令和３（2021）年度に実施し、調査を終えた。

写真2-01　現地確認の様子(宇和島街道鳥坂峠越)

写真2-02　現地確認の様子(八幡浜街道夜昼峠越)

写真2-03　試掘調査の様子(八幡浜街道夜昼峠越)

写真2-04　現地指導の様子(八幡浜街道夜昼峠越)

## ２．宇和島街道鳥坂峠越について

（１）道の名称と調査対象

愛媛県内には、「松山の札の辻を基点として他国に伸びる讃岐街道・土佐街道一三坂越え一・大洲街道等と、他の場所を起点としてのびる土佐街道一笹ヶ峰越え一など12の街道と、それらの街道を利用しつつ各札所へ派生する遍路道」が残されている〔愛媛県教育委員会 編 2012b〕。今回調査するのは、大洲城下から宇和島城下へと延びる街道である。ここでは、便宜的に「宇和島街道」と呼ぶ。この街道が歴史的にどのような呼称であったかを記載した文献は極めて少なく、『加藤家年譜』に「宇和島往還鳥坂路」の記述が表れる程度である。ただし、年代の記銘はないものの、大洲市柚木の国道沿いには「右 宇和島道」と記された道標が残されており、古くから大洲と宇和島とを結ぶ街道と認識されていたことは明らかである。加えて、大洲もしくは松山札ノ辻に近い側を始点とし、終点の宇和島の名が街道に冠されていたこともわかる。

この宇和島街道の一部は、遍路道としても利用されており、第43番札所・明石寺と第44番札所・大寶寺（菅生山）とを結んだ「大寶寺道」の一部と重複した区間がある。この調査は、前項で既述のとおり、四国遍路に焦点を当てた調査となっていることから、本項では始点を明石寺側、終点を大寶寺側として報告する。

宇和島街道と大寶寺道とが重複する区間は、西予市宇和町卯之町～鳥坂峠～大洲市大洲（大洲城下）であり、おおよそ現在の国道56号線が並行する。なかでも往時の形状を比較的留めているのは、西予市宇和町久保にある西予市指定有形文化財「大洲藩鳥坂口留番所」（始点）～鳥坂峠～大洲市野佐来字札掛にある旧南久米小学校付近（終点）の延長約4.59kmで、２市にまたがっている。宇和島街道のなかでも、この区間を「鳥坂峠越」と称することとし、このうち調査対象は大洲市側の約2.56kmとする。西予市側の宇和島街道鳥坂峠越については、西予市教育委員会が調査を実施した〔兒玉編 2020〕。

（２）宇和島街道鳥坂峠越の現状

宇和島街道鳥坂峠越の始点である西予市指定有形文化財「大洲藩鳥坂口留番所」は標高約289.9mであり、宇和盆地の北端、一級河川・肱川の最上流部に近接する。始点からは進路を北北東にとり、標高500m前後の山稜に対して直交するように鳥坂峠（標高466.1m）へ向かう。このため、鳥坂峠を挟んで西予市側の鳥坂峠越は急坂が続く。

鳥坂峠からは進路を東北東にとる。峠を下りはじめた直後は急坂になるが、以降は日天社まで緩やかに下る。峠から日天社までは、約630mである。日天社は、標高約410mの尾根上に造営された神社で、この神社についてはのちに報告する。現在はスギ、ヒノキが植林され視界を遮るが、当時は大洲盆地の一部を見渡せられる視点場であったと思われる。また、地元住民によれば、直線距離にして約11km離れた出石山山頂（標高約812m）にある出石寺本堂も目視できたという。

日天社からはコンクリート舗装された道を下り、西予市・大洲市境界にいたって林道と合流する。林道との合流直前に、切通の道が見える。この約230m間は急勾配となっている。

林道を約70m進み、北側に再びコンクリート舗装された小径へと進路を変え、約230m下ったところで旧県道（地元では「大正道路」とも呼ばれる）と合流する。日天社からのコンクリート舗装は、イノシシが道を荒らしてしまうことを防ぐために整備されたという。ここから終点まで尾根筋を下る経路となる。旧県道との合流地点付近では、昭和半ばに植栽されたというクロマツ数本が生長している。

旧県道と合流してからは、一次的にこの道を進む。この間は旧県道の建設によって、峠道が大きく改変されてしまっている。合流地点から約110m下った地点で、法面の上側に峠道が続いて

いる。現状は、この先の古い建設残土置場から峠道に復帰する経路をとる。

ここからは尾根筋のピークに向けて進路をとるが、頂部を避けつつ、比較的緩い上り下りを繰り返しながら進んでゆく。途中、尾根の傾斜が急な部分は、蛇行しながら高度を下げてゆく。峠道への復帰地点から約1.64kmは、比較的歩きやすい道が続く。

終点に近づき、尾根の端部に差しかかると、蛇行しながら高度を下げる旧県道と4度交差し、終点にいたる。この区間は急坂が続く。終点まで残り約90mの地点西側に、現在は無住となってい

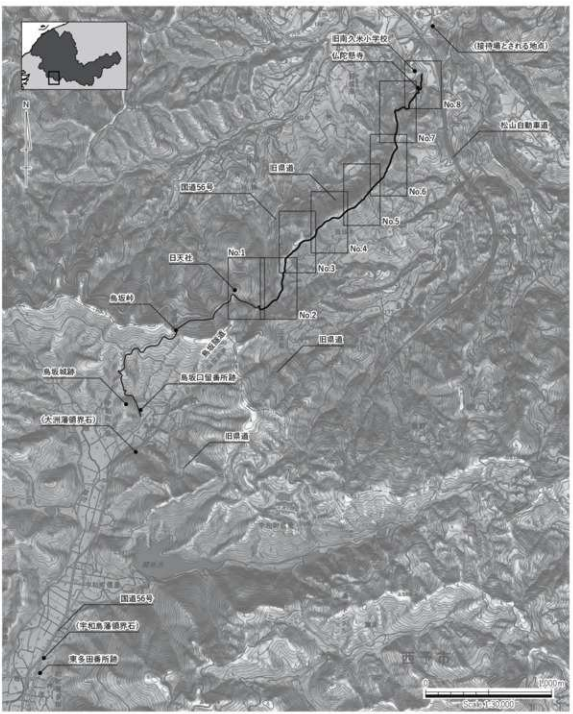


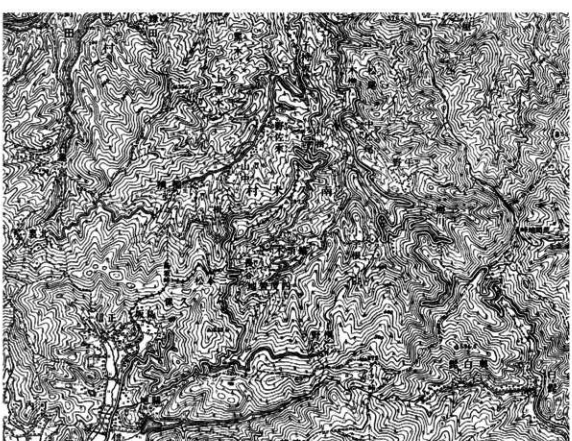

図2-01　宇和島街道鳥坂峠越全体図（カシミール3Dを利用して作成）

る番外札所・仏陀懸寺がある（写真 2-05）。鳥坂峠から終点までの比高差は、約 312m であり、終点は始点よりも約 135m 低い。また、終点から現在の国道 56 号を約 400m 北へ進んだところに、かつてお接待をしていたと伝わる地点がある。ここには、弘法大師像や十一面観音像などの石造物が集められている（写真 2-06）。

地質学的には、三波川変成帯と秩父帯との境界付近に位置し、道の大半は中生代前期白亜紀～新生代古第三紀に形成された泥質片岩上を通る。そのため、露頭などは風化作用が進行しやすく、道の一部は地滑り危険個所や急傾斜地崩壊危険個所に指定されている（2021 年現在）。

（３）宇和島街道鳥坂峠越の歴史的環境

道が形成された時期は明らかではない。しかし、古代官道である南海道は、道の形成時期を推測するうえで参考となる。寺内浩氏によれば、南海道の経路は『延喜式』で規定されるよりも以前に、２度の変遷があったという。当初、南海道は、阿波国府から讃岐国府～伊予国府～土佐国府を繋ぐように設定されており、「伊予国府からは、高輪半島の西岸から松山平野に入り、そこから現在の国道五六号のルート、すなわち大洲・宇和島・宿毛・中村を通って土佐国府にむかった」とされる〔寺内 2003〕。次いで、養老２（718）年から設定された経路も、阿波国府から土佐国府を直接つなぐ経路が新設された以外は大きな変更はなく、８世紀前後には鳥坂峠越が利用されていた可能性も考えうる。なお、延暦 15（796）年以降、伊予国府から宇和島を経て土佐国府にいたる経路は廃止されていることが『延喜式』より明らかになって



Stanford Digital Repository (https://purl.stanford.edu/xb337qj2953)
大日本帝國陸地測量部、五万分一地形圖「卯之町」より抜粋
明治37(1904)年測図、昭和８(1923)年修正
図2-02　鳥坂峠越 旧版地形図

いる。

中世における道の記録はほとんど残されていない。しかし、永禄 11（1568）年２月、鳥坂峠や道のそばに築かれた鳥坂城を舞台として、宇都宮氏・一条氏と河野氏・毛利氏とによる軍事衝突が発生しており（鳥坂合戦）、この地域が地理的にも軍事的にも重要であったことがわかる。

近世になると、絵図や文献から鳥坂峠越の様子がうかがえる。『寛永伊予国絵図』（寛永 10（1633）年ごろ）には「戸坂（鳥坂）上下壱リ程」という記載がみられ、『元禄伊予国絵図』（元禄 15（1702）年）や『天保伊予国絵図』（天保９（1838）年）などの国絵図では、太い朱線で道が描かれており、幹線として認識されている。

また、上記の国絵図や『伊予宇和郡東多田村絵図』（江戸期）では、東多田村（西予市宇和町東多田）に宇和島藩の番所が描かれている。大洲藩の番所は、当初は鳥坂峠に設置され、天保年間（1830 ～ 1844 年）から明治初期にかけては現在の「大洲藩鳥坂口留番所」で機能したと伝えられる。峠や山棱より南側にかけて大洲藩（正信村、鳥坂村）が支配していたことになり、番所から番所の間は、両藩の緩衝地帯となっていた。ただし、『元禄伊予国絵図』などには東多田村以外に番所の表現はなく、また、文献にも記載がないため、史資料からその実態を把握することは困難を極める。

現在、鳥坂峠には約 140 ㎡の平坦面が広がり、過去の聴き取り調査では茶屋や民家が並んでいたと伝わる〔愛媛県生涯学習センター編 2002〕。この平坦面の西側および南側には石垣が残されている。南側の石垣は道を挟むようにして築かれており、通行を遮断するような門などの建造物の存在も推測される。一部は残念ながら崩落してしまっているが、高さ約５m を測る（図版 5-5）。建造物の存在を示すような痕跡は発見されなかったが〔兒玉編 2020〕、これほどの規模を誇るため、史資料には描かれていない大洲藩側の番所であった可能性も示唆される。

番所は明治２（1869）年に廃止され、以降、通行は自由化された。両藩の境界は町村制にも引き継がれたが、昭和 33（1958）年に境界線が変更となり、大洲市正信と鳥坂の一部が東宇和郡宇和町（現・西予市宇和町）に編入され、現在の境界が確定している。

遍路の実際の経路については、宇和島藩による遍路統制からわかる。宝暦４（1754）年以降、宇和島藩は遍路の通行等に関する法令を定めている。とくに、明和６（1796）年の法令では、宇和島藩領の出入口が東多田、小山（南宇和郡愛南町）、三机（西宇和郡伊方町）の３箇所に定められた。宇和島藩領の出入口はこの他にも設置されているものの、この法令に従えば、43 番札所・明石寺～ 44 番札所・大寶寺間は、必ず鳥坂峠越をしなければならないことになる〔内田 2009、井上 2020〕。

鳥坂峠越による遍路の様子は、手引きや日記などの記録にも残る。澄禅が記した『四国遍路日記』（承応２（1653）年）には、「ヤマヲ出テ卯ノ町ト云所ヲ行テタダ（東多田）ト云所ニ至ル。是迄伊達殿（宇和島藩）領分ナリ。爰ニ関所在、（中略）

写真2-05　現在の仏陀懸寺

写真2-06　お接待場とされる地点の石造物

夫ヨリ戸坂（鳥坂）ト云所ニ至ル、是ヨリ西六万石加藤出羽守殿（大洲藩）領分也。（中略）十七日宿ヲ出、彼戸坂（鳥坂）ヲ上リ峠ニ至、夫ヨリ一里余下ル他、下リ下リ大津（大洲）ニ至。」と記されている。また、眞念による『四国邊路道指南』（貞享4（1687）年）には、「〇東たゞ（東多田）村番所切手改〇ときか（鳥坂）村こゝにうは嶋（宇和島）と大ず（大洲）領とのさかひ過て戸坂（鳥坂）ざか二里有八町ほどのぼりそれよりくだる」との記載があり、これはおおむね左記の絵図の描写と一致している。『四国遍礼名所図会』には、「峠より左ニ伊づし観音山（出石寺）見ゆる。豊後日向路はるかに見ゆる。十丁程下リ大師加持水左の方五間下リ有リ、庵常接待有り大師安置、爰ニて支度、加持水庵のわきに有り。」との記載がある。この「大師」「常接待所」は、現在の仏陀懸寺を指している可能性がある。

この仏陀懸寺は現在無住であり、残念ながら荒廃してしまっている。本寺の由緒について詳細は不明だが、空海が四国巡錫の際、この地で仏像を松の枝にまつり、利益があったため開基されたと伝わる。明治期の廃仏毀釈によって一時廃寺となるが、大正11（1922）年に第61番札所・香園寺（愛媛県西条市）から子安大師を迎え、昭和17（1942）年に大願寺（大洲市田処、廃寺）より本尊の不動明王が移されたという。境内の法面には井戸が穿たれ、宝暦7（1757）年作と思われる大師像がまつられる。この仏陀懸寺付近には遍路宿も設けられていたため、当時は多くの遍路で賑わったという。

鳥坂峠越は宇和島藩の参勤交代にも用いられていた。現在、宇和島城下から大坂や江戸に向かう経路は5本が想定されており、そのうちの1本が鳥坂峠を越える。宇和島城下から卯之町、鳥坂峠、犬寄峠（伊予市）を経由して波止浜（今治市）に至り、海路で室津（兵庫県たつの市御津町）に到着後、ふたたび陸路で大坂に向かう経路をとる。

近代以降は、地形図に鳥坂峠越が描かれるようになる。明治37（1904）年の地形図からは、調査対象区間のほとんどが並木道になっていたことがわかる（図2-02）。この並木はマツであり、『加藤家年譜』によれば、文化5（1808）年に第10代大洲藩主の加藤泰済が植栽させたものと伝わる。明治12（1879）年6月の行政文書『道路橋梁取調書』には、沿線各村の所有する本数が明記されている。このマツは、戦時中の供出で多数が伐採されており、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）が昭和22（1947）年に撮影した航空写真では、木立がまばらに並ぶ様子がうかがえる。昭和33（1958）年には、仏陀懸寺境内のクロマツ（「札掛の松」）、および、旧南久米小学校校庭に残された7本のクロマツ（「鳥坂の並松」）が、当時の峠道の景観を留めることなどを理由として大洲市指定天然記念物となり、文化財的に保護されることとなった。樹高は高いもので約37mを測ったという。しかし、昭和40年代から全国的に広がるマツクイムシ被害を受け、いずれも昭和51（1976）年までに枯死、指定解除となっている。また、戦時中の供出では、樹根から掘り起こされ松根油が採取されたことから、切り株もほとんど残されていない。現在は旧県道との合流地点付近で、昭和期に植樹されたという比較的若いクロマツ数本がそびえるのみとなっている。

明治11（1878）年に発行された『愛媛縣管内全圖』には縣道三等、明治17（1884）年に発行された『愛媛縣管内地圖』には縣道二等および郵便路との表記があり、近代以降も引き続き主要路として機能したことがうかがえる。

大正9（1920）年、自動車などの通行ができる県道（大正道路）が整備される。これは、西予市宇和町久保から鳥坂峠を東側へ迂回するように敷設され、峠や日天社を越えた地点で鳥坂峠越と交差し、終点まで並行するように延びている。昭和28（1953）年に二級国道197号、昭和38（1963）年に一級国道56号へ昇格しており、宇和島～宇和～大洲間における交通需要の高まりを反映している。昭和46（1971）年には鳥坂隧道を含めた道路改築事業が完成し、国道56号は現在の経路となる。一方、国道としての機能を譲った旧県道は、市道として存続しており、現在も地元住民の

生活道として重要である。

地元住民らの聴き取りによれば、旧県道の開通後も、バスなどの移動手段は便数が少ないうえに高額であったため、徒歩による移動で鳥坂峠越が利用されていたという。しかし、昭和10（1935）年前後より徐々に通行量は減少したという。

現在、鳥坂峠越の始点から旧県道との合流部分までは遍路を中心に利用されている。一方、合流部分から旧県道と並行している区間の大部分については利用者がなく、遍路には旧県道が利用されている。

## 3．宇和島街道鳥坂峠越の調査成果

（1）測量調査

鳥坂峠越については、これまで詳細な地形図が作成されておらず、道の詳細経路や高低差などを判読する資料がなかった。そこで、道と左右10m程度を1/500の精度で測量した。等高線の間隔は1mである。また、同時に道沿いには3級基準点(K)を4点、4級基準点(T)を76点打設している。先述のとおり、西予市側については西予市教育委員会が先行して測量調査を実施している〔兒玉編2020〕。

調査区間の全長は約2,564mである。西予・大洲市境界の標高は363.493m、終点付近の標高は153.066m(T76)で、平均勾配は約8.2%である。

鳥坂峠越は、鳥坂峠(標高466.136m)から日天社、大洲・西予市境界までの約860mは山腹を沿うようにして高度を下げる。途中の日天社は標高約410mにあり、約450m南側にあるピーク(標高約502m)から北側に突き出た尾根の先に立地している。日天社から大洲・西予市境界までは約230mと短いが、急坂が続いており、その勾配は約20.5%を測る。

日天社から市境界を通過してT5付近までは山腹を沿う経路をとるが、T5付近以降は尾根筋に沿う経路となる。しかし、尾根筋に連なるピークは避けるようにし、なるべく起伏の少ない経路が選択されている。T37付近は局所的に傾斜が急となり道も蛇行しているが、T5 ～ T60間、約1.94kmの平均勾配は約5.1%と緩やかである。

T60付近で尾根端部にさしかかり、ここから終点までは急傾斜が続く。T60 ～ T76間の平均勾配は約20.0%となり、それまでとは明らかに急となる。

なお、T32 ～ T38間とT57 ～ T60間とは、道が複数に分岐している。いずれも、本来は1本道であったと思われるが、植林や畑作などの便宜に供するため、後世の段階で新たに通されたものと考えられる。

既述のとおり、全体的に風化作用の進行しやすい地山に道が通されているため、道の周辺では小規模ながら崩落している箇所も少なくない。T55 ～ T56間では、道が約20mにわたって崩落しており、現在は迂回が必要となっている。

測量を実施した区間全体にわたり、直径2 ～ 3mの凹みが、道の両脇へ不規則に並んでいることが明らかになった。これは、前項で述べたマツの抜根痕跡と思われる。今回の地形測量の精度では捉えきれないような浅い凹みも多数存在しており、多くのマツが並んでいたことがわかる。

（2）街道部の試掘調査

鳥坂峠越の道上に10箇所のトレンチを設け、道の構造の把握、遺構の発見を試みた。

**1トレンチ(図2-11)**　大洲・西予市境界付近にあたり、標高は約369mである。切通の部分にトレンチを設定し、切通の断面や排水溝の有無などを調査した。

現地表は褐色腐植土であり、2層は角礫がまじった砂質土である。切通北側は、スギやヒノキの樹根が岩盤に侵入し、部分的に崩落している。2層は、こうした崩落土の堆積と考えられる。現地表から約20cm下で、地山(路面)を検出した。

路面に排水溝などはなく、法面下よりも幅員中

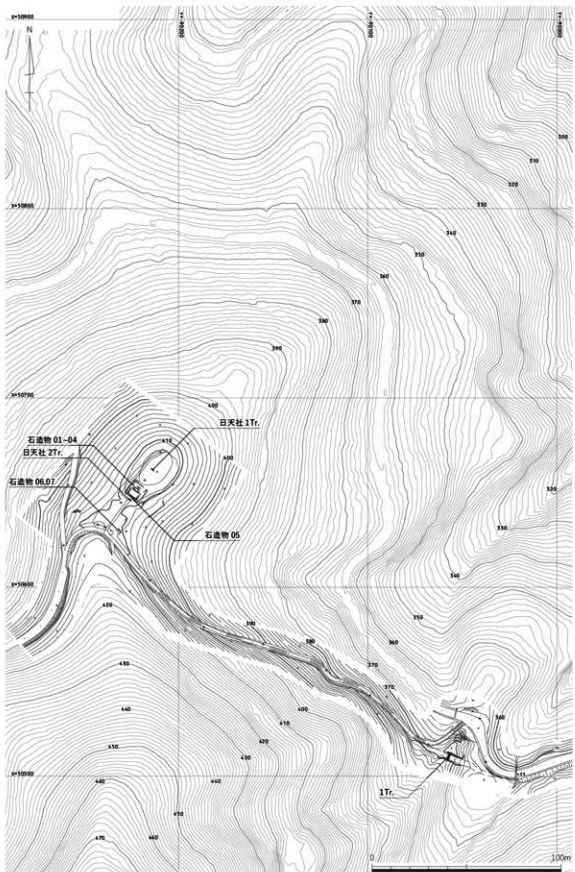



図2-03　宇和島街道鳥坂峠越地形図-No.1

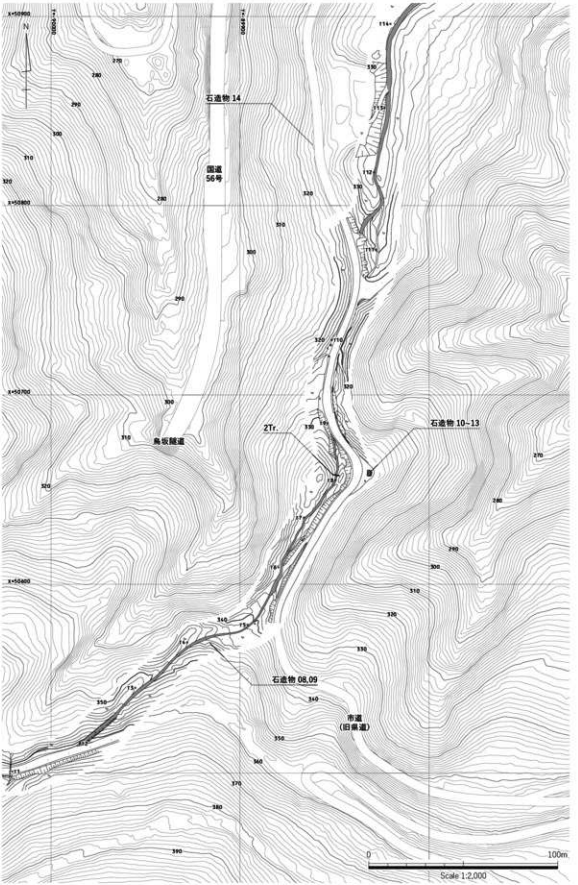



図2-04　宇和島街道鳥坂峠越地形図-No.2

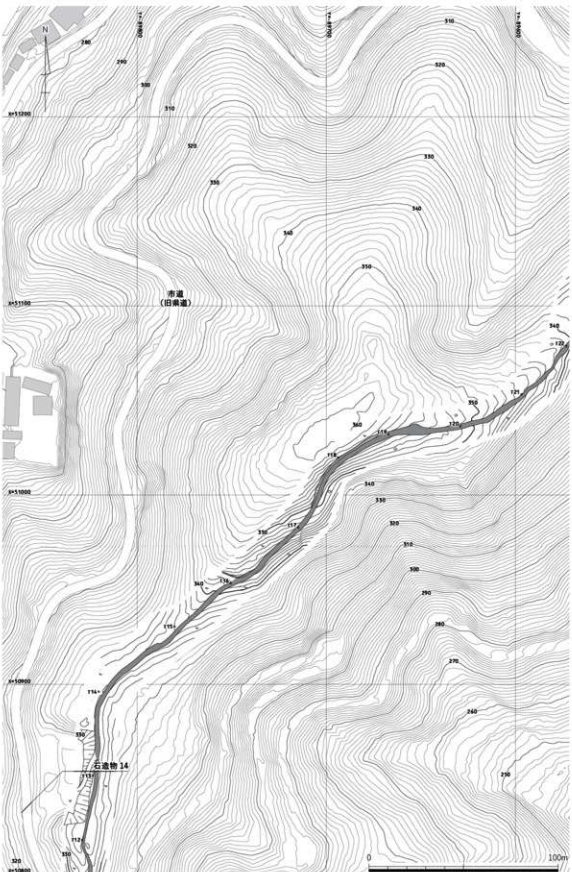



図2-05　宇和島街道鳥坂峠越地形図-No.3

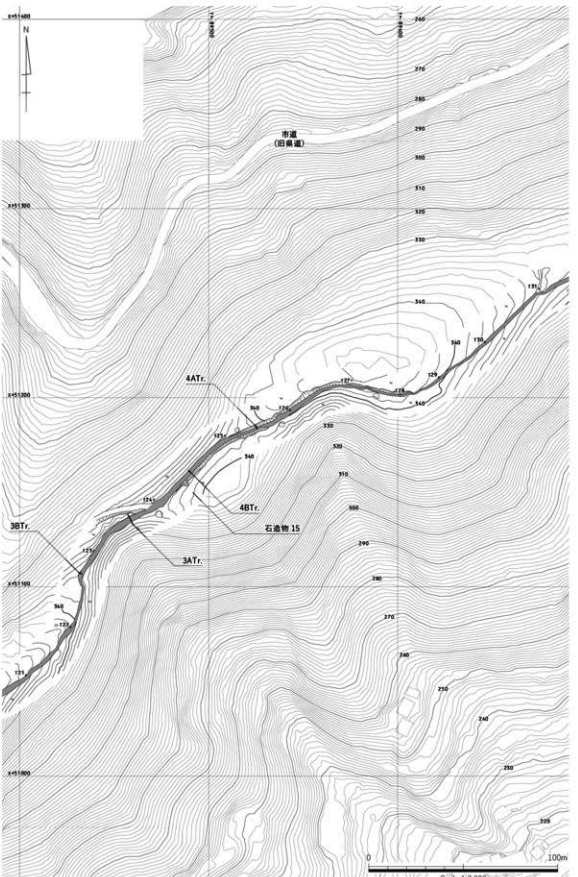



図2-06　宇和島街道鳥坂峠越地形図-No.4

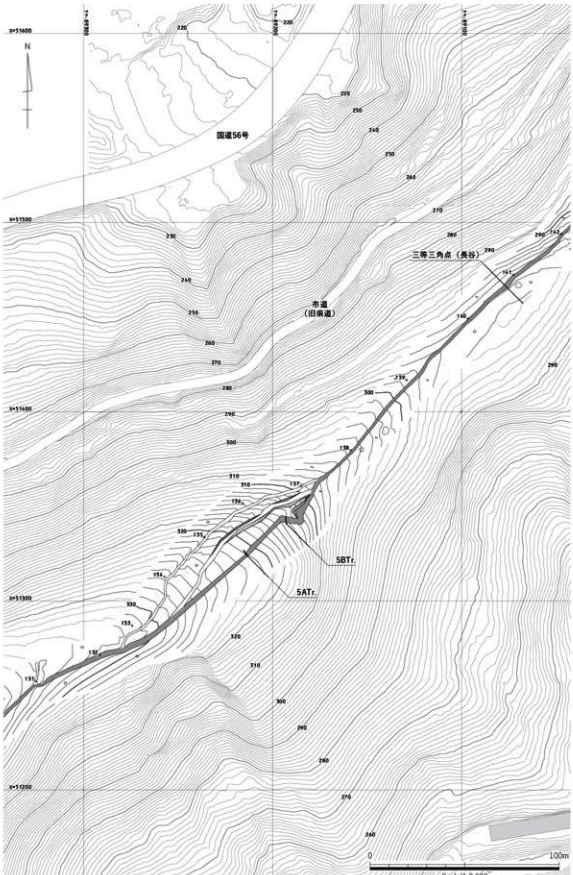



図2-07　宇和島街道鳥坂峠越地形図-No.5

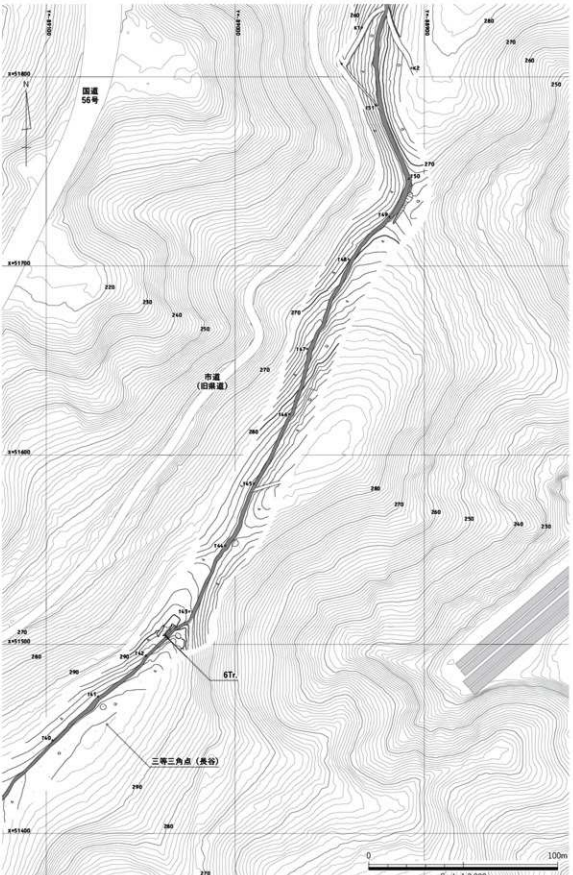



図2-08　宇和島街道鳥坂峠越地形図-No.6

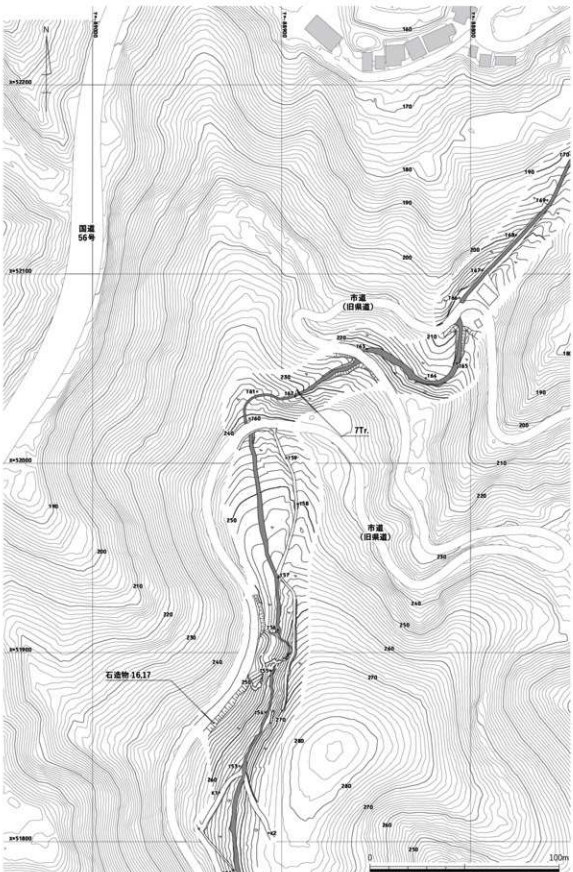



図2-09　宇和島街道鳥坂峠越地形図-No.7

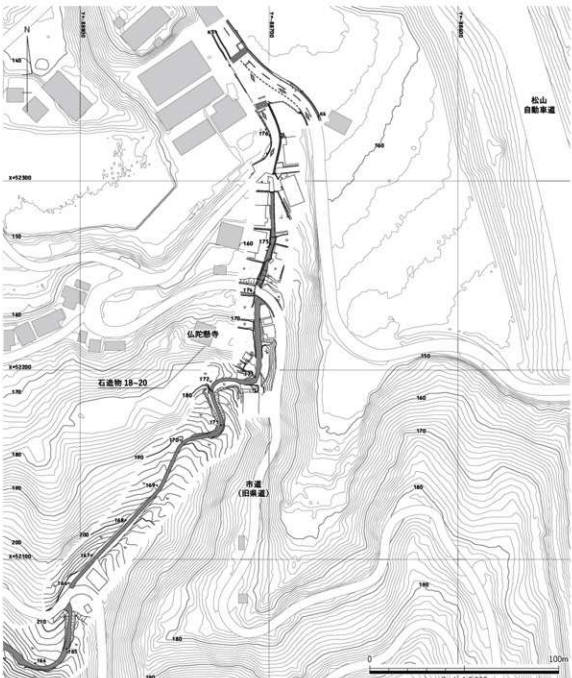



図2-10　宇和島街道鳥坂峠越地形図-No.8

央が約20cm低くなっている。切土法面の断面傾斜角は、南側が約74度、北側は一部崩落しているものの約60度である。南北ともに、路面から立ち上がってすぐはほぼ直角に立ち上がり、上に向かうにつれ傾斜が緩やかになっている。

出土遺物はなかった。

なお、地元住民の聴き取りによれば、この切通は、終戦直後に伐採したマツを運搬するために切り通されたもので、本来の道の経路ではないという証言がある。一方、この切通を通る経路が、元来の道であったという証言もある。残念ながら、今回の試掘調査の成果では、これら証言の検証に耐えうる手がかりを得ることはできなかった。

**２トレンチ(図2-12)**　鳥坂峠越と旧県道とが近

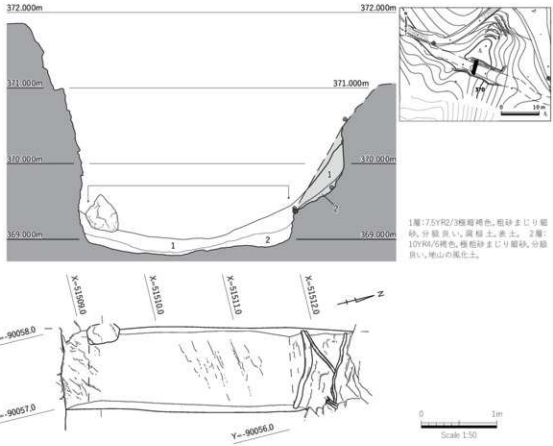



図2-11　鳥坂峠越 1トレンチ平面図・断面図

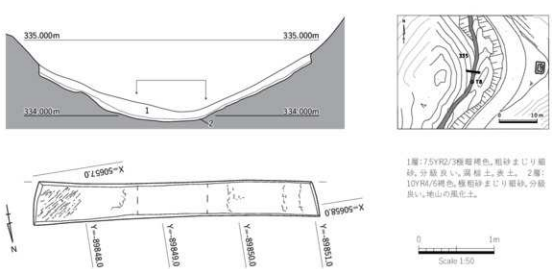
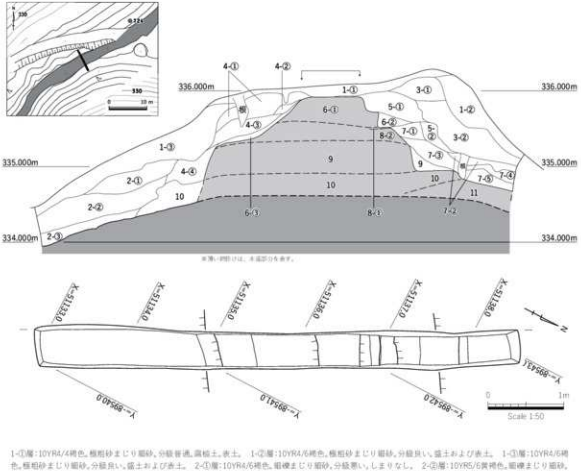



図2-12　鳥坂峠越 2トレンチ平面図・断面図




1-①層：10YR4/4褐色、極粗砂まじり細砂、分級普通、腐植土、表土。　1-②層：10YR4/6褐色、極粗砂まじり細砂、分級良い、盛土および表土。　1-③層：10YR4/6褐色、極粗砂まじり細砂、分級良い、盛土および表土。　2-①層：10YR4/6褐色、礫礫まじり細砂、分級悪い、しまりなし。　2-②層：10YR5/6黄褐色、礫礫まじり細砂、分級悪い、しまり弱い、傾斜などによる攪乱が目立つ。　2-③層：10YR4/3にぶい黄褐色、極粗砂まじり極細砂だが、極細砂の割合多い、分級普通、10層に似るが、しまりは10層ほど強くない。　3-①層：10YR5/6黄褐色、極粗砂まじり細砂、分級良い、盛土。　3-②層：10YR5/8黄褐色、極粗砂まじり細砂、分級普通、しまり強い、盛土。　4-①層：10YR5/8黄褐色、極粗砂まじり極細砂、分級良い、しまり強い、盛土。　4-②層：10YR4/6褐色、極粗砂まじり細砂、分級悪い、しまりなし。　4-③層：10YR5/6黄褐色、極粗砂まじり細砂、分級普通、しまり強い。　4-④層：10YR5/6黄褐色、極粗砂まじり極細砂、分級良い、しまり強い、盛土。　5-①層：10YR4/6褐色、極粗砂まじり細砂、分級良い、盛土。　5-②層：10YR4/4褐色、礫礫まじり細砂、分級悪い、しまりないが根根の影響あり、盛土か。　6-①層：10YR5/6黄褐色、礫礫まじり細砂、分級非常に悪い、しまり強固、地山由来の角礫状ブロック(φ0.5 ～ 1cm)が多数混入、盛土。　6-②層：10YR5/6黄褐色、極粗砂まじり細砂、分級良い、しまり強い、盛土か。　6-③層：10YR5/8黄褐色、極粗砂まじり細砂、分級悪い、しまり強固、鉄分の沈着が現状に広がる。　7-①層：10YR5/6黄褐色、極粗砂まじり極細砂、分級普通、しまり強い、盛土。　7-②層：10YR4/4褐色、極粗砂まじり極細砂、分級普通、しまり強い、盛土。　7-③層：10YR5/6黄褐色、極粗砂まじり細砂、分級普通、しまり強い、盛土か。　7-④層：10YR5/4にぶい黄褐色、粗砂まじり極細砂、分級良い、しまり強固、部分的に鉄分沈着のような斑紋がみられる、盛土。　7-⑤層：10YR5/6黄褐色、粗砂まじり極細砂、分級良い、しまり強い、盛土。　8-①層：10YR5/4にぶい黄褐色、極粗砂まじり細砂、分級悪い、薄層で、鉄分がしたような斑紋が結果に広がる。　8-②層：10YR5/8黄褐色、粗砂まじり細砂、分級良いしまり弱い、盛土。　9層：10YR4/4褐色、粗砂まじり極細砂、分級良い、しまり強固、盛土。　10層：10YR4/4褐色、極粗砂まじり極細砂、分級良い、盛土。　11層：10YR5/6黄褐色、極粗砂まじり極細砂、分級良い、しまり強い、盛土。

図2-13　鳥坂峠越 3Aトレンチ平面図・断面図

接して並行している部分に設定した。標高は約334mである。本来の道幅を確認するために調査した。

現地表は極暗色の腐植土であり、2層は褐色砂質土で、地山風化土の堆積と考えられる。現地表から約15 ～ 20cm下で路面(地山)を確認した。幅員は約0.9mであり、排水溝などの設備は確認できなかった。岩盤断面が緩やかに弧を描くようになっており、岩盤法面と路面との傾斜変換は判別しにくい。

出土遺物はなかった。

**3Aトレンチ(図2-13)**　尾根の頂部に設定し、標高は約336mである。「馬の背」と形容される痩せ尾根になっており、本来の道幅を確認するために調査した。

調査の結果、この地点は大きく盛土されていることが判明した。地山上に土台となる盛土(11, 10層)をのせ、その上に9，8層が盛土される。各層は上面が水平になり、断面が台形になるよう盛土され、いずれも強くしまる。8層上部には明き

しめられたような硬い薄層（８-①層）がのり、当時の地表面（路面）の可能性がある。この８-①層には、鉄分の沈着が認められる。

その後、この８層を拡張するように７層が盛られ、その上部に６層を盛土する。この６層も強くしまる。６-①層上面も水平になっている。６-③層下部は、８-①層のように鉄分の沈着が認められ硬くしまる。当時は地表面として整えられていた可能性がある。

５．４．３層は、６層を左右に拡張するように盛土する。２層は崩落土と思われ、１層は現地表である。１-②、③層は傾斜の急な法面にあたり、腐植土がほとんど堆積していない。これら層については、崩落土、もしくは、５．４．３層と同様に道幅を拡幅する意図の盛土と考えられる。

出土遺物はなかった。

**3Bトレンチ（図2-14）**　3Aトレンチと同じく、痩せ尾根上に設定し、標高は約338mである。3Aトレンチで確認した造成が、どの範囲まで広がっているかを確認するために調査した。

現地表から約15cm下で、７層を検出した。この７層は、強くしまる黄褐色砂質土で断面台形に盛土されており、3Aトレンチ６層と特徴が似ている。その左右には、道の拡幅のための盛土もしくは崩落土と思われる２～５層が堆積している。６層は、７層の左右でほぼ同一の土質であることから、７層下の盛土と考えられる。

２本のトレンチを調査した結果、3Bトレンチ～3Aトレンチ間とその前後は痩せ尾根となっているが、これは盛土による嵩上げの結果であることが明らかになった。

出土遺物はなかった。

**4Aトレンチ（図2-15）**　切通されている部分に設定した。標高は約338mである。道幅や排水溝等の有無を確認するために調査した。

現地表は暗褐色腐植土であり、２層は褐色砂質土で地山風化土の堆積と考えられる。３層は明赤褐色砂質土で、トレンチ東側の一部に堆積している。これは地山砕屑物の堆積と考えられる。これらの覆土を除去したところ、トレンチ両脇で排水溝と考えられる溝１条ずつを発見した。SD １は、幅約20cm、路面からの深さは約４cmと浅い。SD ２は、幅約30cm、路面からの深さは約10cmである。

なお、掘削により誤って一部を除去してしまったが、道路面に敷かれていた石敷も検出した。１～３cm程度の角礫であり、本来は道幅いっぱいまで敷き詰められていたと思われる。

出土遺物はなかった。

地元住民の聴き取りによれば、このトレンチ前後区間の道の両脇で、クワやタバコが栽培されていたといい、現在もその平坦面が残る。4Aトレンチ北側で、道の一部が狭くなっており、これは道の一部を畑として造成したためだという。本来は駕籠を４人で担いでも余裕のある幅員だったともされる。

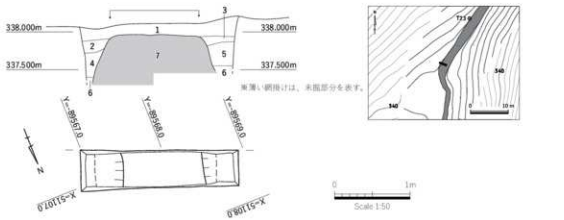
**4Bトレンチ（図2-16）**　4Aトレンチで検出した石敷の範囲を確認するため、切通状になる手前の地点に設定した。標高は約337mであり、西側が急斜面になっている。

表土は暗褐色砂質土で、この表土の下から、地山と強くしまる黄褐色砂質土の２層を検出した。地山は西側の傾斜に向けて傾斜し、その上に２層が盛土されている。この２層は地山の斜面いっぱいまでは平坦に盛土せず、地山の傾斜を利用して溝状にしている。２層はトレンチ以西に広がっており、トレンチ外をピンポールで刺突し確認したところ、トレンチ西側肩から約0.2mのところで急に傾斜していることがわかった。

この２層は、3Aトレンチ、3Bトレンチに似た土質であることから、少なくとも3Bトレンチ～4Bトレンチ間の約150mにわたって、盛土、嵩上げされていることになる。いずれの箇所も遺物が出土しておらず、盛土の時期などは不明だが、なるべく起伏を抑えて通行ができるように道が改良された結果と判断できる。

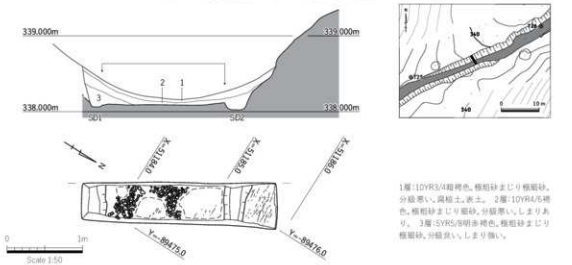
なお、当初目的とした石敷は検出できず、石敷された範囲は限定的だったと思われる。

**5Aトレンチ（図2-17）**　後世に設けられた道２本が並行して延びている部分にあたり、本来の道



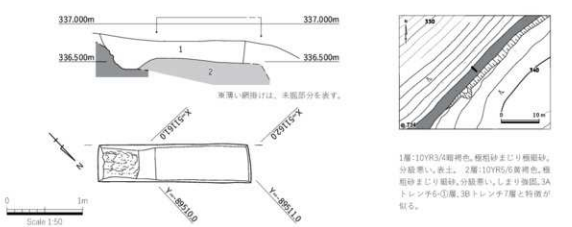

1層:10YR4/4褐色、細礫まじり細砂、分級悪い、腐植土、表土。 2層:10YR5/6黄褐色、細礫まじり細砂、分級悪い、しまり弱い。 3層:10YR5/6黄褐色、極粗砂まじり中砂、分級普通、しまりなし。 4層:10YR6/8明黄褐色、極粗砂まじり細砂、分級普通、しまりあり。 5層:10YR6/6明黄褐色、極粗砂まじり中砂だが、3層よりも粒径は小さめ、分級普通、しまり強い。 6層:10YR5/6黄褐色、極粗砂まじり極細砂、分級良い、しまり強い。 7層:10YR5/6黄褐色、細礫まじり細砂、分級非常に悪い、しまり強固、地山由来の偽礫状ブロック(φ1～3cm)を含む、盛土。

図2-14　鳥坂峠越 3Bトレンチ平面図・断面図




1層:10YR3/4暗褐色、極粗砂まじり極細砂、分級悪い、腐植土、表土。 2層:10YR4/6褐色、極粗砂まじり細砂、分級悪い、しまりあり。 3層:5YR5/8明赤褐色、極粗砂まじり極細砂、分級良い、しまり強い。

図2-15　鳥坂峠越 4Aトレンチ平面図・断面図




1層:10YR3/4暗褐色、極粗砂まじり極細砂、分級悪い、表土。 2層:10YR5/6黄褐色、極粗砂まじり細砂、分級悪い、しまり強固、3Aトレンチ6-①層、3Bトレンチ7層と特徴が似る。

図2-16　鳥坂峠越 4Bトレンチ平面図・断面図

幅などを確定させるために設定した。標高は約325mで緩斜面となっており、昭和期には耕作地として利用されていた地点である。

１，２層ともに褐色砂質土で、直径５～20cmの角礫が多量に混入する。いずれも、耕作などによって大きく撹拌されたものと考えられる。地表下約50～60cmで当時の路面と思われる地山を検出したが、地山は大きく肌荒れした状態で凹凸も著しい。これも耕作など後世の影響と考えられる。地山はトレンチ中央付近で北側に傾斜をつけて落ちており、法尻からこの傾斜変換ラインまでを本来の道幅だったと推定した。

出土遺物はなかった。

**5Bトレンチ(図2-18)**　5Aトレンチにおいて、道幅の確定や付随設備の発見が芳しくなかったことから、5Aトレンチから下り約28mの地点であ

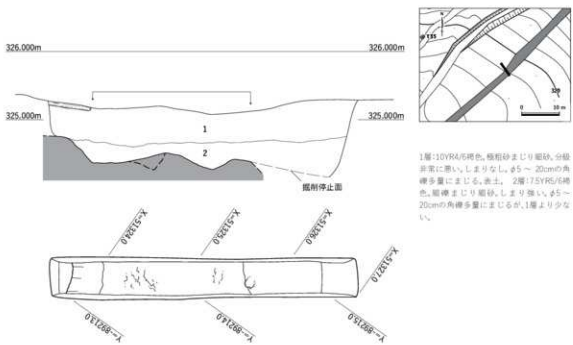



図2-17　鳥坂峠越5Aトレンチ平面図・断面図

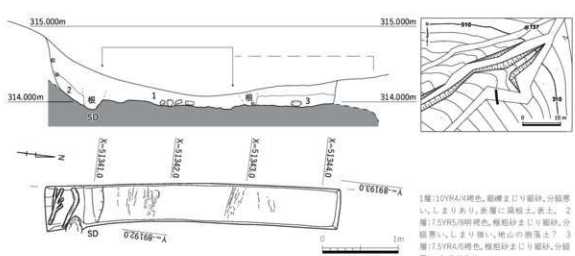
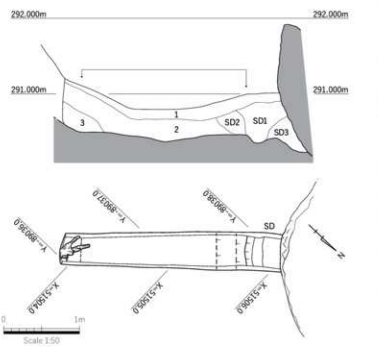


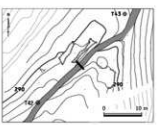

図2-18　鳥坂峠越5Bトレンチ平面図・断面図

らためてトレンチを設定した。標高は約314mであり、徐々に傾斜が急になる地点にある。

表土は褐色砂質土であり、この表土を剥ぐと、トレンチ南側で排水溝１条(SD)を検出した。SDに２層が斜堆積しているが、これは斜面の崩落による地山砕屑物の堆積である。地山は地表下約20～30cmで検出でき、トレンチ北側では表土と地山の間に褐色砂質土の３層が堆積している。地山は一見すると平坦にみえるが、トレンチ中央付近で約５cmの段が生じている。本来の遺幅は、SDからこの段までの間と思われる。

この段から北側も平坦となっているが、これは戦中、戦後の削平と推測される。戦中、戦後は、並木のマツが多量に伐採されているが、このトレ

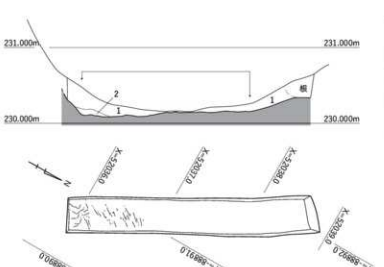


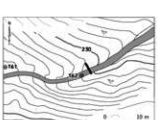




1層：10YR2/3黒褐色、細礫まじり細砂、分級非常に悪い、現耕土、表土。 2層：10YR4/6褐色、礫まじり細砂、分級非常に悪い、しまりあり。地山由来のφ2～10cm程度の角礫が多く混入。 3層：7.5YR3/4暗褐色、極粗砂まじり細砂、極粗砂まじり細砂、分級普通、しまりなし。

SD1：10YR4/4褐色、極粗砂まじり細砂、分級悪い、しまりなし。 SD2：10YR4/6褐色、極粗砂まじり細砂、分級悪い、しまりあり。 SD3：7.5YR5/8明褐色、極粗砂まじり極細砂、分級悪い、しまり強い。

図2-19　鳥坂峠越 6トレンチ平面図・断面図




1層：10YR4/4褐色、細礫まじり細砂、分級悪い、表土。 2層：10YR5/8黄褐色、細礫まじり細砂、分級非常に悪い、しまりなし。

図2-20　鳥坂峠越 7トレンチ平面図・断面図

ンチの先は大きく蛇行しながら下る地形になっており、伐採したマツの搬出が円滑に進むよう、道幅が拡張された可能性がある。

出土遺物はなかった。

**６トレンチ(図2-19)**　岩盤が開削されている地点に設定し、4Aトレンチのような石敷や排水溝などの有無を調査した。標高は約291mである。

地山は平坦になっており、道として整備された痕跡と思われる。その上に、暗褐色砂質土の３層、褐色砂質土の２層が堆積している。とくに２層は地山の砕屑物(直径２～10cmの中･大礫)が多数混入しており、法面からの崩落土と思われる。この２層上面の岩盤側に掘り込みがあり、SD3もしくはSD2がSD1に切られるように重複する。SDを付したが、性格は不明である。

出土遺物はなく、排水溝の掘削や道が整備された時期は不明である。

**７トレンチ(図2-20)**　仏陀懸寺に向けて下る尾根の先端部に設定し、標高は約230.5mである。本来の道幅を確認するために調査した。

現地表は褐色腐植土であり、２層は黄褐色砂質土で、地山風化土の堆積と考えられる。現地表から約２～30cm下で路面を確認した。幅員は約2.2mであり、排水溝などの設備は確認できなかった。幅員中央部は表土もほとんど堆積しておらず、部分的に地山が露出していた。

出土遺物はなかった。

(３)日天社の試掘調査

日天社は、のちに報告する石造物調査から、明治34(1901)年に創建されたとみられる神社である。現在は簡素な四阿と自然石で組まれた小さな祠が残されている。現在の四阿は建替えられたもので、当初は現在の四阿を囲繞する石垣の上に、茅葺の建物が建てられていたという。また、四阿の手前には土壇も存在していたという。

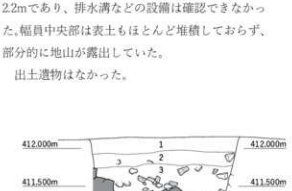
この日天社の前後２箇所にトレンチを設け、遺構や遺物の発見を試みた。

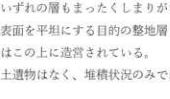
**日天社１トレンチ(図2-21)**　日天社の奥約16m、尾根端部の中央に設定した。表土は暗褐色砂質土で、その下に２，３層が堆積している。２層は直径５cm程度の角礫がまじり、３層は直径５～10cmの角礫が無数混入する。これらの角礫は地山に由来するもので、堆積の状況から、地山を削平し整地した際の土層と判断した。

出土遺物はなかった。

**日天社２トレンチ(図2-22)**　日天社の表側に設定し、日天社１トレンチで検出した整地層の広がりの確認を目的とした。表土は黒褐色腐植土であり、その下に褐色砂質土の２，３層が堆積する。日天社１トレンチと比較して角礫の混入は少ないが、いずれの層もまったくしまりがない。これらは地表面を平坦にする目的の整地層と思われ、日天社はこの上に造営されている。

出土遺物はなく、堆積状況のみでは日天社造営




1層:10YR2/2黒褐色。植根砂まじり細砂、分級良い。細根無数混入。厚い腐植土。表土。
2層:7.5YR5/6明褐色。植根砂まじり細砂、分級良い。ただしφ5cm程度の角礫まじる。しまりあり。
3層:7.5YR5/8明褐色。細礫まじり細砂、分級悪い。地山由来のφ5～20cmの角礫が多数混入。整地土か。

図2-21　日天社１トレンチ平面図･断面図

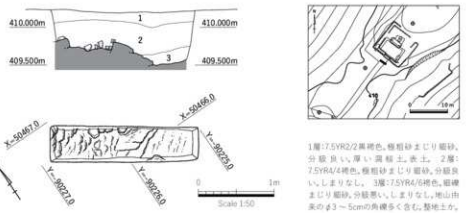



図2-22　日天社 2トレンチ平面図・断面図

以前の整地か、造営と同時の整地かは判断しかねる。

（4）石造物調査

今回、石造物20基を調査した。各石造物の種別等は表2-01に示した。以下、始点側から順に記述する。なお、近世にさかのぼるものに関しては、可能な限り実測および拓本による記録もおこなった。

**石造物01（図版6-1）**　砂岩製で、直径25cm、厚さ9cmを測る薄い円柱である。正面中央には梵字（バン）が刻まれ、その上部左に下弦の月（月光）、上部右に太陽と思われる円（日光）がそれぞれ除刻されている。石組みの祠の中で祀られており、現在でも地元住民が参拝するなど信仰を集める。

**石造物02（図版6-2）**　砂岩製の浄水鉢であり、高さ21cm、幅25.5cm、奥行18cmを測る。正面には「村中」とあり、左側面には世話人の名前が記されている。

**石造物03（図版6-3）**　石造物01の、向かって右側に立つ寄進碑のひとつである。花崗岩製で頂部蒲鉾型の角柱となっており、地表面からの高さは126cm、幅20cm、奥行13cmを測る。日天社の造営に対する寄進者や寄進の内容などが記されており、明治34（1901）年8月のものとわかる。

**石造物04（図版6-4）**　石造物01の、向かって左側に立つ寄進碑のひとつである。花崗岩製の角柱であるが、石造物02と形状は異なって頂部は方形である。記銘は石造物03と同様の内容で、同じく明治34（1901）年8月のものである。

**石造物05（図版6-5）**　花崗岩製の手水鉢で、直径47.5cm、高さ33cmを測る。側面には「奉」が記され、反対側には「稲積木村 下組中」と記されており、麓の稲積地区の有志によって寄進されたものとわかる。

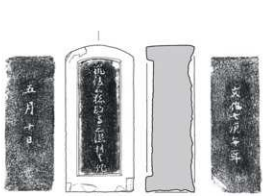
**石造物06（図版6-6）**　砂岩製の弘法大師坐像で、像高52cm、幅（膝張り）39cmを測る。右手に五鈷杵、左手は数珠を持って膝上に置いている。撫肩が特徴的であり、袈裟の表現は明瞭である。

**石造物07（図版6-6）**　上記の大師像の台座であり、花崗岩製である。高さ26.5cm、幅45cm、奥行46cmの直方体である。正面には明石寺および大寶寺までの距離が示され、石造物05と同じく、稲積村の有志によって寄進されたことがわかる。

石造物01～07は、日天社やその周辺にある石造物であり、これらの記銘などを考慮すると、日天社は麓の稲積地区の有志によって明治34（1901）年ごろに造営されたことがわかる。

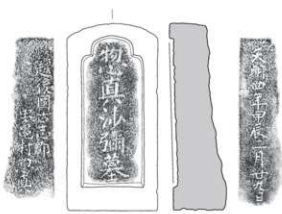
**石造物08（図版7-2、図2-23）**　砂岩製の櫛形墓石である。高さ31.0cm、幅14.5cm、奥行10.2cmを測る。正面、左右側面、上面は平滑に研削加工されるが、裏面、下面は整形時の加工痕が残る。筑後国三潴郡高三瀦村（現・福岡県久留米市三潴町高三瀦）の与作という者の墓であり、側面には文化7（1810）年と記されている。

**石造物09（図版7-3、図2-23）**　砂岩製の角形地



石造物08

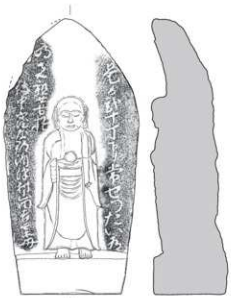
石造物09



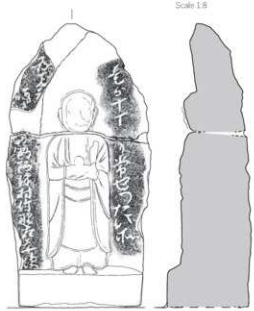
石造物10

石造物15



石造物13



石造物12

図2-23　鳥坂峠越 石造物実測図・拓本（１）

蔵を模した墓石である。発見時は正面が上を向くように倒され、石造物08の台座として利用されていた。高さ36.4cm、幅24.7cm、奥行12.8cmを測る。全体的に加工痕が残り、正面もあまり研削されていない。正面には合掌した地蔵菩薩が彫られるものの、顔面表現などが磨滅、もしくは故意に削り落されている。正面左上には正徳元(1711)年と記されており、鳥坂峠越沿いで年代が確認できた石造物のうち、今のところ最も古い。「童女」とあることから女児の墓石と考えられる。

**石造物10(図版8-1、図2-23)**　砂岩製の櫛形墓である。高さ39.5cm、幅16.3cm、奥行は最大で11.1cmを測り、上部から下部にかけて、奥行の厚みが増している。正面、左右側面、上面は平滑に研削加工されるが、裏面、下面は整形時の加工痕が残る。台座などはなく、原位置は不明である。越後國古志郡虫亀村惣真(現・新潟県長岡市山古志虫亀)の出自で、「沙弥」とあることから、出家した若年男性の墓石と考えられる。

**石造物11(図版9-1,2、図2-24)**　花崗岩(もしくは花崗閃緑岩)製で、頂部が蒲鉾型の角柱である。地表面からの高さは145.4cm、幅31.5cm、奥行23.2cmを測り、鳥坂峠越沿いに残る石造物としては最大である。道標の下部および裏面は整形時の加工痕が残されており、石材切出しの際の矢穴も合計6箇所ある。正面には、上から梵字(ア)と大師像とが彫られ、大寶寺(菅生山)までの距離と人名が記されている。施主は朝倉上村(現・今治市朝倉)の武田徳右衛門であり、いわゆる「徳右衛門丁石」のひとつである。このため、年代の記銘はないものの、寛政～文化年間(1789～1818年)につくられたものとみられる。大洲市内では、このほかにも、永徳寺(十夜ヶ橋)境内、帝京第五高等学校北に花崗岩製の徳右衛門丁石が残されている。なお、大洲市内で花崗岩を採掘できる地点は存在しないため、外部から搬入された石材である。

**石造物12(図版8-4、図2-23)**　砂岩製で、舟形地蔵を模した道標である。高さ59.8cm、幅30.4cm、奥行17.2cmを測る。裏面に整形時の加工痕が残る。光背上部は、正面に向かってやや寝るように傾斜がついている。正面には地蔵菩薩と接待所までの距離、願主が記されている。地蔵菩薩の首より上部が折損してしまっており、モルタルや樹脂などで補修されている。また、地蔵菩薩の顔面表現などは磨滅してしまっている。

**石造物13(図版8-3、図2-23)**　石造物12と同じく砂岩製で、舟形地蔵を模した道標である。高さ58.2cm、幅28.4cm、奥行15.7cmを測る。特徴は石造物12と共通するが、こちらは目立った損傷がない。

石造物12、13は、それぞれ願主名は異なるものの、いずれも備中国窪屋郡酒津村(現・岡山県倉敷市酒津)の者である。それぞれ「十丁」「弐十丁」の距離が示されている。

なお、石造物10～13は、昭和10(1935)年までには、すでに現在の位置にあったとの証言がある。これら石造物は、大正9(1920)年の旧県道開通時、もしくは、その後の拡幅・改良工事に伴い、1箇所にまとめられたとみられる。

これら石造物のほか、斑レイ岩製の自然石を用いた石造物があり、正面には「三宝教　二代　正道院」と記されている(図版8-2)。書体などから考えると比較的新しいもののようであり、この石造物の詳細報告は省く。

**石造物14(図版10-1)**　花崗岩製の角柱である。鳥坂峠越沿いではなく、旧県道沿いにある石造物だが、遍路に関係するため報告に加える。地表面からの高さは115cm、幅22.5cm、奥行22.5cmを測る。裏面は整形時の痕跡が残る。正面には、上部に終点側を指した手印が彫られ、その下に「へんろ道」と記されている。地元住民の聴き取りによれば、昭和前半期、鳥坂峠越や旧県道から道を逸れてしまった遍路が、迷って稲積地区の集落に下りてきてしまうことが頻繁にあり、正しい道順を示すために設置したという。また、この道標は、ほぼ原位置を保っているとの証言も得た。

**石造物15(図版10-3、図2-23)**　砂岩製の櫛形墓石であり、台座は花崗岩製の直方体である。道から少し離れた位置にあり、発見時は台座から

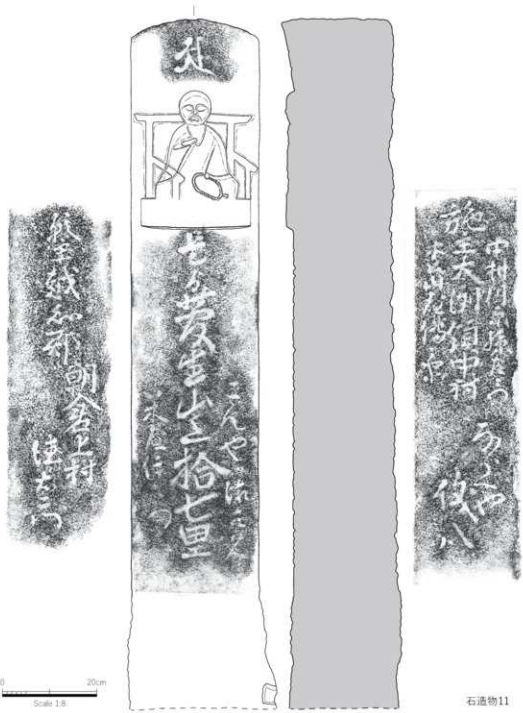



図2-24　鳥坂峠越 石造物実測図・拓本（２）

約50cm離れて、正面を上にして倒れていた。高さ39.9cm、幅17.8cm、奥行12.5cmを測る。正面、左右側面、上面は平滑に研磨加工されるが、裏面、下面は整形時の加工痕が残る。山城国（京都）の蛸薬師通下ル（現・京都府京都市中京区）出身の男性の墓である。

**石造物16、17（図版10-4）**　石造物16は花崗岩製の舟形地蔵である。鳥坂峠越沿いではなく、旧

県道沿いにある石造物だが、交通に関するものなので報告に加える。高さ37cm、幅19cm、奥行15.5cmを測り、正面以外は整形時の加工痕が残る。正面には地蔵菩薩が彫られ、向かって左には草書体で「福聚海無量」と記される。石造物17は、石造物16の台座である。花崗岩製の直方体で、正面に楷書体で「交通安全」と記されている。書体の違いから、この地蔵像と台座とは別々の時期に作製されたようである。

**石造物18～20(図版11-2)**　弘法大師像１体と台座２基とで構成され、いずれも砂岩製である。仏陀懸寺境内にあり、遍路も利用したとされる井戸の直上にあることから、報告に加える。大師像は、像高40cm、像幅31.0cmを測る。座像であり、右手に五鈷杵、左手は数珠を持って膝上に置いている。上部台座は高さ22.5cm、幅36cm、奥行33.5cmを測り、正面には鼻高履と水瓶が浮き彫りで表現されている。下部台座は高さ18.5cm、幅43cm、奥行38cmを測り、化主などが裏面を除く３面に刻まれている。

（５）聴き取りによるその他の成果

このほか地元住民の聴き取りによれば、昭和初期ごろ、旧県道と鳥坂峠越との交差部に駄菓子屋（茶屋）があり、饅頭１個を２銭で販売していたという。ただし、終戦前後に閉店してしまったとのことである。また、石造物10～13の付近では、４月になると地元住民で遍路にお接待をしており、米やミカンなどを施していたという。

このほか、5Bトレンチ付近に、遍路墓と思われる墓石が数基並んでいたという証言も得たが、今回の調査では発見することはできなかった。

表2-01　宇和島街道鳥坂峠越 石造物一覧表

| 石造物番号 | 種別 | 石材 | 寸法<br>最大高(cm) | <br>最大幅(cm) | <br>最大厚(cm) | 年代 | 形状／主な造形／主な刻銘文／備考 | 挿図番号 | 図版番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 01 | 御神体 | 砂岩 | | 直径25 | 8 | — | 平面円盤形。梵字左上に月光、梵字右上に日光の表現あり。<br>【正面】(梵字)バン | — | 6-1 |
| 02 | 浄水鉢 | 砂岩 | 21 | 25.5 | 18 | — | 【正面】村中<br>【左側面】世和人／上田満吉 | — | 6-2 |
| 03 | 寄進碑 | 花崗岩 | (130) | 18 | 16 | 明治34<br>(1901) | 角柱。<br>【正面】一　六畝拾五歩寄進菊地兵二郎<br>【右側面】日天社稲積氏子中寄付金弐拾円也<br>【左側面】発起者／往田喜平治　上甲定治　菊地[寿]太郎／村上浅治　池田平治郎　城甲政四郎<br>【裏面】井上徳治／明治三十四年旧八月朔日 | — | 6-3 |
| 04 | 寄進碑 | 花崗岩 | (126) | 20 | 13 | 明治34<br>(1901) | 頭部櫛碑型の角柱。<br>【正面】一壱畝七歩寄進上甲定治／一弐拾弐歩　全井上徳治<br>【右側面】日天社神主中野千代治<br>【左側面】世話人／上甲和太郎　徳田兵治　二宮常治／二宮淺治　中尾伊治　上甲宮市　尾花兵五郎<br>【裏面】明治三十四年旧八月朔日 | — | 6-4 |
| 05 | 手水鉢 | 花崗岩 | 33 | | 直径47.5 | — | 【正面】奉<br>【裏面】稲積本村／下組中 | — | 6-5 |
| 06 | 大師像 | 砂岩 | 52 | 41 | 29 | — | | — | 6-6 |
| 07 | 台座<br>(道標) | 花崗岩 | 52 | 41 | 46 | — | 直方体。<br>【正面】アゲイシサン三リ半／是ヨリ／スガウサン十七リ半／奉納／菊地兵二郎／外／稲積村中 | — | 6-6 |
| 08 | 墓石 | 砂岩 | 31.0 | 14.5 | 10.2 | 文化7<br>(1810) | 櫛形墓。<br>【正面】筑後三瀦郡高三瀦村与作<br>【右側面】文化七庚午年<br>【左側面】五月廿日 | 2-23 | 7-2 |
| 09 | 墓石 | 砂岩 | 36.4 | 24.7 | 12.8 | 正徳元<br>(1711) | 舟形地蔵を模す。顔面表現欠損。<br>【正面】知勝恵空童女／正徳元辛／卯五月廿八日 | 2-23 | 7-3 |
| 10 | 墓石 | 砂岩 | 39.5 | 16.3 | 11.1 | 天明4<br>(1784) | 櫛形墓。<br>【正面】悟眞沙彌墓<br>【右側面】天明四甲辰年二月廿五日<br>【左側面】越後國古志郡／出亀村悟眞 | 2-23 | 8-1 |
| 11 | 道標 | 花崗岩 | (145.4) | 31.5 | 23.2 | — | 頭部櫛碑型の角柱。正面梵字下に大師像の浮彫。右側面に矢穴６箇所。<br>いわゆる「徳右衛門丁石」<br>【正面】こんや[作]右衛門/(梵字)ア　是ヨリ菅生山迄拾七里/米屋伊右エ門<br>【右側面】中村川原孫左エ門／施主　大洲領中村／奈良や　儀八／松山屋傳兵衛<br>【左側面】願主越知郡朝倉上村／徳右エ門 | 2-24 | 9-1<br>9-2 |
| 12 | 道標 | 砂岩 | 59.8 | 30.4 | 17.2 | — | 舟形地蔵を模す。顔面表現は磨滅か。上下に破損後,モルタルや樹脂による修復。<br>【正面】是ヨ十丁□リ常せつたい所／為先□□□／備中□□郡酒津村竹野佐平次 | 2-23 | 8-4 |
| 13 | 道標 | 砂岩 | 58.2 | 28.4 | 15.7 | — | 舟形地蔵を模す。<br>【正面】是ヨ弐十丁下リ常せつたい道／為祖先菩提／備中窪屋郡酒津村山田吉兵衛母 | 2-23 | 8-3 |
| — | その他 | 変斑レイ岩か | 34.5 | 30 | 15 | — | 【正面】三宝教／二代／正道院 | — | 8-2 |
| 14 | 道標 | 花崗岩 | (115) | 22.5 | 22.5 | — | 角柱。正面刻銘文上に手印。昭和前半期のものか。<br>【正面】へんろ道<br>【右側面】世話人／二宮常治／上甲政市<br>【左側面】下り稲積道／稲積有志建之 | — | 10-1 |
| 15 | 墓石 | 砂岩 | 39.9 | 17.8 | 12.5 | 弘化2<br>(1845) | 櫛形墓。<br>【正面】弘化二乙巳六月五日／信道信士／京都納薬師下高松や／源七 | 2-23 | 10-3 |
| 16 | 地蔵<br>菩薩 | 花崗岩 | 37 | 19 | 15.5 | — | 舟形地蔵。<br>【正面】奉納／福聚海無量 | — | 10-4 |
| 17 | 台座 | 花崗岩 | 12 | 26.5 | 19 | — | 直方体。<br>【正面】交通安全 | — | 10-4 |
| 18 | 大師像 | 砂岩 | 40 | 31 | (未測) | — | | — | 11-1<br>11-2 |
| 19 | 台座 | 砂岩 | 22.5 | 36 | 33.5 | — | 直方体。正面に鼻高履と水瓶の浮彫。 | — | 11-1<br>11-2 |
| 20 | 台座 | 砂岩 | 18.5 | 43 | 38 | 宝暦7<br>(1757) | 【正面】勢室専昌信女／泰玄童子／容幻童子／菅田村／大洲／武左衛門通吉／大和や小兵衛／山口屋是助／山口や清三郎／長門や長左衛門／唐津や新兵衛<br>【右側面】宝暦七年丁／丑三月廿一日／化主／表屋傳七<br>【左側面】化主／長谷屋市助／尾崎氏元徳 | — | 11-1<br>11-2 |

※最大高のうち、(　　)のあるものは地表面からの高さを示す。
※翻刻のうち、欠損によって文字が欠落している箇所は□で示した。また、明確に判読できず推測した文字は［　］内に示した。

## 4．八幡浜街道夜昼峠越について

（1）道の名称と調査対象

調査するのは、大洲城下～八幡浜浦（八幡浜市）間を結んだ街道である。この調査では、橋本貴登氏が定義した「八幡浜街道」の名称を便宜的に用いる〔愛媛県教委事務局文化財保護課 編2012〕。なお、広義の「八幡浜街道」は、今回対象とする八幡浜浦～大洲城下間を結んだ街道のほか、八幡浜浦～卯之町（西予市宇和町）間を結んだ街道も含まれる。後者については、保存状態の良好な「笠置峠越」を、西予市教育委員会および八幡浜市教育委員会がすでに調査しており、ここでは対象としない。

「八幡浜街道」以前の名称については、文献等に明確な記載がなく不明である。ただし、『大洲市誌』には「八幡浜往還」、街道沿いの道標には「八幡濱道」という記載がみられる。この八幡浜街道は、札所と札所とを結ぶ遍路道ではないが、次項で詳述するとおり、九州からの遍路、もしくは、九州へ戻る遍路に対して一時的に通行が指定された歴史をもつ。

この八幡浜街道のうち、往時の形状を比較的留めているのは、八幡浜市川之内にある旧川之内小学校付近～夜昼峠～大洲市平野町野田字富元の延長約3.3kmで、2市にまたがっている。八幡浜街道のなかでも、この区間を「夜昼峠越」と称することとし、このうち調査対象は大洲市側の約1.56kmとする。

この夜昼峠の名称の由来については諸説ある。伝承されているものとして大きく3説あり、（ⅰ）とくに秋から冬にかけての午前中、大洲盆地では冷気湖現象によって発生した濃い靄がかかり夜のようだが、八幡浜側は晴れていて昼のようであること、（ⅱ）この冷気湖現象で発生した靄が、寄ったり引いたり（寄る引く）する様子が転訛したこと、（ⅲ）日中に麓を出ると峠で夜が明けてしまうほどの難所であること、が由来といわれる。

なお、「八幡浜街道」「八幡浜往還」「八幡濱道」の名称からは、本来、大洲側が始点、八幡浜側が終点とされるべきである。しかし、この調査は四国遍路に焦点を当てた調査となっていることから、始点を九州に近い八幡浜側、終点を大洲側として報告する。

（2）八幡浜街道夜昼峠越の現状

八幡浜街道夜昼峠越の始点となる旧川之内小学校付近は、標高約96.7mである。千丈川中流域の右岸に位置し、千丈川が形成する谷の底部にあたる。始点からは進路を北東にとり、山腹に形成された川之内、滝山の集落を縫うように通過して、夜昼峠（標高318.388m）に到達する。始点から峠までの比高差は、およそ221.7mになる。峠の八幡浜側は緩斜面に耕作地が広がっているものの、大洲側はスギ・ヒノキが密に植林されている。

大洲側の道は、夜昼峠の北西約400mにあるピーク（標高約418m）から終点の富元団地付近までのびる尾根と、ほぼ並行にのびている。現在、峠では大洲側に向けて2方向に道が分岐しているが、緩やかに下る方向に進路をとり、尾根の頂部よりやや南側の中腹を進む。峠から約520mは、新設の林道と交差しながら植林のなかを進むが、道は荒れている。この植林部を進むと、後述する旧府県道に出る。旧府県道を交差して再び小径を進むと、約60mで再び蛇行する旧府県道に出る。ここから約120mは、旧府県道を歩く。合流した地点の旧府県道はつづら折りになっており、カーブ内側には昭和期まで夜昼公園が整備されていた。

つづら折りする旧府県道に沿って進み、つづら折りの終端から約30mで東の小径へと進路を変え直進する。約80mで1970年前後から造成された明日香団地へ接続する市道と合流し、そのまま直進する。この付近は、道のなかでは比較的遠景を望める場所にあたり、気象条件が良ければ石鎚山も望むことができる。秋季から冬季にかけては、朝靄に包まれる大洲盆地を眺望することもできる。

市道を直進すると夜昼集会所があり、さらに直進すると、墓石を納めた小堂宇がある。また、現在は使用されていない水準点も残されてい

る。明治期の地形図によれば、この水準点は標高183.30mを示している。これらについては、のちに詳述する。

小堂宇・水準点から終点までは約510mであり、尾根の傾斜が急な地点は蛇行しながら高度を下げる。途中、市道と交差するが、その直前は深い切り通しとなっており、勾配は全区間で最も急な地点となっている。市道と交差してやや進むと、麓の富元地区出身従軍者の石碑が並んでいるのを見ながら、終点へ向かう。終点は肱川水系の久米川支流・野田本川上流部にあたり、JR予讃線・夜昼トンネル入口も近い。峠から終点までの比高差は約236mであり、終点は始点よりも約14m低い位置にある。

地質学的には、三波川変成帯上に位置し、道の大半は中生代前期白亜紀～新生代古第三紀に形成された苦鉄質片岩、泥質片岩上を通る。道の一部は急傾斜地崩壊危険個所に指定されている（2021

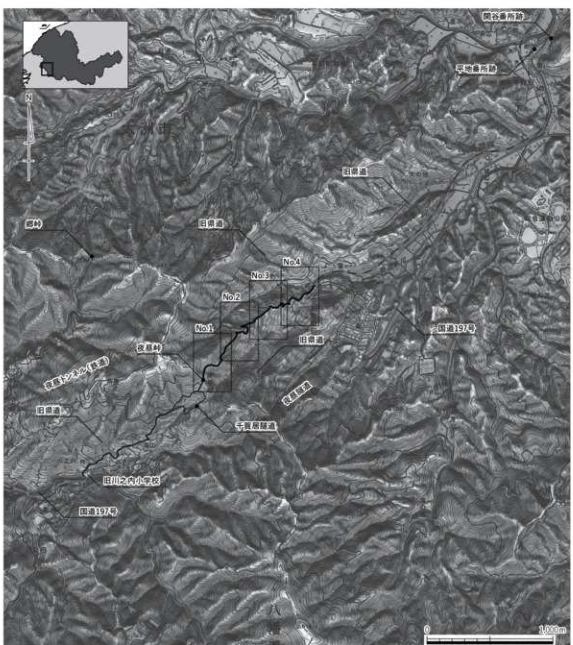



図2-25　八幡浜街道夜昼峠越 全体図（カシミール3Dを利用して作成）

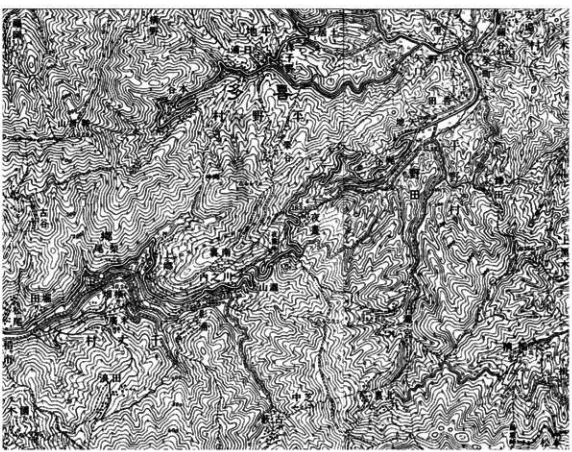
年現在)。

（３）八幡浜街道夜昼峠越の歴史的環境

宇和島街道鳥坂峠越と同様、道が形成された時期は明らかではなく、道の存在が示唆される資料は近世まで待たねばならない。ただし、札所間を結んだ遍路道や参勤交代路ではないため、宇和島街道鳥坂峠越と比較すると当時の様子や状況が記録された資料は格段に少ない。

今回調査対象とする夜昼峠越の区間は、すべて宇和島領内にある。近年、この宇和島藩による遍路統制の研究が進んでいる〔内田2009、井上2020〕。とくに、九州地方からの遍路の通行実態が明らかになってきた。宇和島藩は、宝暦４(1754)年以降、遍路の通行等に関する法令を定めている。明和６(1796)年の法令では、宇和島領の出入口が東多田(西予市宇和町)、小山(南宇和郡愛南町)、三机(西宇和郡伊方町)の３箇所に限定されている。九州地方からの遍路は、この３箇所のうち、三机が出入口として指定されている。三机からは、二見浦―九町浦―伊方浦(以上、西宇和郡伊方町)―宮内村―喜木村(以上、八幡浜市保内町)―日土村(八幡浜市日土町)―平地村(大洲市平野町)を経由し、野田にいたっている。このとき、八幡浜浦―夜昼峠は通過せず、夜昼峠から北西約４kmに位置する横野峠(標高約352m)や沼田地区などを越えて野田へ向かったと思われる。この経路は、『大洲市誌』には「日土往還」と記載されている。なお、この経路で大洲領への通行が許されたのは、伊予北部を目指す遍路に限られた。それ以外の者は三机から八幡浜浦、笠置峠越を経て卯之町へ出るように指示されている。

寛政12(1800)年に出された法令では、三机に



Stanford Digital Repository(https://purl.stanford.edu/kh334rm6419, https://purl.stanford.edu/xb337qj2953)
大日本帝國陸地測量部、五万分一地形圖「八幡濱」および「卯之町」より抜粋、合成
明治37(1904)年測図、昭和８(1923)年修正
図2-26　夜昼峠越 旧版地形図

加えて八幡浜も九州からの出入口に指定されている。八幡浜からは、郷村(八幡浜市郷)、河之内村(八幡浜市川之内)を経由して野田にいたる経路が指定されており、この経路が夜昼峠越であったと推測される。なお、享和２(1802)年には、九州から渡海した遍路で土佐、阿波、讃岐から伊予北部を経由した(逆打ちをした)遍路に限り、野田から宇和島領への入領が認められるようになっている。

近世の各絵図には、八幡浜～大洲間を結ぶ経路が描かれているものの、時期によって経路は変化している。『寛永伊予国絵図』(寛永10(1633)年ごろ)には、矢ノ町(八幡浜市矢野町)―松尾(八幡浜市松柏松尾)―下江―上江(以上、八幡浜市郷)を抜け、大洲領へいたる経路が描かれている。この経路中に「夜昼坂上下一里」との記載はあるが、現在の川之内地区を経由する経路とは異なっていることがわかる。また、この『寛永伊予国絵図』を基として更新された『伊予国絵図 寛永図』(寛文11(1671)年以降)では、矢ノ町(八幡浜市矢野町)―松尾(八幡浜市松柏松尾)―下郷―上郷(以上、八幡浜市郷)を抜けて川ノ内を経由せず大洲領へいたる経路、南かや(八幡浜市南柏)を始点として、川ノ内―野田を経由して大洲領にいたる経路が描かれている。このうち夜昼峠を経由するのは後者であり、前者は郷峠(標高約321m)などを経由する経路と推測される。

この後に描かれる『宇和島藩領色分絵図』(寛文４(1676)年)、『元禄伊予国絵図』(元禄13(1700)年)、『天保伊予国絵図』(天保９(1838)年)では、千丈川沿いに矢野町―北茅村(八幡浜市松柏)―松尾村(八幡浜市松柏松尾)―下郷村―上郷村(以上、八幡浜市郷)―川内村(八幡浜市川之内)を経由して夜昼峠や野田へいたる経路が表現されており、現在知られている経路とほぼ変わらなくなっている。一方、前出の「日土往還」についても、この時期から表現されるようになっており、この２経路が八幡浜側と大洲側とを結ぶ主要経路となっていったことがわかる。また、大洲市指定史跡「平地番所跡」そばには、大安寺(大洲市平地)へ導く道標(大正５(1916)年設置)があり、夜昼峠越の方向を「八幡濱道」、日土往還の方向を「川之石道」と表記していることからも、２経路が存在したことを表している。

ただし、近代以降、「日土往還」は目立った整備はされず、夜昼峠越側の整備、改良が進むようだ。明治11(1878)年に発行された『愛媛縣管内全圖』には、夜昼峠越と日土往還とのいずれの経路も記載されているものの、明治17(1884)年に発行された『愛媛縣管内地圖』には、縣道一等および郵便路として夜昼峠越が記載される一方、日土往還は細線で表現されているにとどまる。このころから、八幡浜側と大洲側とを結ぶ主要経路として、夜昼峠越が選択されるようになったと思われる。これは、道沿いに設置された水準点の存在からも示唆されよう。明治期は八幡浜港が整備、拡充され、海運がきわめて発達した時期にあたり、大洲側から八幡浜港に向け最短距離でアクセスできたことが要因と思われる。

明治40(1907)年、夜昼峠越と並行するように新たな道が整備される(写真2-07)。夜昼峠の南側

写真2-07　旧府県道(峠付近)

写真2-08　千貫居隧道(八幡浜市)

（八幡浜側）は、勾配を緩和するためループ線になっており、ループの下部には煉瓦造りの千貫居隧道が貫く（写真2-08）。千貫居隧道は、この道が全通する前の明治38（1905）年にはすでに完成しており、ループ線の現役トンネルとしては国内最古との評価もある。この道は明治期末の段階で国道51号に昇格するが、法令の改正により、大正９（1920）年には府県道として指定される。さらに、戦後の昭和38（1963）年には二級国道197号に昇格、昭和40（1965）年に一般国道197号として指定される。昭和46（1971）年には夜昼隧道を含めた改築事業が完成し、八幡浜～大洲間の主要道は現在の国道197号となっている。一方、国道としての役割を終えた旧府県道は、現在、市道として機能しており、降雪や夜昼トンネル内での事故など、国道197号に障害が発生した際の迂回路として補助的な役割を果たしている。

夜昼峠越に並行して、鉄道も整備されている。昭和11（1936）年に伊予大洲駅～伊予平野駅間が開通し、昭和14（1939）年には夜昼隧道を含めた伊予平野駅～八幡浜駅間が開通している。

地元住民の聴き取りによれば、夜昼峠越は、明日香団地の開発やそれに伴う市道整備（1970年前後）、夜昼トンネル完成（昭和46（1971）年４月）までは、日常生活道として利用されていたという。また、夜昼地区から小・中学校の入学式や卒業式などへ出席するため、父母が着物に雪駄の姿で峠道を往来していたとの証言も得られた。

現在は、終点の市道とその上部を通る市道とを結んだ約220ｍの区間を除いて、ほとんど利用されていない。地元住民の利用も限られており、全体的に荒れた状態となっている。

## ５．八幡浜街道夜昼峠越の調査成果

（１）測量調査

夜昼峠越については、これまで詳細な地形図が作成されておらず、道の詳細経路や高低差などを判読する資料がなかった。そこで、道と左右10m程度を1/500の精度で測量した。等高線の間隔は１ｍである。また、同時に道沿いには３級基準点（K）を６点、４級基準点（T）を43点打設した。

調査区間の全長は約1,557m、峠の標高は318.388ｍ（T1）であり、終点の標高は82.428ｍ（K5）を測る。峠から終点の平均勾配は約15.2%になる。

峠は北西にあるピーク（標高約418m）から約180mの位置にある。道は峠から北東に向けてのびるが、尾根筋を避けた山腹を沿う経路がとられている。峠から約520mで、旧府県道と交差する。峠からこの旧府県道交差地点まで（T1-T16間）の平均勾配は約13.0%である。なお、T13-T14間で、尾根筋に向けてのぼる小径と分岐するが、この登り道は後述の氏神祠（シミズガミサマ）を経由して尾根筋を上り、峠の北西にあるピークへいたる。

旧府県道との交差地点からは尾根筋を通る経路であるため、終点の尾根端部に向かうにつれて、勾配が急になる傾向がある。旧府県道との交差地点から小堂宇・水準点まで（T16-T28間）の約527m間の平均勾配が約12.7%であるのに対し、ここから終点の尾根端部まで（T28-K5間）の約509m間の平均勾配は約19.9%にものぼる。先述のとおり、尾根の傾斜が急な部分は、道を蛇行させるなどして勾配の緩和が図られているものの、一部ではかなりの急傾斜を下る地点もあり、とくに市道交差地点の手前にある切通では、局所的に約47.9%を測る地点もある。

道は泥質片岩と苦鉄質片岩とが混淆した基盤の上を通されており、風化が進んで小規模に崩落している箇所もある。なお、こうした箇所には石積で補修、補強されている地点があり、今回の調査では２箇所を確認した。うち１箇所は試掘調査を実施したが（３トレンチ／石積１）、残る１箇所（石積２）は脆弱で掘削等は危険と判断したことから、現状記録に留めた（石積２）。

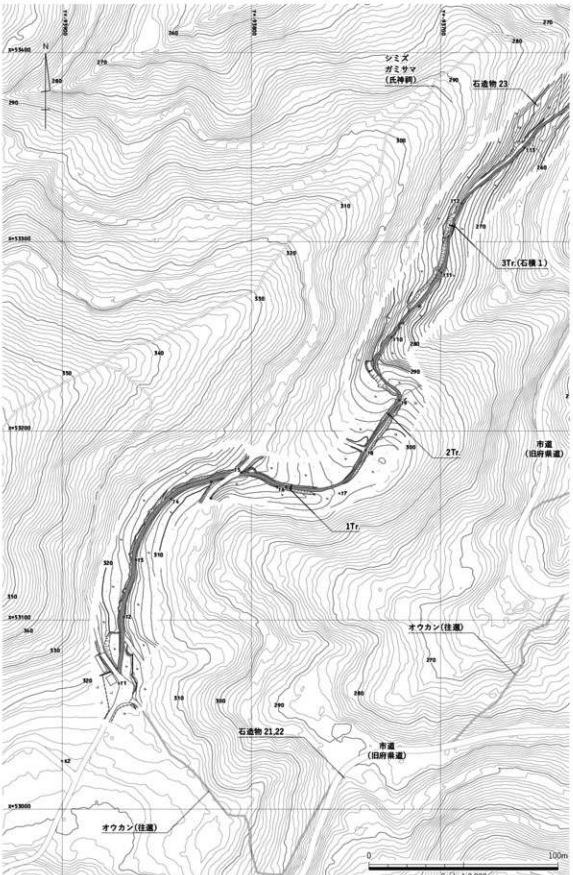



図2-27　八幡浜街道夜昼峠越地形図-No.1

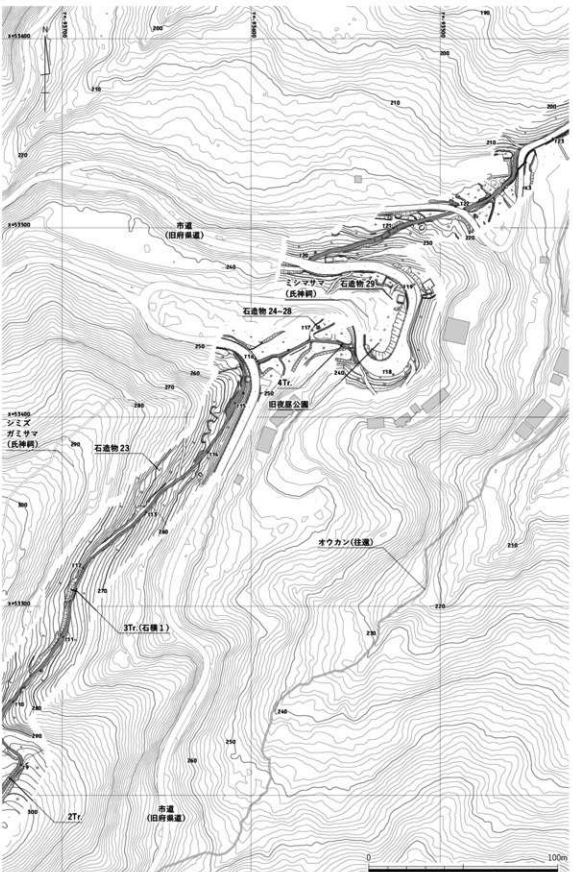



図2-28　八幡浜街道夜昼峠越地形図-No.2

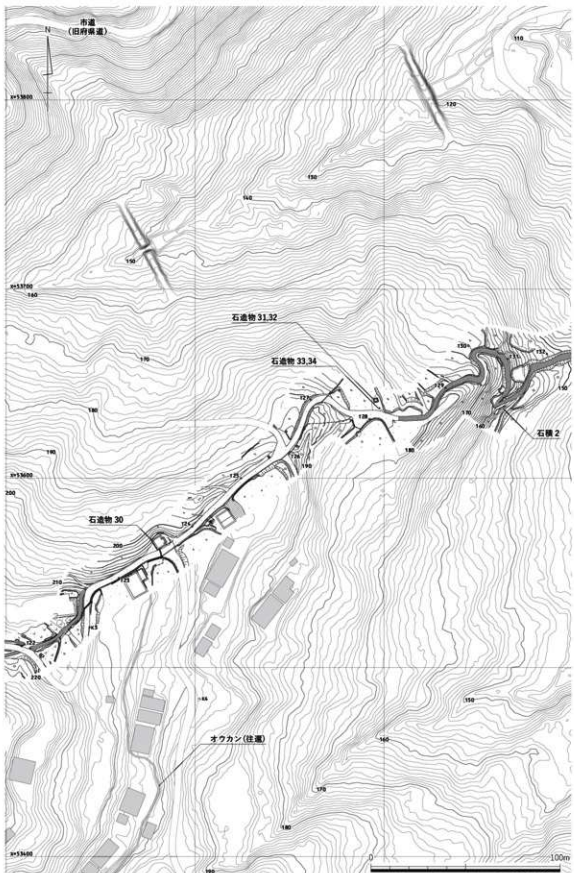



図2-29　八幡浜街道夜昼峠越地形図-No.3

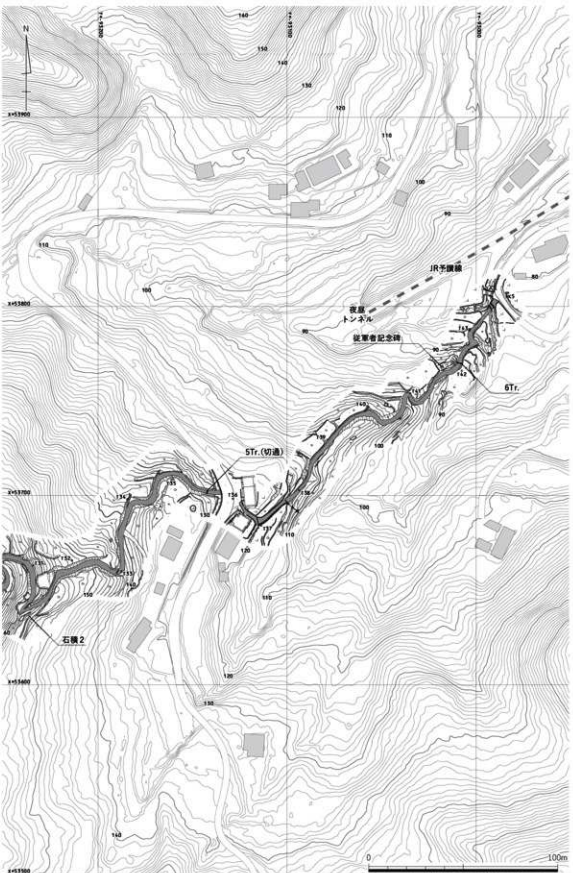



図2-30　八幡浜街道夜昼峠越地形図-No.4

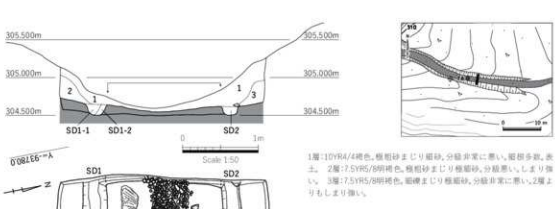



図2-31　夜昼峠越 １トレンチ平面図・断面図

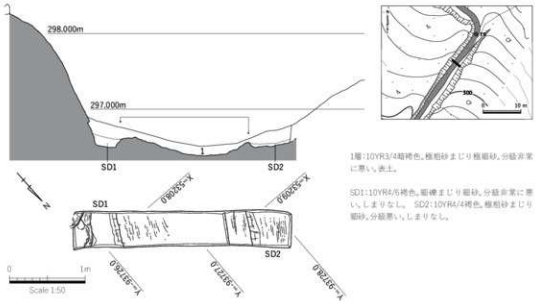



図2-32　夜昼峠越 ２トレンチ平面図・断面図

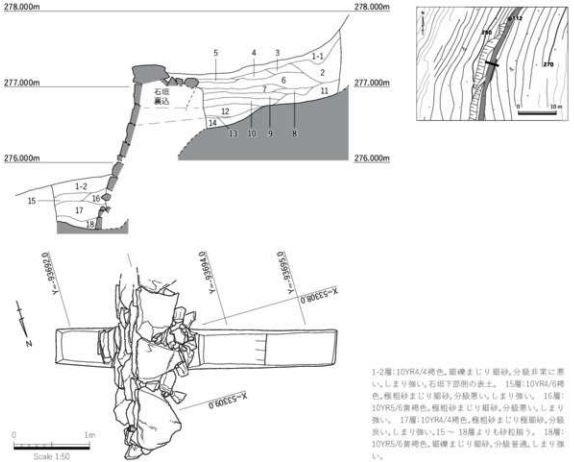
（２）試掘調査

試掘調査では、夜昼峠越上に６箇所のトレンチを設け、道の構造の把握、遺構の発見を試みた。

**１トレンチ（図2-31）**　峠から約165mの地点に設定し、谷状に道がのびる地点で排水溝などの遺構検出を目指した。

表土は褐色砂質土で、トレンチ両脇には明褐色砂質土の２、３層が斜堆積している。地山面には、深さ10～15cmの溝が２条設けられており（SD１，２）、当時の道幅は約1.5mであったことが判明した。なお、この溝は道の排水溝と考えられ、このうち南側のSD１は、埋没後に再掘削されている。ただし、いずれの溝も水成堆積を示すような構造は確認できなかった。

地山面は、道の中央部が緩やかに凹むようになっており、この上に石敷されている。石敷の礫は、亜角礫の泥質片岩とみられ、周辺で採取可能なものである。礫の大きさは直径３～５cm程度である。地山は風化が進行して軟弱であり、通行による路面中央部の沈下、不陸を軽減するため設




1-2層:10YR4/4褐色、礫礫まじり細砂。分級非常に悪い。しまり強い。石垣下部側の表土。　15層:10YR4/6褐色、極粗砂まじり細砂。分級悪い。しまり強い。　16層:10YR5/6黄褐色、極粗砂まじり細砂。分級悪い。しまり強い。　17層:10YR4/4褐色、極粗砂まじり極細砂。分級良い。しまり強い。15～18層よりも砂粒揃う。　18層:10YR5/8黄褐色、礫礫まじり細砂。分級普通。しまり強い。

1-1層:10YR4/4褐色、礫礫まじり細砂。分級良い。しまり強い。石垣上部側の表土。　2層:10YR4/6褐色、礫礫まじり細砂。分級非常に悪い。しまり強い。礫の混入量多い。　3層:10YR4/6褐色、極粗砂まじり細砂。分級悪い。しまり強い。礫やや多め。　4層:10YR4/6褐色、極粗砂まじり細砂。分級普通。しまり3層より強い。　5層:10YR4/4褐色、礫礫まじり細砂。分級普通。しまり強い。φ3～ 5cmの礫まじる。硬化面。　6層:10YR4/4褐色、礫礫まじり細砂。分級非常に悪い。しまり弱め。礫やや多め。　7層:10YR4/4褐色、極粗砂まじり細砂。分級非常に悪い。礫の混入多め。　8層:10YR4/6褐色、極粗砂まじり細砂。分級普通。しまり強い。6,7層よりも分級良いため目立つ。　9層:10YR5/6黄褐色、礫礫まじり細砂。分級悪い。しまり強固。硬化面。　10層:10YR4/4褐色、礫礫まじり細砂。分級悪い。しまり強い。　11層:10YR5/6黄褐色、極粗砂まじり細砂。分級普通。しまり弱い。　12層:10YR4/4褐色、礫まじり細砂。分級非常に悪い。しまり強い。角礫の混入多い。　13層:2.5Y4/3オリーブ褐色、礫礫まじり中砂。分級非常に悪い。しまり強固。硬化面。　14層:10YR5/6黄褐色、極粗砂まじり細砂。分級悪い。しまり弱め。礫の混入多め。

図2-33　夜昼峠越 3トレンチ平面図・断面図

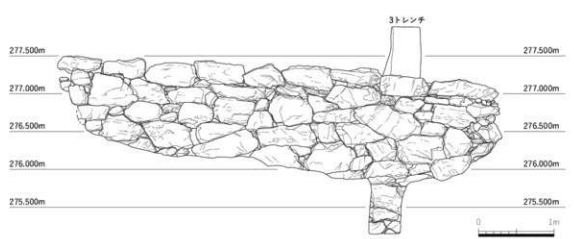



図2-34　夜昼峠越 石積１立面図

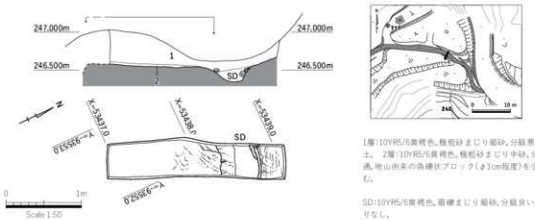



図2-35　夜昼峠越 ４トレンチ平面図・断面図

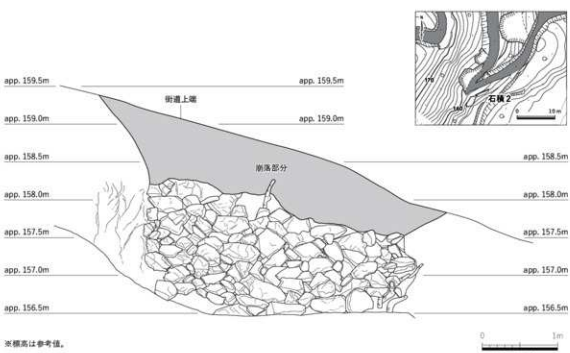



図2-36　夜昼峠越 石積２立面図

けられたと考えられる。

出土遺物はなかった。

**２トレンチ(図2-32)**　峠から約240m、１トレンチから約70m下りの地点に設定し、排水溝などの遺構検出を目指した。

表土は暗褐色砂質土で、トレンチ両脇で溝を１条ずつ検出した(SD １，２)。いずれも１トレンチの溝と同様に排水溝と考えられる。埋土はいずれも褐色砂質土で、水成堆積を示すような構造は確認できなかった。

道は、断面で緩やかな弧を描いており、路面はSD １，２の底よりも10cm程度低い位置にある。通行などのや雨水などの影響によって、路面中央部が沈下した結果と考えられる。

出土遺物はなかった。

**３トレンチ(石積１、図2-33,34)**　山腹を沿い

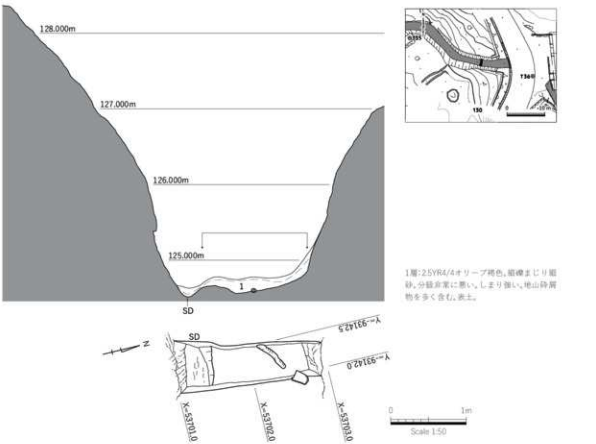



図2-37　夜昼峠越 5 トレンチ平面図・断面図

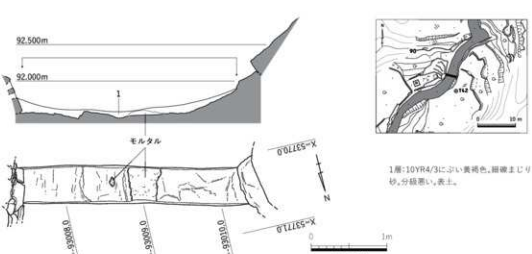



図2-38　夜昼峠越 6 トレンチ平面図・断面図

に下る経路上にある石積の構造を確認するため調査した。

石積は野面乱積みで、モルタル等の使用は確認できない。周辺で採集可能な泥質片岩が主に用いられ、全長は約5.8m、現地表面から天端石までの高さは、高いところで約1.5mになる。石積背面には、小規模ではあるが裏込めも施され、栗石は築石と同じく泥質片岩の角礫が充填される。石積背面の地山は谷側へ傾斜しており、下部から盛土によって平坦面をつくり出している。なかでも、約20cm間隔で非常に強くしまった層（５，９，13層）が堆積しており、これはおおよそ築石１段分の間隔である。つまり、おおよそ１段分ごとに盛土をつき固めながら石積背面を構築している。

石積前面も調査し、現地表下約70cmで根石２石を検出した。根石は、上部の築石よりも小ぶりな礫が並んでいる。地山は根切りされ、やや石積側に向けて傾斜がつく。盛土の15 ～ 18層はしまりが強く、根石や石積下部の迫り出しを防ぐための盛土と思われる。

今回設定した３トレンチの前後区間は、路肩や法面の小規模な崩落箇所が複数あり、この石積は道の補修のために築かれた可能性がある。

遺物は出土しておらず、築造時期は不明である。ただし、昭和期にはすでに存在していたという証言もあることから、近代以前のものと捉えておく。

**４トレンチ（図2-35）**　旧府県道へアビンカーブとの合流点近くに設定した。南側は崖面となっている。現状では、幅約60cmのくぼみが道として機能している。

地山は崖面側が平坦となっており、こちらも人為的につくりだされた平坦面とみられる。また、現在の道の直下には、並行して溝状のくぼみが走る。くぼみの底幅は約20cmで、埋土は分級の良い黄褐色砂質土であり、排水溝と考えられる。地山平坦面の直上には、地山に由来すると思われる黄褐色砂質土が薄く堆積しており、硬化などはしていない。当初は、この平坦部が道であったと思われる。現在の道は、この上に１層を盛土して形成されている。

このトレンチを設定した地点の周囲は、明治40(1907)年に開通した旧府県道が複雑に屈曲して通る区間にあたり、本来の道（旧街道）は大きく改変を受けているとみられる。地形図（図2-28）を確認する限り、トレンチを設定した地点の前後区間と旧府県道とは不自然な交差をしていることから、調査地点の道は新たに付け替えられた小径の可能性もある。ただし、今回の試掘調査では、このことを明らかにできるような痕跡は発見することはできなかった。今後は、現地形のさらなる精査が必要である。

出土遺物はなかった。

**石積２（図2-36）**　調査対象区間としては２つ目の石積で、道が大きく蛇行しながら高度を下げる地点にある。地山が崩落した、もしくは地山を掘り込んだところに法面の補強として築かれているが、非常に脆弱な状態である。現在は上部がすでに崩落してしまっており、残存する高さは約２mとなっている。築石が崩落した部分では、背面で地山が露出した状態であることから、地山に接するように築石を積み上げている。ただし、地山は風化した泥質片岩で安定しておらず、これが構造的に脆弱な要因と思われる。築造された時期は不明だが、応急処置的に築造された可能性を指摘しておきたい。

**５トレンチ（図2-37）**　調査対象区間としては唯一の切通部において、道路構造を調査するために設定した。

覆土は表土のみで、堆積厚は約20cmである。表土はオリーブ褐色砂質土で、法面などからの崩土が主体とみられる。道の南側には、地山を削って排水溝が形成されている。道部は不陸になっており、これは雨水などによる水食作用が影響したとみられる。

トレンチ設定地点での切土法面の高さは、南側で約3.8m、北側で約2.2mを測る。地山は泥質片岩とみられ、風化が進んでいる。

出土遺物はなかった。

**６トレンチ（図2-38）**　終点まで約40mの地点、日露戦争などの従軍者記念碑の近くに設定した。

トレンチ東側は、旧耕作地の整備で設けられた小規模な石積に接する。

覆土は1層のみで、堆積厚は薄いところで3cmに満たない。表土はにぶい黄褐色砂質土で、地山砕屑物の細礫が多くまじる。地山は風化などの影響で不陸になっている。

道の中央部では地山に貼りついたモルタルを検出し、近代以降に道が整備された痕跡が残る。なお、終点付近でもモルタルによって石敷されている地点を確認しており、このトレンチで検出したモルタルは、終点から一連の整備で舗装されたものと思われる。

出土遺物はなかった。

（3）石造物調査

今回の調査で、石造物を13件確認した。各石造物の種別等は表2-02に示した。以下、始点側から順に記述する。

**石造物21（図版16-4）** 夜昼峠越沿いではなく、旧府県道に設置された石造物だが、峠の往来に関するもののため、報告に加える。砂岩製の地蔵菩薩立像で、像高は56cmを測る。袈裟の衣文ははっきりと表現され、両手で香炉を抱えている。足元には8cm角の枘が設けられ、石造物22（台座）の枘穴に接合できるよう加工されている。

**石造物22（図版16-4）** 石造物21の台座で、花崗岩製である。高さ26cm、幅30cm、奥行28cmの直方体で、上面には8cm角で深さ4cmの枘穴がある。正面には発起人の銘があり、右側面には「袁多（喜多）郡 西宇和郡 馬引連中」とあることから、郡発足の明治11（1878）年以降、荷役の安全祈願のために設置されたことがわかる。なお、地元住民によれば、落雷に遭い命を落とした通行者を弔うために建立されたとの伝承も残るという。

**石造物23（図版16-5,6, 図2-39）** 砂岩製の櫛形墓で、5片以上に破損した状態で発見された。中央部の破片は欠損し、未発見である。復元高48.6cm、幅17.2cm、奥行11.0cmを測る。正面以外は整形時の加工痕がそのまま残っている。一部欠損しているが、状況から享保17（1732）年のものの可能性が高く、夜昼峠越沿道の石造物として確認できたものとしては最も古い。信女とあることから、成人女性の墓石である。墓石中に地名などが記されていないことから、遍路ではなく一般民の墓の可能性が高い。なお、この周辺には、墓石を安置したと考えられる台石などが数基分残されており、小規模な墓域を形成していたと思われる。

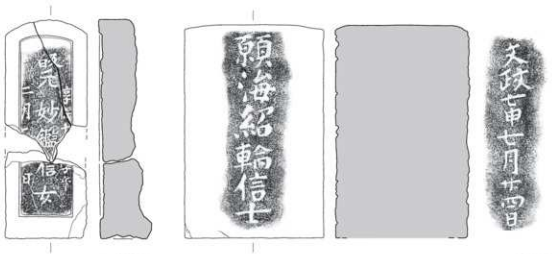
**石造物24（図版17-2, 図2-39）** 砂岩製の墓石で、高さ45.1cm、幅29.4cm、奥行28.2cmの直方体である。信士とあることから、成人男性の墓石である。右側面の銘から文政7（1824）年のものとわかるが、地名などは記されていないため、遍路墓ではなく一般民の墓である可能性が高い。

**石造物25（図版17-2）** 砂岩製の地蔵菩薩像で、現在は石造物24の上に安置されている。高さ49cm、幅（膝張り）39cm、奥行29cmを測る。右手に宝珠を持ち、左手には剣を持たせるための穴が穿たれる。半跏趺坐の座法をとり、下げた左脚は短めにデフォルメされる。

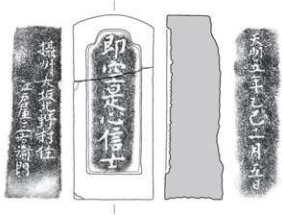
**石造物26（図版17-4）** 砂岩製の地蔵菩薩坐像で、頭部は破損している。破損した頭部を含めた総高は42cm、幅（膝張り）23.5cmを測る。袈裟や衣文などは簡素な線刻で表現され、両手で宝珠を抱えている。また、蓮華座に半跏趺座する様子も簡素に表現されている。

**石造物27（図版17-3）** 石造物26と同じく、砂岩製の地蔵菩薩坐像で、頭部は破損している。破損した頭部を含めた総高は39cm、幅（膝張り）29.5cmを測る。袈裟や衣文などは簡素な線刻で表現され、両手で宝珠を抱えている。蓮華座に半跏趺座する様子も簡素に表現されているが、石造物26と異なり蓮華座よりも膝張りが大きい。

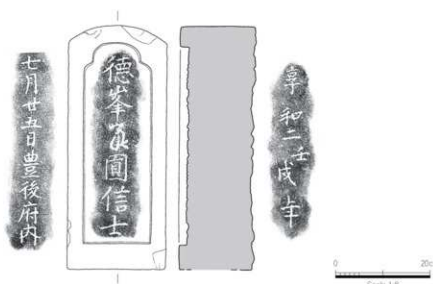
**石造物28（図版17-5）** 砂岩製の地蔵菩薩坐像で、胴部以上は欠損している。残高は31cm、幅（膝張り）27.5cmを測る。袈裟や衣文などは簡素な線刻で表現され、両手で宝珠を抱えている。蓮華座に半跏趺座する様子も簡素に表現されているが、石造物26, 27とは異なり蓮弁の葉先の反りが表現されている。



石造物23　　石造物24



石造物29



石造物31

図2-39　夜昼峠越 石造物実測図・拓本

石造物26，27の地蔵菩薩坐像は首が落とされ、石造物28は袈裟切りされたように破損していることから、いずれも明治期の廃仏毀釈運動による意図的な破壊が考えられる。なお、地元住民によると、ご利益を得られることから一時的に首だけが盗難に遭ったという伝承が残るとのことである。

**石造物29（図版17-1，図2-39）**　石造物23と同じく砂岩製の櫛形墓石で、上下２分割に破損している。高さ29.0cm、幅16.8cm、奥行12.4cmを測る。裏面と下面は整形時の加工痕が残り、それ以外は平滑に研削されている。発見当初は泥質片岩の角礫に囲繞され、裏面を道路側に向けて立っていた。天明５（1785）年の銘があり、摂津国西成郡北野村（現・大阪府大阪市北区）出身の者の墓である。都市部出身者で「江戸屋」の屋号が冠されることから、商人が客死したものと思われる。

**石造物30（図版17-6）**　夜昼集会所の奥にあり、遍路墓と伝わるものである。泥質片岩製と思われ、自然礫に近い状態である。夜昼集会所の犬走り（コンクリート製）に埋め込まれており、表面からの高さ65cm、幅46cmで、厚さは９cmと平たい。地元住民によれば、現在の夜昼集会所が建てられる前から存在しており、遍路墓として伝えられていたとのことである。現在の集会所建設の際に撤去せず、現地で保存されることとなったという。現在も献花が絶えない。

**石造物31（図版18-1，図2-39）**　小堂宇に納められた砂岩製の墓石である。櫛形墓石で、高さ51.6cm、幅20.7cm、奥行15.9cmを測る。下面と裏面以外は丁寧に研削されている。堂宇に納められていたため、表面の風化や劣化が少ない。正面には戒名が記され、信士とあることから成人男性の墓である。側面には享和２（1802）年７月の銘があり、豊後府内（現・大分県大分市中心部）が出自の者とわかる。宇和島藩の遍路統制により、寛政12（1800）年以降は九州から渡海し八幡浜から第44番札所の大寶寺、第45番札所の岩屋寺方面を目指す遍路の指定経路となっていたこと、また、逆打ちに限り九州へ渡海する経路として認めた法令は、男性がなくなったあとの享和２（1802）年10月７日付けで発出されていることから、九州から渡海して間もなく客死した男性遍路の墓と想定される。地元では、行き倒れた六部（六十六部）の墓として伝わり、現在も丁重な供養が続けられている。

**石造物32（図版18-2）**　石造物31の納められた小堂宇前にある浄水鉢である。砂岩製で、正面には「奉」が大きく彫られている。

**石造物33（図版18-3）**　石造物32の小堂宇から道側へ約４m離れたところにある花崗岩製の几号水準点である。平面は21.5cm角の隅丸正方形で、上面に半球状の突起がある。泥質片岩の礫やモルタルに囲繞され、大半は地中に埋められた状態である。地表面からの高さは10cmである。正面に几号が刻まれ、裏面に「四五六」の刻銘があり、刻銘は地表面以下にも続くと思われる。明治37（1904）年測図、昭和８（1923）年修正の地形図（図2-26）には、標高183.30mの水準点が記されており、石造物33はこの水準点に比定される。今回あらためて標高を求め、183.308mの値を得た。

**石造物34（図版18-4）**　石造物33の傍にある浄水鉢である。花崗岩製で、正面に「奉」が大きく彫られる。明治34（1901）年のものである。

（４）聴き取りによるその他の成果

**氏神祠**　夜昼峠越がのびる尾根上には、小さな祠が点在している。地元住民からの聴き取りによれば、氏神様を祀ったものとされる。３箇所の存在が知られており、シミズガミサマ（清水神様）、ミシマサマ（三島様、写真2-09）、ヤマモトガミサ

写真2-09　氏神祠

マ(山本神様)をそれぞれ祀っているという。このうちヤマモトガミサマは開発によって失われたとされるが、シミズガミサマとミシマサマは残る。シミズガミサマは峠道から逸れた尾根筋にあり、ミシマサマは旧夜昼公園内にある。それぞれブリキの覆屋、木製の覆屋が設けられ、覆屋のなかにはいずれも瓦製の小祠が納められている。

**オウカン**　今回調査対象とした夜昼峠越以外にも、峠と麓とを結ぶ「オウカン(往還)」の存在が、地元住民の証言から明らかになった。昭和期には、徒歩による八幡浜側への往来は、このオウカンが主に用いられたという。ただし、明治期地形図には道の表記がないため、明治期以降、新たに通行されはじめた道の可能性がある。

このオウカンは、今回調査対象とした道とは逆方向の南側へのび、大きく屈曲しながら、石造物21,22付近の旧県府道へ合流する。そののちは谷部に沿って道がのび、夜昼集会所付近で夜昼峠越と合流する。このオウカンも、現在は利用者がなく、大きく荒れた状態となっている。

なお、このオウカンと旧府県道とが合流する地点には、昭和前半期に小規模な旅館と数軒の茶屋が存在していたという。

## 表2-2　八幡浜街道夜昼峠越 石造物一覧表

| 石造物番号 | 種別 | 石材 | 寸法 最大高(cm) | 最大幅(cm) | 最大厚(cm) | 年代 | 形状／主な造形／主な刻銘文／備考 | 挿図番号 | 図版番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 21 | 地蔵菩薩 | 砂岩 | 56 | 24.5 | 14.5 | — | 底部に、石造物22へ挿し込む突起あり。 | — | 16-4 |
| 22 | 台座 | 花崗岩 | 26 | 30 | 28 | — | 直方体、上面に石造物21を挿し込む枘穴(８×８cm)あり。<br>【正面】發起人／大洲 首藤玉太郎<br>【右側面】喜多郡／西宇和郡／馬引連中 | 2-37 | 16-4 |
| 23 | 墓石 | 砂岩 | 48.6 | 17.2 | 11.0 | 享保17<br>(1732)<br>? | 櫛形墓、５片以上に破損し、中央部は欠損。<br>【正面】享保十□□子年／版元妙鑑信女／二月二□□日 | 2-37 | 16-5<br>16-6 |
| 24 | 墓石 | 砂岩 | 45.1 | 29.4 | 28.2 | 文政７<br>(1824) | 直方体。<br>【正面】願海院輪信士<br>【右側面】文政七申月廿四日 | — | 17-2 |
| 25 | 地蔵菩薩 | 砂岩 | 49 | 39 | 29 | — | 坐像。石造物24の上に配置。 | — | 17-2 |
| 26 | 地蔵菩薩 | 砂岩 | 42 | 23.5 | 24 | — | 坐像、頭部折損。最大高は折損した頭部を含めた数値。 | — | 17-4 |
| 27 | 地蔵菩薩 | 砂岩 | 39 | 29.5 | 25 | — | 坐像、頭部折損。最大高は折損した頭部を含めた数値。 | — | 17-3 |
| 28 | 地蔵菩薩 | 砂岩 | 31 | 27.5 | 26 | — | 坐像、頭部以上は欠損。 | — | 17-5 |
| 29 | 墓石 | 砂岩 | 29.0 | 16.8 | 12.4 | 天明５<br>(1785) | 櫛形墓、上部で２分割に折損。<br>【正面】即空是心信士<br>【右側面】天明五年乙巳二月五日<br>【左側面】攝州大坂北野村住／江戸屋三右衛門 | 2-37 | 17-1 |
| 30 | 墓石？ | 泥質片岩？ | (65) | 46 | 9 | — | 自然石か、夜昼集会所竣工前より存在。 | — | 17-6 |
| 31 | 墓石 | 砂岩 | 51.6 | 20.7 | 15.9 | 享和２<br>(1802) | 【正面】徳峯承圓信士　(「承」のみ草書体)<br>【右側面】享和二壬戌年<br>【左側面】七月廿五日豊後府内 | 2-37 | 18-1 |
| 32 | 浄水鉢 | 砂岩 | 31 | 37 | 26 | — | 【正面】奉<br>【左側面】夜晝／巳歳男 | — | 18-2 |
| 33 | 几号水準点 | 花崗岩 | (10) | 21.5 | 21.5 | — | 角柱、上面に半球状の突起あり。旧版地形図で標高183.30mを示す。<br>【正面】(几号)<br>【側面】四五六… | — | 18-3 |
| 34 | 浄水鉢 | 花崗岩 | 21.5 | 24.5 | 17 | 明治34<br>(1901) | 【正面】明治三十四年四月吉日／奉 | — | 18-4 |

※最大高のうち、(　　) のあるものは地表面からの高さを示す。
※銘刻のうち、欠損によって文字が欠落している箇所は□で示した。

## ６．まとめ

一連の調査で、大洲市内に残る２本の遍路道・旧街道を調査した。こうした歴史的な道の本格的調査は、大洲市内では初めてのことであり、他地域への往来や、遍路に関する多くの成果を得た。以下、各道の成果についてまとめる。

（１）宇和島街道鳥坂峠越

西予市と大洲市とにまたがる宇和島街道鳥坂峠越について、大洲市側の約 2,564m と道沿いに立地する日天社について調査した。

**地形測量**　街道の測量調査では、なるべく尾根筋を避け、全体的に起伏が小さくなるようような経路が選択されていることが明らかとなった。

日天社から約 230m の区間や、終点に近い尾根端部などの一部では、部分的に勾配が 20％を超えるような急坂区間もある。しかし、日天社から終点までの平均勾配は約９％であり、全体的には緩やかな傾斜といえる。一方、西予市側の上り区間（大洲藩口留番所跡～鳥坂峠間）は、平均勾配が約 16％に及ぶため、峠を挟んで対照的となっている。

**試掘調査**　街道部の試掘調査では、合計 10 本の試掘坑を設定した。この結果、地山を整形して道が形成されている様子を多くの地点で確認できた。一方、大規模に盛土し、高低差を小さくしようとした地点（3A,B トレンチ）、路面に石敷している地点（4A トレンチ）もあった。このような道の整備状況から、人や牛馬などが頻繁に往来していたことが示唆される。残念ながら、道の形成時期や利用停止時期などは、今回の調査では明らかにすることができなかった。ただし、聴き取りによれば、昭和 10（1935）年前後より、徐々に通行量が減少したということである。

日天社の試掘調査では、現在建つ四阿の前後地点２箇所に試掘坑を設定した。遺物などが出土しなかったため時期は不明だが、日天社境内の全体で盛土されていることが判明した。明治 34(1901) 年に日天社が造営されており、前社殿の石垣が盛土上に組まれていることから、状況的に日天社造営時の盛土の可能性がある。

**石造物調査**　沿線の石造物についても調査をおこなった。このうち墓石については、４基のうち３基に越後、山城、筑後といった四国島外の地名が記されていた。この３基は遍路墓の可能性が高い。とくに、石造物 10 は若年僧侶の墓であり、修行の一環として遍路をしていたところで客死したと考えられる。なお、鳥坂峠越から約 7.5km 南西に位置する国史跡「八幡浜街道笠置峠越」でも、北陸（佐渡島、加賀）、九州（筑前、筑後、肥後、豊後）の遍路墓が残されており、多方面から通行者がいたことがわかる。

残りの１基は女児の墓石であったが、鳥坂峠越では最も古い正徳元（1711）年の表記があり、少なくともこれ以前には道が整備されていた可能性を示している。

道標も５基が残されており、江戸期にさかのぼるものが３基、明治期以降に設置されたものが２基である。江戸期のものは、朝倉村（愛媛県今治市）出身の武田徳右衛門が施主のもの（いわゆる徳右衛門丁石）と、備前出身者が施主のものとがあり、いずれも大洲藩領外の出身者によるものである。

（２）八幡浜街道夜昼峠越

八幡浜市と大洲市とにまたがる八幡浜街道夜昼峠越について、大洲市側の約 1,557m について調査した。

**地形測量**　始点から約 520m の区間は、尾根筋を避けるような経路が選択され、以降は終点まで尾根筋沿いに下るような経路であることがわかった。

始点（峠）から終点までの平均勾配は約 15％になり、急傾斜が続く峠道であることがわかる。局所的には 45％を超える地点もあり、往来の難所であったことが想像される。

**試掘調査**　試掘調査では、夜昼峠越上に６箇所のトレンチを設け、道の構造の把握、遺構の発見

を試みた。結果、鳥坂峠越と同様に、ほとんどの地点で地山を整形して道が通されていたことが判明した。道に付随する排水溝も多くの地点で遺存していたほか、路面の補強のために石敷している地点（1トレンチ）もあった。また、道の補修もしくは補強のための石積も2箇所発見し、うち1箇所（3トレンチ）は背面に裏込めを施し、比較的しっかりとしたつくりであることから、当時の利用頻度の高さが表れている。

**石造物調査**　沿線の石造物についても調査をおこなった。江戸期にさかのぼる墓石は4基が確認でき、うち1基は豊後出身者のもので、1基は摂津出身の商人のものである。とくに前者に関しては、寛政12（1800）年、宇和島藩によって夜昼峠越が九州からの遍路の指定経路とされて以降のものであることから、遍路墓の可能性が高い。また、自然石の立石1基も遍路墓であるとの伝承が残っている。

ただし、鳥坂峠越のように遍路道を示すような道標や、弘法大師を表した石造物は確認できなかった。この街道で遍路の通行が認められたのは寛政12（1800）年以降であることから、鳥坂峠越と比較して遍路を通した実績が少ないことを反映しているものと思われる。

（3）今後の展望と課題

今回の調査では、とくに往時の道の構造や、付随する石造物の性格を把握するうえで、大きな成果を得ることができた。試掘調査はいずれも小規模であったが、排水溝の存在、盛土や石敷による路線改良の痕跡などを捉えることができた。石造物調査では、遍路墓と思われる墓石を複数確認することができたほか、近代以降も道中安全、交通安全を意図した道標などが設置されていることが明らかとなった。

ただし、道路遺構は廃棄の場となりにくいという性質上、両道で道の時期を推測するような出土遺物を発見することは叶わなかった。また、改良を重ねながら長期間にわたって使用されるという性質や、当時の道の状況を直接的に記録した文献が残っていないことも、整備や使用時期の比定を困難にしている。道の時期や使用期間などについては、県内外の調査事例を積み重ね、また、文献などの精査もおこないながら総合的に判断する必要があろう。

鳥坂峠越と夜昼峠越はともに、明治後半から大正にかけての車道整備、1970年代の国道・トンネル整備によって通行量が大きく減っており、現在は両道ともに一部区間を除いて利用者がほとんどいない。長らく幹線道として機能していた道も、その存在すら忘却されようとしていただけに、この調査は貴重な機会となった。今後は、大洲地域と周辺地域とを結んだ交通路として、また、歴史的に遍路も通行してきた道として、その存在を広く周知し、いかに保護するかが課題となる。さらに、大洲市内にある四国別格二十霊場の出石寺も、多くの遍路が立ち寄った歴史を積み重ねており、こうした旧道への目配りも重要になってくるものと思われる。

【参考文献】

井上　淳　2020「第４講　江戸時代の遍路統制」『四国遍路の世界』、筑摩書房

内田九州男　2009「近世における四国諸藩の遍路統制」『第１回四国地域史研究大会―四国遍路研究前進のために―　公開シンポジウム・研究集会報告書』、四国地域史研究連絡協議会・愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会

愛媛県教育委員会 編　2012a『愛媛県歴史の道総合計画―基本構想編―』、愛媛県教育委員会

愛媛県教育委員会 編　2012b『愛媛県歴史の道総合計画―詳細構想編―』、愛媛県教育委員会

愛媛県教育委員会事務局文化財保護課 編1997『宇和島街道』愛媛県歴史の道調査報告書第６集、愛媛県教育委員会

愛媛県教育委員会事務局文化財保護課 編2012『八幡浜街道』愛媛県歴史の道調査報告書第９集、愛媛県教育委員会

愛媛県生涯学習センター 編2002『伊予の遍路道（平成13年度 遍路文化の学術整理報告書）』、愛媛県生涯学習センター

兒玉洋志 編　2020『西予市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅴ―平成29年～令和５年度小森古墳調査報告①―』西予市埋蔵文化財調査報告書第11集、西予市教育委員会

寺内　浩　2003『２章　古代国家と伊予国』『愛媛県の歴史』県史37、山川出版社

# 第３章　中世城館跡の調査

藏本　諭・日和佐宣正(愛媛県教育委員会 文化財保護課)

## １．調査の経緯・目的・経過

（１）調査までの経緯・調査目的

大洲市は 142 件の埋蔵文化財包蔵地を抱える。このうち約７割を占めるのが城館跡であり、大小あわせて 101 件の城館跡が周知の埋蔵文化財包蔵地とされている（令和４年３月現在）。

しかし、大洲城跡などごく一部の城館跡を除いては、郭や堀切などの遺構残存状況が比較的良好なものであっても、調査がおこなわれた実績はほとんどない。愛媛県教育委員会が昭和 59 ～ 61（1984 ～ 1986）年、愛媛県下全域を対象として分布調査を実施しているものの、この際に試掘調査などは実施されておらず、また、縄張図など城館跡の構造がわかるような図面の作成も一部にとどまっていた。このような状況であることから、多くの城館跡が、構造や重要性について周知されぬまま、開発行為や自然災害によって損なわれるおそれがあった。

こうした事態を避けるため、大洲市教育委員会では、市内に残る主要な城館跡の現状を把握することを目的に、令和元（2019）年度から国庫補助事業として調査を実施する運びとなった。

（藏本）

（２）調査の方法

調査対象は、近世に編纂された『大洲秘録』『大洲舊記』をはじめとした文献や旧市町誌などに記載のある城館跡、もしくは、大洲市史跡に指定されている城館跡から抽出した。

一連の調査では、（ⅰ）縄張図（もしくは平面概測図）作成、（ⅱ）試掘調査、を組み合わせて実施した。

（ⅰ）では、調査指導にあたった日和佐宣正氏が主導し、縄張図を作成した。この際の測量には、マップオリエンテーリングコンパスおよび巻尺・コンベックスを使用する従来の縄張り図の作成法で実施したが、令和２年度以降の調査では、大洲市教育委員会で事前に測量した仮座標を基軸に測量した。なお、城跡の範囲が狭く構造が簡単なものは、調査担当者が仮座標をもとに、トータルステーションを用いて平面概測図を作成した。これらの図面は、大洲市農林水産部農林水産課より提供を受けた等高線図と合成したうえで出力した。

（ⅱ）では、調査対象に複数のトレンチ（試掘坑）を任意で設け、遺構もしくは遺物の検出、土塁や堀などの構造解明などを目指した。掘削はいずれも人力でおこない、埋め戻しも人力でおこなった。

写真3-01　縄張図作成の様子(猿ヶ滝城跡)

写真3-02　試掘調査の様子(白石城跡)

なお、柱穴や土坑については半裁掘削にとどめ、可能な限り遺構の保存に配慮した。これら試掘調査における測量は、任意の位置に打設した測量杭を基準に、トータルステーションを用いて実施した。その後、簡易的なGPS受信機を用いて測量杭におおまかな座標を付与し、（ｉ）で作成した図面と合成する手法を採った。試掘調査で求めた標高については、過去の測量事業（国土調査、道路建設など）の成果が利用できるものは、その数値を引用した。過去の成果が利用困難な環境の場合は、上記のGPS受信機を用いて標高を算出した。この場合の標高については､数値の前に「app.」（=approximately）を挿入して区別し、おおよその標高の理解を助けた。　（藏本）

（３）調査の経過

令和元年度は、令和元（2019）年12月から調査を開始し、橘城跡（肱川町中居谷）、笹の森城跡（肱川町中居谷）、白石城跡（肱川町大谷）の３箇所で調査を実施した。

令和２年１月14日、３月17日には、調査指導の日和佐氏とともに橘城跡、笹の森城跡の縄張図を作成した。

令和２年度は、令和２（2020）年４月から調査を開始し、八黒城跡（肱川町宇和川）、高尾城跡（肱川町西）、猿ヶ滝城跡（肱川町予子林）の３箇所で調査を実施した。

令和３年２月19日、２月22日、３月17日には、調査指導の日和佐氏とともに高尾城跡、猿ヶ滝城跡の縄張図を作成した。

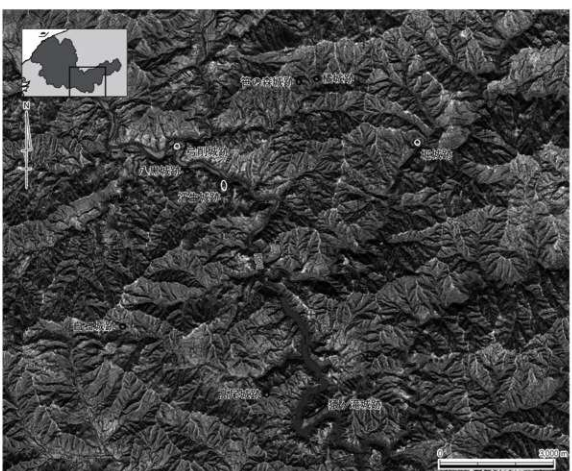



図3-01　調査対象および周辺の中世城館跡

令和３年度は、令和３（2021）年５月から調査を開始し、猿ヶ滝城跡（主に郭群Ｄ）の追加調査を実施したほか、汗生（あせお）城跡の調査を進めた（調査継続中）。

令和３年10月４日には、猿ヶ滝城跡において村上恭通（やすゆき）氏（愛媛大学アジア古代産業考古学研究センター）による現地での調査指導を得た。また、12月20日には、柴田圭子氏（愛媛県埋蔵文化財センター）より出土遺物に対する調査指導を得た。

なお、試掘調査終了後の整理作業は随時おこない、令和４年１月までに完了した。　（藏本）

## ２．猿ヶ滝城跡の調査成果

（１）城館の特徴

猿ヶ滝城は肱川中流域の東岸にあり、標高 460 mの竜王山から西に派生する尾根先に占地している。東の尾根続き以外の北側、南側と西側は肱川にせり出した急傾斜となっている。最高所は標高 291.77 m（四等三角点「猿ヶ滝」）である。現代でも当該地点付近の肱川東岸には道がないように、中世にも肱川東岸を往来する交通路はなかったと考えられ、西予市野村町予子林と大洲市肱川町予子林地区を往来する陸路に対する城跡と考えられる。一方、肱川舟運との関係では東南東２km余り先に近代までの肱川舟運の上流限界の坂石集落がある。

城跡は、東の堀切から西端の郭まで約 620 m に及ぶ広大な規模を有する。しかし、中央の鞍部が公園整備に伴って駐車場として整地されていることもあるが、一体の尾根線上にあるものの人工的な地業の痕跡がみられないところもあり、大きく４つのブロックに遺構が散在していると言ってよい。三角点「猿ヶ滝」のある郭を主郭としてもよいが、既述の鞍部の駐車場を挟んで南西にある郭群との一体性は認められず、それぞれのブロックが全体的な一体性もなく散在している。散在する遺構ではあるが、今回の記述の都合上、三角点「猿ヶ滝」郭１とし、その関係性から郭番号を割り振って記述することとし、ここでは郭１～６を郭群Ａ、郭７・８を郭群Ｂ、郭９～ 11 を郭群Ｃ、郭 12・13 を郭群Ｄとして記述する。

郭群Ａでは、郭１には長軸 18 m、短軸９mの楕円形で中心には祠が祀られている。郭の東側は細い尾根続きとなり切岸を伴っていない。郭１の南西に郭２があり、比高は 1.1 mである。郭２は北東－南西に長軸を持つ郭であるが、明確な切岸がなく、南西側では切岸ラインがやや明瞭になってくる。郭３に面する側は、公園整備に伴う重機による園路整備で破壊が著しいが、その下の岩の崖面もあって防御ラインとしては有効である。郭２の南西側に腰郭の郭３がある。郭の中央部を園路で寸断されているが、郭幅は４～５m程度で、北西側は塁線が明瞭であるが、南東側は切岸もなく自然地形に近い。東端には幅 1.3 m程度の土塁が緩やかに南に傾斜を伴ってあるが、郭２とは既述の岸壁もあって連絡路となってはいない。郭３の南西には南西側に突出する三角形状の郭４があり、その比高は 1.8 mである。郭４の塁線は明瞭で下位の郭５との比高は 5.8 mを測る。郭５の塁線も明瞭で下位の半円形を呈する郭６との比高は 3.2 mある。さらに南西の郭６は全体的に外縁に対して傾斜しているものの、塁線は明瞭である。南西側の切岸は休憩所の造営で開削されている。全体的に郭１～郭６は肱川側に対しての防御機能はなく、南西側に切岸を連続する縄張りとなっており、駐車場のある鞍部から攻め上ってくる敵勢を意識したものである。

郭群Ｂの郭７と郭８は、郭１から 120 m南南東にある郭群である。中心となる郭７には高さ 1.4 mの小規模な段があるが、郭と呼べる規模ではない。郭７の北東側を中心に広がる郭８は高低差 1.0 m程度があるものの、明瞭な切岸を伴っていない。郭７の東端は東の尾根続きに対する唯一の防御線である。堀切が穿たれており、堀幅 11.5 m城内側の深さは約 4.1 m（発掘調査で約 0.5 mの堆積が確認されており、計測値 4.62 m）、城外側約 2.2 m（同、計測値 2.68 m）である。岩盤を削って堀切が設けられており、東側に対する防御意識の高さがうかがえる。

駐車場の南西側には郭９～ 11 の郭群Ｃがある。郭９は長軸 64 m、短軸 19.4 mの郭で、北東ほど幅広く、南西側では狭くなっている。北側にそれぞれ下位の郭に対して坂路があるが、法面に掘削面が確認できることから、近代の開削と考えられる。郭 10 との間の坂路は３m弱の幅があり、公園整備に伴って重機によって開削されたものと考えられる。一方、南側には幅が大小するものの、傾斜の緩やかな坂路がある。郭９に登る直前で幅が狭くなって、郭９から有効な射線が確保されてい

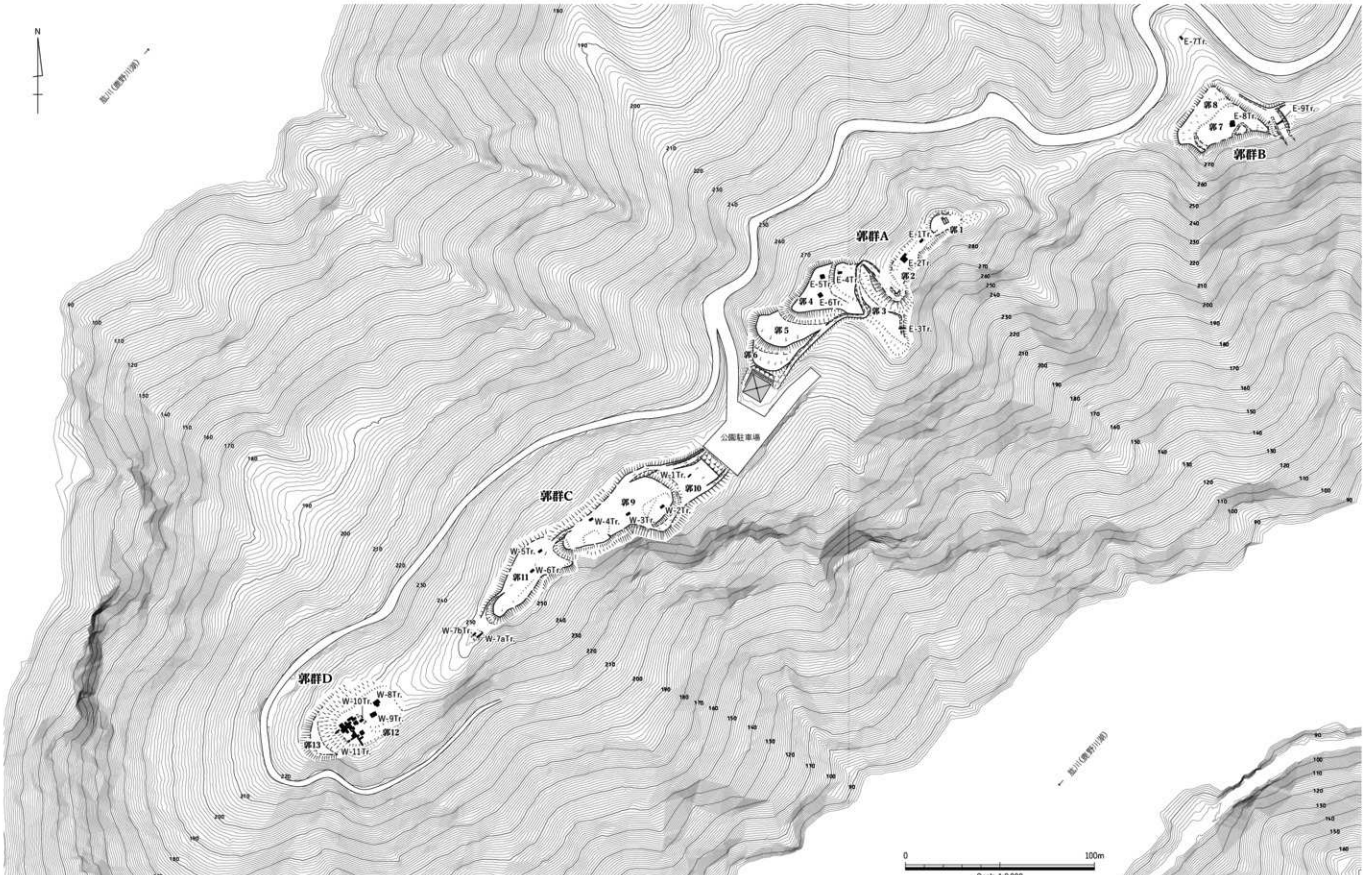



図3-02　猿ヶ滝城跡 縄張図

ることから、防御意識の高さが窺える部位である。郭 10 は郭 9 の北東側にあるが、東側が駐車場整備のために削られており、郭 9 と同様に北側が重機によって坂路が開削されている。郭 9 と同様に南側に下位につながる坂路があるが、重機を通すために開削された北側の坂路があることから、ある程度の坂路がもともとあったものと考えられる。郭 9 の南西側には比高 3.2 m で郭 11 がある。長軸 46 m、短軸 16 m の規模である。郭 9 同様に下位に対して北側に坂路があり、南西側の尾根先に続いている。郭 11 の塁線は比較的明瞭で、南西側では切岸が整備されており、その比高は 4.4 m を測る。

郭 11 の南西は自然地形であるが、かすかに堀切と判断しかねる開削がみられる。堀切とも断定しかねるが、自然地形としては不自然であるため、堀切開削途中で放棄されたものと判断する。堀切の約 50 m 南西に、郭群 D、ほぼ自然地形の郭 12 がある。切岸は不明瞭であるものの、自然地形とするには無理がある長軸 35 m 程度、短軸 20 m 程度の平坦面である。郭 12 の南西に比高 4.5 m の下位に腰郭の郭 13 が付随しており、その南西には平坦面は確認できず、肱川に突出している。

これらの遺構を総体的に考慮すると、郭間の連絡路がない郭群 A と、連絡路が明瞭な郭群 C とは築城思想が異なっている。その間は現在駐車場になっているが、往時にはここにいたる何らかの道かあり、この峡に対してそれぞれの郭群が、年代差があってか、異なる勢力によってか設けられたものと考えられる。さらに、郭群 B や D が築造されたものと考えられ、これらの遺構群から、当該地域では複雑な状況がこの地域で展開していたと推測される。　（日和佐）

写真3-03　西予市指定文化財「岩本将監の墓」

（２）文献・伝承・その他特徴

猿ヶ滝城跡は三滝城（西予市城川町）の支城として位置付けられ、『宇和旧記』や『肱川町誌』などによれば、城主は三滝城主・紀（北之川）親安の城代家老であった岩本将監と伝えられる。天正８（1580）年（もしくは天正９（1581）年）、土佐勢の進攻によって、三滝城、高尾城などと同時に落城したとされ、岩本将監もこのとき戦死したとされる。『大洲旧記』には、長宗我部元親の家臣である桑名太郎左衛門（親光）が攻めかかったと記されている。なお、岩本将監が奉納したと伝わる薙刀が春日神社（西予市城川町）に残されているほか、猿ヶ滝城跡から鹿野川ダム湖を挟んで対岸の西予市野村町栗本には、宝暦 11（1761）年に建てられた岩本将監の墓が残る（西予市指定史跡）。郭１には岩本将監を祀った祠もあり、現在も地元住民による献花が絶えない。

宮脇道赭の『伊豫温故録』には、宝徳年間（1449-1452）、河野氏の命によって新田義宗（1331?-1368）・脇屋義治（1323-?）が滞居させられたとの記述がみられるものの、宝徳年間と両者の生没年とは乖離しており、真偽は不明である。

猿ヶ滝城跡は、昭和 49（1974）年３月 16 日、（旧）肱川町によって史跡に指定されている。　（藏本）

（３）試掘調査

直線距離にして約 620m と、この周辺地域としては長大な城館であるため、大きく２区に分けて調査を実施した。郭群 A および B を東区（E）、郭群 C および D を西区（W）としている。トレンチ（Tr.）名には、各アルファベットを冠し、区別させた。

**E-1 トレンチ（図 3-03）**　郭２の郭１寄りに設定し、地山の状態を確認した。

覆土は褐色砂質の表土のみである。堆積厚は約５cm と薄い。地山は岩盤質で、全体的に地肌

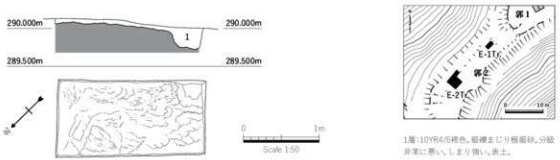



図3-03　猿ヶ滝城跡 E-1トレンチ平面図・断面図

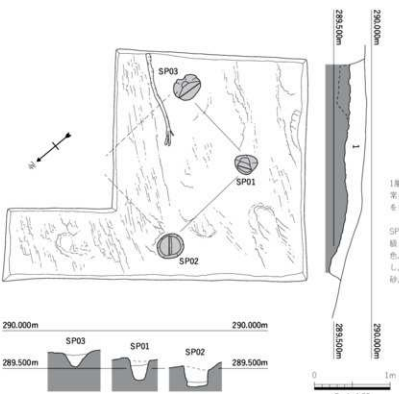



図3-04　猿ヶ滝城跡 E-2トレンチ平面図・断面図

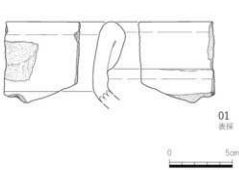


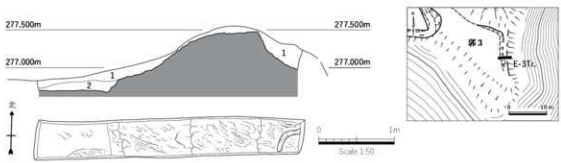

図3-05　猿ヶ滝城跡 郭２採集遺物実測図

は荒れた状態である。トレンチ南隅で、直径約30cm 以上のくぼみを検出した。当初は柱穴を想定したが、平面プランは曖昧で、側面立ち上がりの傾斜が緩やかであったため、攪乱の影響と思われる。

出土遺物はなかった。

**E-2 トレンチ（図 3-04）**　郭２の南西部に設定し、遺構の有無を確認した。

覆土は褐色砂質の表土のみで、直径 10cm 以下




1層：10YR5/6黄褐色、極粗砂まじり極細砂、分級非常に悪い、しまりなし。表土。　2層：10YR5/8黄褐色、細礫まじり極細砂、分級悪い、しまり強固。角礫（φ5cm未満）を多く含む。

図3-06　猿ヶ滝城跡 E-3トレンチ平面図・断面図

の地山砕屑物が多くまじる。堆積厚は約 20cm である。地山は岩盤質で、E-1 トレンチと同じく全体的に地肌は荒れている。

地山を掘り込むかたちで、柱穴３基を検出した（SP01 ～ 03）。いずれも直径は約 30cm、地山から底部の深さは 20 ～ 30cm で、埋土は褐色砂質土で、炭化物粒などは混入していない。柱痕は認められなかった。SP001-02 間は約 1.5m、SP01-03 間は約 1.3m でほぼ直交する。調査範囲が限定的ではあるものの、曲輪の規模を考慮すると約１間×１間分ほどの小規模建造物が想定され、城の最高所にあることから井楼の可能性を見込んでおきたい。また、この建造物の軸は曲輪（尾根）の長軸ではなく、東西南北方向を指向している。

出土遺物はなく、時期の検討はできなかった。

**郭２採集遺物（図 3-05）**　E-1、E-2 トレンチを設定した郭２で、備前焼１点を採集した。01 は大甕の口縁部で、口縁は緩に長い玉縁状となり、口縁帯はやや外傾する。内外面ともに光沢が強い。乗岡実氏による編年（乗岡編年）〔乗岡 2017〕の中世５期にあたるとみられる。

**E-3 トレンチ（図 3-06）**　郭３の南東側縁辺部に設定した。郭２の切岸から低平な土塁がのびていることから、その構造を明らかにするため調査した。

表土は褐色砂質土であり、表面は腐植土で覆われている。土塁は断面がつぶれた台形状になっており、地山を削り出して構築している。郭内側の傾斜は緩やかで、郭外側は風化・崩落の影響もあるとみられるが急斜面となる。本来はさらに高さのある土塁であったと見込まれる。この土塁の郭内側裾部に約 20cm の段が形成され、地山砕屑物を多く含んだ２層が堆積しているが、これは公園整備時の造作による影響と思われる。

出土遺物はなかった。

**E-4 トレンチ（図 3-07）**　郭３の北西側に設定し、遺構の有無を調査した。

覆土は表土のみである。表土は黄褐色砂質土で、しまりは非常に強い。表面は腐植土が覆っている。地山の肌は荒れており、遺構は検出できなかった。

出土遺物はなかった。

**E-5 トレンチ（図 3-08）**　郭４の北側に設定し、段の裾部で遺構の有無を調査した。

E-4 トレンチと同じく、覆土は表土のみである。表土は黄褐色砂質土で、やはりしまりが非常に強い。表面は腐植土が覆っている。地山の肌は荒れており、郭先端の南西方向へ下り傾斜がついている。遺構は検出できなかった。

出土遺物はなかった。

**E-6 トレンチ（図 3-09）**　郭４の南側、E-5 トレンチの南約 10m の位置に設定し、再び遺構の検出を試みた。

E-4、E-5 トレンチと同じく、覆土は表土のみである。表土は黄褐色砂質土で、しまりは強い。表面は腐植土が覆っている。この腐植土を掘り込むようにして、樹木の影響とみられる攪乱が入っ

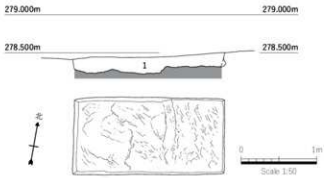



図3-07　猿ヶ滝城跡 E-4トレンチ平面図・断面図

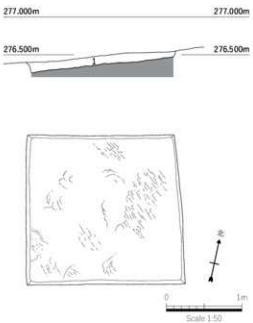



図3-08　猿ヶ滝城跡 E-5トレンチ平面図・断面図

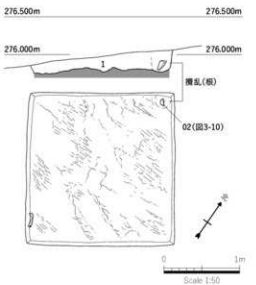



図3-09　猿ヶ滝城跡 E-6トレンチ平面図・断面図

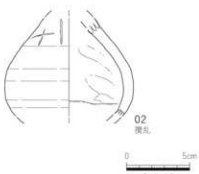



図3-10　猿ヶ滝城跡 E-6トレンチ出土遺物実測図

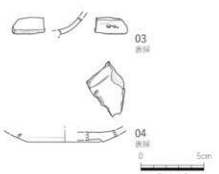



図3-11　猿ヶ滝城跡 郭３採集遺物実測図

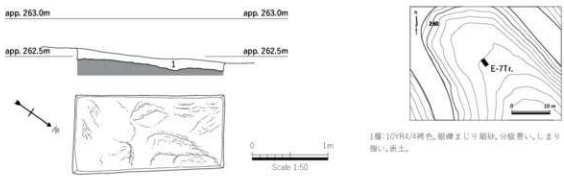



図3-12　猿ヶ滝城跡 E-7トレンチ平面図・断面図

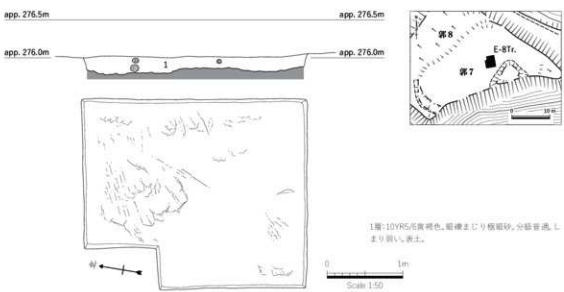



図3-13　猿ヶ滝城跡 E-8トレンチ平面図・断面図

ている。この攪乱の中から備前焼の小型壷１点が出土している。遺構の検出はなかった。

**E-6 トレンチ出土遺物（図 3-10）**　攪乱中で出土した 02 は備前焼の徳利形の壷で、最大径が胴部中位よりやや下にあり、頸部にかけてゆるやかにすぼまる器形である。肩部に「×」「｜」の窯印が刻まれている。乗岡編年の中世 6b 期にあたる。

**郭３採集遺物（図 3-11）**　郭３では、輸入陶磁器２点を採集した。03 は景徳鎮窯青花の皿で、胴部がゆるやかに立ち上がる器形となる。外面の高台直上には２条の界線が引かれ、また、唐草文の一部と思われる文様が描かれる。見込みにも界線が２条描かれる。小野正敏氏による分類（小野分類）〔小野 1982〕の染付皿 $B_1$ 群に相当するとみられ、16 世紀前半のものと思われる。04 は漳州窯系青花の皿で、底部外面を円形に削り込んだ畳付底となっている。内外面とも釉に貫入が入り、見込みには文字文とみられる文様がはいる。時期は 16 世紀半ばと考えられる。

**E-7 トレンチ（図 3-12）**　郭の可能性が疑われた、郭群 B の北側にある緩斜面上に設定し、遺構や遺物の有無を確認した。

覆土は表土のみであり、褐色砂質土である。地山は地肌が大きく荒れており、地表面と同様に北側へ緩やかに傾斜している。遺構は確認できな

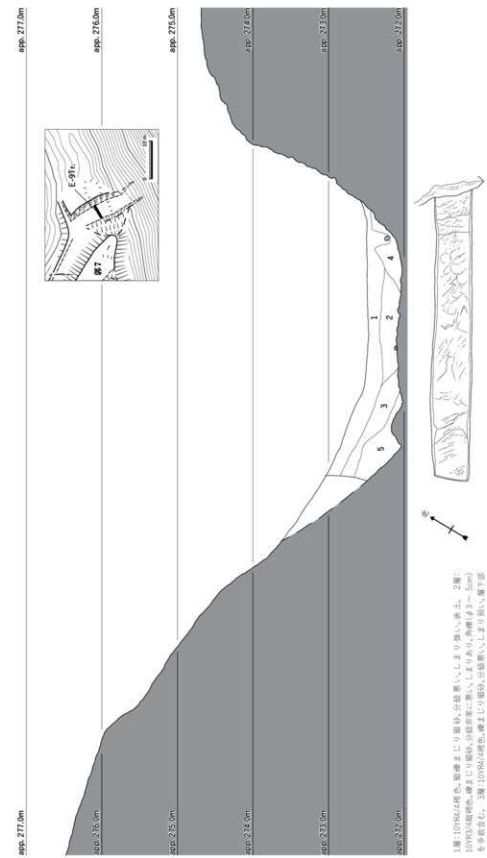
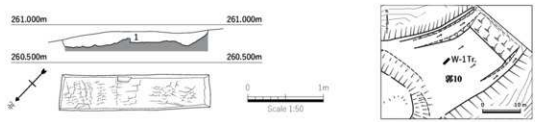
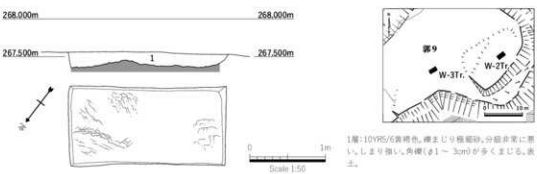



図3-14　猿ヶ滝城跡 E-9トレンチ平面図・断面図



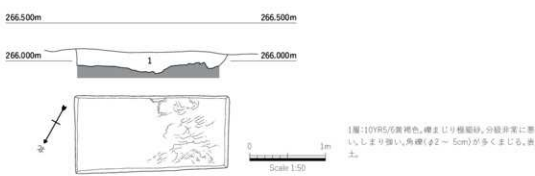

1層：10YR5/6黄褐色。礫まじり細砂。分級非常に悪い。角礫(φ3cm程度)が多くまじる。表土。

図3-15　猿ヶ滝城跡 W-1トレンチ平面図・断面図



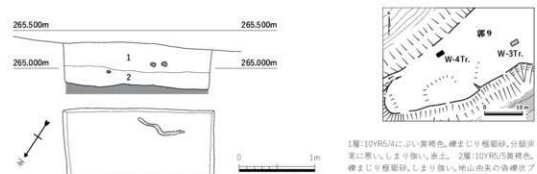

1層：10YR5/6黄褐色。礫まじり極細砂。分級非常に悪い。しまり強い。角礫(φ1～ 3cm)が多くまじる。表土。

図3-16　猿ヶ滝城跡 W-2トレンチ平面図・断面図




1層：10YR5/6黄褐色。礫まじり極細砂。分級非常に悪い。しまり強い。角礫(φ2～ 5cm)が多くまじる。表土。

図3-17　猿ヶ滝城跡 W-3トレンチ平面図・断面図




1層：10YR5/4にぶい黄褐色。礫まじり極細砂。分級非常に悪い。しまり強い。表土。 2層：10YR5/5黄褐色。礫まじり極細砂。しまり強い。地山由来の角礫状ブロック(φ2～ 5cm)を多く含む。

図3-18　猿ヶ滝城跡 W-4トレンチ平面図・断面図

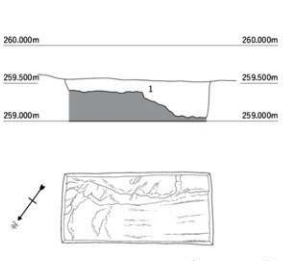



図3-19　猿ヶ滝城跡 W-5トレンチ平面図・断面図

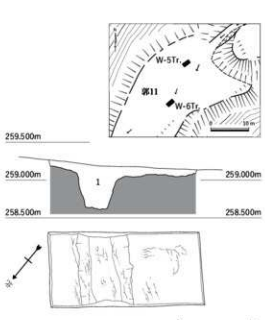



図3-20　猿ヶ滝城跡 W-6トレンチ平面図・断面図

図3-21　猿ヶ滝城跡 W-6トレンチ出土遺物実測図

図3-22　猿ヶ滝城跡 郭11採集遺物実測図

かった。

出土遺物はなかったが、トレンチの周辺で近世以降と思われる瓦片を採集することができた。ただし、小片であったため図化にはいたっていない。

**E-8 トレンチ（図 3-13）**　郭群Ｂの郭７に設定し、遺構の有無を確認した。

覆土は表土のみで、表土は黄褐色砂質土である。表面は腐植土が覆う。地山は地肌が荒れている部分もある。柱穴などの検出を期待したが、遺構は確認できなかった。

出土遺物はなかった。

**E-9（堀切）トレンチ（図 3-14）**　郭群Ｂの北にある堀切に設定し、堀底の状態を確認した。

地表面から堀底までの埋積厚は約 40 ～ 50cm である。堀底は平坦で箱堀になり、幅は約 2.7m、堀底から西側（郭７側）の高さ約４m、東側（尾根側）の高さ約２m である。堀底に硬化面などはなかった。堆積層のうち、５，３層は郭７側から供給された崩落土で、いずれの層も下方に向かうほど砂粒が粗くなり、含まれる礫の量が増加している。４層は、尾根側から供給された崩落土である。２層は斜堆積した５，３層と４層との間に堆積した崩落土である。この層も、５，３層ほど明確ではないが、下方に向かうほど砂粒は粗くなる。表土も崩落土である。

出土遺物はなく、飛礫と思われるような礫も発見できなかった。

**W-1 トレンチ（図 3-15）**　郭群Ｃの郭 10 中央部に設定し、遺構や遺物の発見を試みた。

覆土は表土のみであり、表土は黄褐色砂質土で

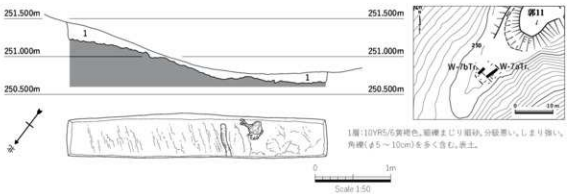



図3-23　猿ヶ滝城跡 W-7aトレンチ平面図・断面図

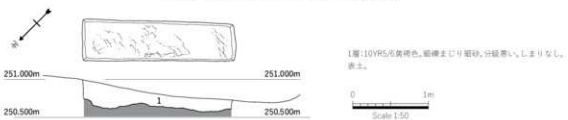



図3-24　猿ヶ滝城跡 W-7bトレンチ平面図・断面図

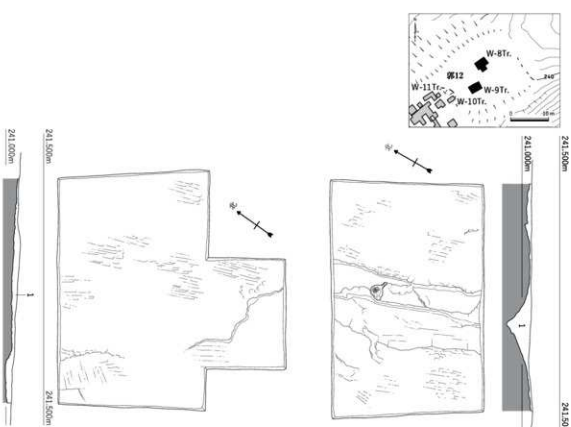



図3-25　猿ヶ滝城跡 W-8トレンチ平面図・断面図

図3-26　猿ヶ滝城跡 W-9トレンチ平面図・断面図

ある。地山は地肌が大きく荒れている。遺構の検出はなかった。

出土遺物はなかった。

**W-2 トレンチ（図 3-16）**　郭 9 の東部、郭 9 では最も高い地点に設定し、遺構や遺物の発見を試みた。

覆土は表土のみであり、表土は黄褐色砂質土である。地山は地肌が大きく荒れている。遺構の検出はなかった。

出土遺物はなかった。

**W-3 トレンチ（図 3-17）**　郭 9 の中央部に設定し、遺構や遺物の発見を試みた。

覆土は表土のみであり、表土は黄褐色砂質土で、直径 2 ～ 5 cm の地山砕屑物が多くまじる。地山はトレンチの西半で地肌が大きく荒れている。遺構の検出はなかった。

出土遺物はなかった。

**W-4 トレンチ（図 3-18）**　郭 9 の西部に設定し、遺構や遺物の発見を試みた。

W-1 ～ 3 トレンチと異なり、地表面から地山まで約 50cm あり、堆積厚が深い。表土はにぶい黄褐色砂質土、2 層は黄褐色砂質土である。2 層には直径 2 ～ 5 cm の地山砕屑物が多くまじり、分級は非常に悪い。近接する藤棚の影響で、フジの樹根が無数にのびている。遺構の検出はなかった。

出土遺物はなかった。

**W-5 トレンチ（図 3-19）**　郭 11 に設け、遺構の検出を目指した。

地山を約 20cm 掘削した時点で、郭の長軸方向にのびる溝状の平面プランを検出した。しかし、溝埋土が表土とほぼ同じであること、溝の底部で幅 10cm 弱の細い溝が数条平行にのびていたことから、バックホウによる掘削痕と判断した。公園整備時のものと考えられる。

出土遺物はなかった。

**W-6 トレンチ（図 3-20）**　W-5 トレンチの約 10m 南側に設定し、あらためて遺構の有無を確認した。

ここでは、郭の短軸方向にのびる幅約 50cm の溝状平面プランを検出した。しかし、やはり溝埋土が表土とほぼ同じであること、底部が W-5 トレンチで検出したバックホウ掘削痕とほぼ同じ幅であることから、この溝もバックホウによる掘削痕と判断した。郭 11 は、広い範囲で重機による掘削の影響が及んでいることが明らかになった。

**W-6 トレンチ出土遺物（図 3-21）**　1 層で 05 が出土した。05 は景徳鎮窯青花の碗底部であり、高台は畳付に近い部分を欠くが、高さは低いものとみられる。底部はわずかに内湾し、ゆるやかに胴部へと続く。見込みには玉取獅子が描かれ、目跡が残る。小野分類染付碗 C・D 群に相当するとみられ、16 世紀前半のものと思われる。

**郭 11 採集遺物（図 3-22）**　W- 5、6 トレンチを設けた郭 11 で、06 を発見した。06 は景徳鎮窯青花の皿である。低く細い高台は削り出しによる。畳付の釉は削り取られている。底部は平らで見込みには玉取獅子が描かれている。小野分類染付皿 $B_1$ 群に相当し、16 世紀前半のものと思われる。

**W-7a,b トレンチ（図 3-23,24）**　郭 11 切岸の直下に設けた。現状で堀切と判断しかねる開削が残る部分にあたり、堀切の存否について確認するために調査をおこなった。

掘削したところ、W-7a トレンチでは地表面から地山までの堆積厚は約 10cm で、浅いところでは 5 cm にも満たなかった。W-7b トレンチでも約 20cm とあまりにも浅く、また、堀切を意図した明確な加工の痕跡も確認することはできなかった。

明確な堀切は存在しなかったが、郭群 D から郭群 C に向けて移動する際は、この幅約 2m の狭い尾根をつたって約 4.4m の切岸を登らねばならず、この切岸のみでも遮断線として機能したと思われる。

なお、出土遺物はなかった。

**W-8 トレンチ（図 3-25）**　郭 12 の上段部に設定し、遺構の検出を目指した。後に報告するが、西郭 12 は上下段ともに遺物が多数採集できており、遺構などの検出が期待されていた地点である。掘削したが、覆土はトレンチ全体で表土のみの単

層であり、堆積厚は約10cmにも満たない。地山の地肌は荒れており、遺構などは検出できなかった。トレンチ南側で小さな段が生じているが、これは樹根の影響によるものと思われる。

出土遺物はなかった。

**W-9トレンチ（図3-26）**　郭12のW-8トレンチで遺構の存在を確認できなかったため、W-8トレンチの南側約5mの地点にあらためてトレンチを設け、遺構検出を目指した。

表土は黄褐色砂質土で、地山までの覆土は単一であり、W-8トレンチと同一である。トレンチ中央で幅約80cmの溝状の平面プランを検出した。断面は開いた「V」字状になり、検出面から底までは約30cmになる。当初は何らかの遺構と考えたが、埋積土が表土とほぼ同一であり、後世の改変が耕作に伴うものと思われる。

遺物は出土しなかった。

**W-10トレンチ（図3-27）**　郭12の上段から下段にかけての斜面に設定し、旧地形（地山）の状態の確認と、遺物の検出を試みた。

表土は明黄褐色砂質土で、地山までの覆土はこの表土のみである。地山の地肌は荒れている。郭上段から斜面の中央部にかけては堆積厚も薄く、厚さは5cmにも満たない。下段側の堆積厚も約20cm程度で、上段が大きく削れた様子はみられなかった。

出土遺物はなかった。

**W-11トレンチ（図3-28,29）**　郭12の下段に設定した。調査開始後の踏査で遺物を多く表面採集できたことから、遺構や遺存状態の良好な遺物の発見を期待した。なお、柱穴の検出に伴い、植栽されたクヌギを縫うようにトレンチを拡張したため、かなり歪な平面形となっている。

曲輪の中央部は、覆土が1層のみであり、堆積厚もおおむね10cm未満となっている。状況から、地山面は全体的に削平を受けているとみられる。

地山面では計18基の柱穴を検出した。いずれも柱痕は確認できなかった。地山面は削平を受けているとみられ、地山面からの深さで単純に比較できないが、多くの柱穴は標高239.0m前後まで掘り込まれ、ある程度の規格性を伴っていることがわかる。一方、SP02やSP09のように、掘り込みが浅いものもある。埋土に特徴は少なく、炭化物粒などの混入も認められない。SP05では青花が出土している。SP03-04-05-06-08-09など、柱穴列を数条確認できたが、掘立柱建物などに復元できるようなプランにはならず、残念ながら性格は不明である。

郭12の縁辺部では、地山が緩やかに傾斜し、とくに先端部分（郭南西側）は4～2層が堆積する。いずれも地山砕屑物の角礫を多く含んでいる。SP11の残存状況から、縁辺部は柱穴が機能を終えたあとに崩落もしくは削平されたとみられ、この4～2層はその後の盛土とみられる。

なお、後述のように郭12の下にある郭13では鉄滓が採集されており、鉄製品生産に伴う鍛冶炉や被熱痕の存在も念頭に調査を進めた。鍛造剥片など微細遺物にも留意したが、鉄製品生産の痕跡は確認できなかった。

**W-11トレンチ出土遺物（図3-30）**　1層で07

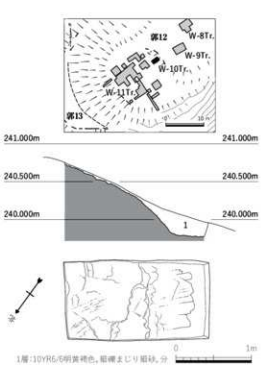



図3-27　猿ヶ滝城跡W-10トレンチ平面図・断面図

1層：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、φ3～5cmの角礫が主にも、2-1層：10YR5/8(明褐色、粘着粒子により組織、分級悪普通に悪いしまり強いしまり強いよう5～10cmの角礫が混入にも、2-2層：10YR5/6(明褐色、粘着粒子により組織、分級悪普通に悪いしまり強いしまり強いよう5～10cmの角礫が混入にも、3層：10YR5/6(明褐色、粘着粒子により組織、分級悪普通に悪いしまり強いしまり強いよう5～10cmの角礫が混入にも。

SP01：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまりなし、SP02：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまりあり、SP03：10YR5/4(にぶい黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまりなし、SP04：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまりなし、SP05：10YR5/6(にぶい黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまりなし、SP06：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまりなし、SP07：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまりなし、SP08：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまりなし、SP09：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまりなし、SP10：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまりなし、SP11：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまりなし、SP12：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまりなし、SP13：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまりなし、SP14：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまりなし、SP15：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまりなし、SP16：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP17：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP18：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP19：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP20：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP21：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP22：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP23：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP24：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP25：10YR5/6(にぶい黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP26：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP27：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP28：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP29：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP30：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP31：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP32：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP33：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP34：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP35：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP36：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP37：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP38：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP39：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP40：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP41：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP42：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP43：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP44：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP45：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP46：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP47：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP48：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP49：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP50：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP51：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP52：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP53：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP54：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP55：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP56：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP57：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP58：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP59：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP60：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP61：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP62：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP63：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP64：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP65：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP66：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP67：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP68：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP69：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP70：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP71：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP72：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP73：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP74：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP75：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP76：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP77：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP78：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP79：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP80：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP81：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP82：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP83：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP84：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP85：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP86：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP87：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP88：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP89：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP90：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP91：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP92：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP93：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP94：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP95：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP96：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP97：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP98：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP99：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP100：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP101：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP102：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP103：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP104：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP105：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP106：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP107：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP108：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP109：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP110：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP111：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP112：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP113：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP114：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP115：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP116：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP117：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP118：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP119：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP120：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP121：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP122：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP123：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP124：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP125：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP126：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP127：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP128：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP129：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP130：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP131：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP132：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP133：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP134：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP135：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP136：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP137：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP138：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP139：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP140：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP141：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP142：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP143：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP144：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP145：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP146：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP147：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP148：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP149：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP150：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP151：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP152：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP153：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP154：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP155：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP156：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP157：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP158：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP159：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP160：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP161：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP162：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP163：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP164：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP165：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP166：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP167：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP168：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP169：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP170：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP171：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP172：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP173：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP174：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP175：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP176：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP177：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP178：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP179：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP180：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP181：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP182：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP183：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP184：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP185：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP186：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP187：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP188：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP189：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP190：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP191：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP192：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP193：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP194：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP195：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP196：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP197：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP198：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP199：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP200：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP201：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP202：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP203：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP204：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP205：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP206：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP207：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP208：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP209：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP210：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP211：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP212：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP213：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP214：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP215：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP216：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP217：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP218：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP219：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP220：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP221：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP222：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP223：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP224：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP225：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP226：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP227：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP228：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP229：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP230：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP231：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP232：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP233：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP234：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP235：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP236：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP237：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP238：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP239：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP240：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP241：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP242：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP243：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP244：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP245：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP246：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP247：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP248：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP249：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP250：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP251：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP252：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP253：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP254：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP255：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP256：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP257：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP258：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP259：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP260：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP261：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP262：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP263：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP264：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP265：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP266：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP267：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP268：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP269：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP270：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP271：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP272：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP273：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP274：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP275：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP276：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP277：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP278：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP279：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP280：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP281：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP282：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP283：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP284：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP285：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP286：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP287：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP288：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP289：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP290：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP291：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP292：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP293：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP294：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP295：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP296：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP297：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP298：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP299：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP300：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP301：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP302：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP303：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP304：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP305：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP306：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP307：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP308：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP309：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP310：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP311：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP312：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP313：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP314：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP315：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP316：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP317：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP318：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP319：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP320：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP321：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP322：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP323：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP324：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP325：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP326：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP327：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP328：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP329：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP330：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP331：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP332：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP333：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP334：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP335：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP336：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP337：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP338：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP339：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP340：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP341：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP342：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP343：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP344：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP345：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP346：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP347：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP348：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP349：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP350：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP351：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP352：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP353：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP354：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP355：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP356：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP357：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP358：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP359：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP360：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP361：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP362：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP363：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP364：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP365：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP366：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP367：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP368：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP369：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP370：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP371：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP372：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP373：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP374：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP375：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP376：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP377：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP378：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP379：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP380：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP381：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP382：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP383：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP384：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP385：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP386：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP387：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP388：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP389：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP390：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP391：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP392：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP393：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP394：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いしまり弱い、SP395：10YR5/6(黄褐色、粘着粒子により組織、分級悪いし

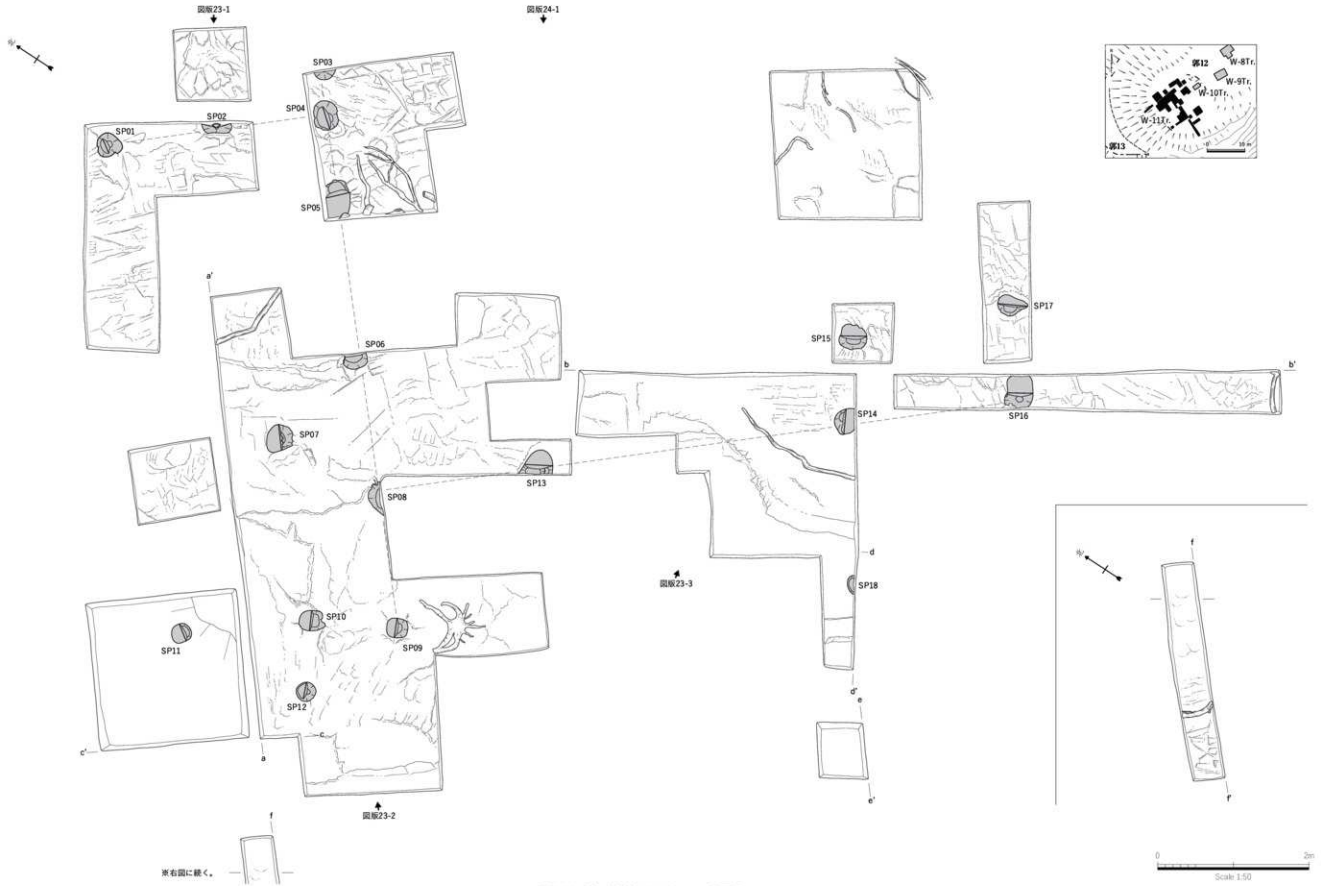



図3-29　猿ヶ滝城跡 W-11トレンチ平面図

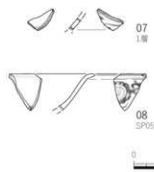



図3-30　猿ヶ滝城跡 W-11トレンチ出土遺物実測図

が出土している。細片ではあるが小型の青花皿で、景徳鎮窯のものとみられる。外面に唐草文と思われる文様が描かれ、内面にも文様が描かれている。16世紀前半のものとみられる。

SP05埋土上部では08が出土している。景徳鎮窯青花皿で、口縁部が外反する器形である。外面に牡丹唐草文とみられる文様が描かれ、口縁には界線が1条めぐる。口唇には褐色の釉がかかる。小野分類皿$B_1$群に位置付けられ、16世紀前半のものと思われる。

**郭12，13採集遺物（図3-31,32,33）** W-7a.

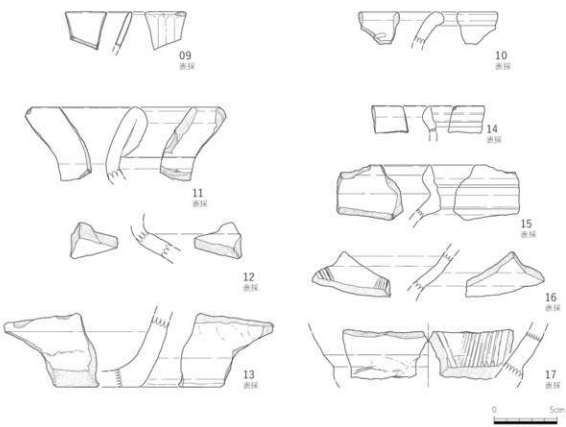



図3-31　猿ヶ滝城跡 郭12,13採集遺物（1）

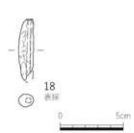



図3-32　猿ヶ滝城跡 郭12,13採集遺物（2）

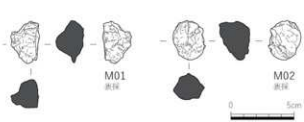



図3-33　猿ヶ滝城跡 郭12,13採集遺物（3）

7b，8，9，10，11トレンチを設けた郭12、その下にある郭13では、多くの遺物を表面採集した。ここでは9点を図化し、報告する。

09は龍泉窯青磁の碗である。胴部が直線的に開く器形になると思われ、外面には細蓮弁文が施される。瀬戸哲也氏による分類のVI類古相に相当するとみられ〔瀬戸2015〕、15世紀末～16世紀初頭のものとみられる。

10～17は備前焼である。10は壺の口縁で、頸部が外傾し、口縁は小さく玉縁になる。小片のため判然としないが、乗岡編年の中世5～6期にあたる。

11～13は甕である。11は大甕の口縁で、頸部は短く外傾しており、口縁は縦に長い玉縁になる。乗岡編年の中世5期にあたる。12は肩部片である。13は底部片で、底部から胴部に向けて直線的に立ち上がる器形と思われる。焼成不良とみられ、軟質である。

14～17は擂鉢である。14は口縁帯の断面がやや内湾するもので、外面に浅い凹線が3条以上めぐる。口唇はつまみ上げられている。乗岡編年の中世6期にあたる。15は肌理(きめ)の細かい田土(でんど)を

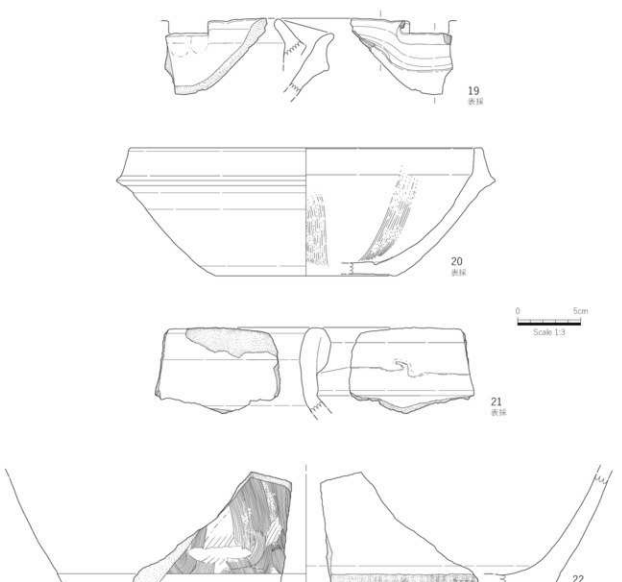



図3-34　猿ヶ滝城跡 過去採集遺物(1)

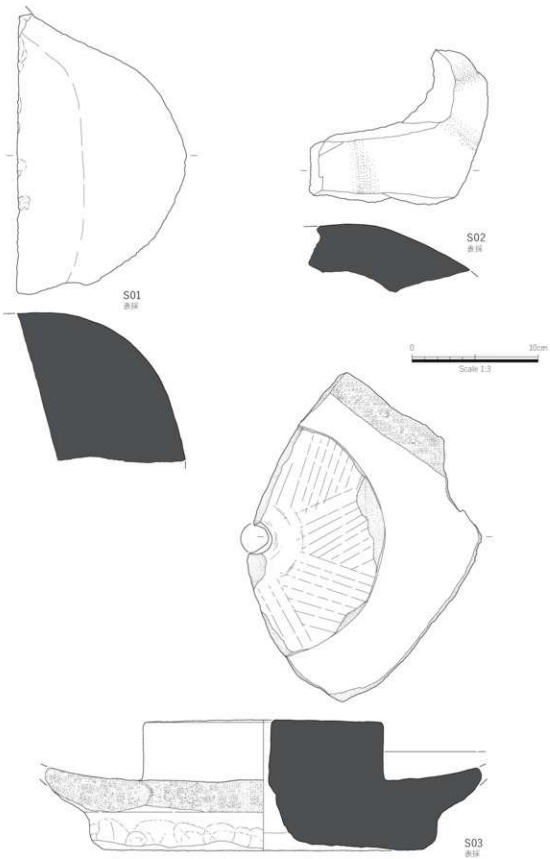



図3-35　猿ヶ滝城跡 過去採集遺物（２）

胎土とする。口縁帯断面はやや内傾し、外面に浅い凹線が3条めぐる。口唇はつまみ上げられる。乗岡編年の中世6期にあたる。16は胴部で、胎土は15と同じく田土である。内面には光沢がある。スリメは中心から放射状にのびるとみられ、やや摩耗している。胎土などから乗岡編年の中世6期にあたるとみられる。17は底部で、内面のスリメは放射状にのびており、摩耗している。焼成は不良である。

18は土錘で、中位がやや膨らむ管状になり、円形の穿孔がある。表面には焼成破裂痕とみられる浅いくぼみが多数残る。先端部を一部欠くが、重量は5.0gを測る。

M01，M02は鉄滓である。いずれも郭13で発見した。M01はごくわずかに着磁性があり、片面は細かな発泡痕跡がみられる。M02は全体的に発泡痕跡がみられ、着磁性はない。一部分で赤銅色の光沢がみられる。

（4）過去の採集遺物の整理（図3-34,35,36）

今回の調査以前に、城跡では遺物が断続的に採集されてきた。いずれも正確な採集地点は不明だが、ここでは特徴的な遺物について図化し、報告する。

19，20は備前焼の擂鉢である。19は口縁帯が内傾する器形で、口縁帯に凹線は入らない。20の胴部はやや内湾ぎみになり、口縁帯は直立を指向する。スリメは6条1単位で中心からおおむね放射状にのびており、摩耗が進んでいる。乗岡編年の中世5b～6期にあたるとみられる。

21，22は備前焼の大甕である。いずれも郭3～5付近で採集されたとみられる。21は頸部が直立し、口縁は断面がやや縦長の玉縁になる。口縁帯はやや波打っている。乗岡編年の中世5期にあたる。22は底部片で、やや内湾ぎみに立ち上がる器形になる。外面はハケメ調整が施されており、先に目の粗いは工具で調整され、その後に目の細かい工具で調整される。

S01，S02は砥石とみられる。いずれも粗粒の砂岩で、大きさから置砥と考えられる。S03は茶臼の下臼である。粗粒の砂岩製で、石材は肉眼観察でS02に近い。臼面は使用され摩耗しているが、ふくみは2mmを測り、目は8～9条で1単位となって、6分画になると思われる。受皿の下はハツリによる整形痕が残るものの、全体にミガキがかけられ丁寧なつくりとなっている。今回報告した石製品はいずれも砂岩だが、砂岩は城の周辺で採取が可能である。

図3-36　猿ヶ滝城跡 過去採集遺物（3）

M03は銅印である。両端に印面があり、一方は円形、もう一方は隅丸方形になっている。隅丸方形側には篆書体で「請取」と彫られている。近世以降のものと思われる。平成4（1992）年4月に採集され、当時の記録によれば郭1で発見されたとみられる。

（5）試掘調査の成果

郭群A，Bで9箇所、郭群C，Dで12箇所を試掘した。全体的に現代の公園整備や耕作などの影響を受けていたものの、郭1（E-2トレンチ）では井楼と思われる建物跡を検出し、郭12（W-11トレンチ）では建物としては明確な復元ができなかったものの、柱穴18基を検出した。このうち1基からは青花（08）が出土しており、16世紀前半の時期を与えることができた。

採集品が多くを占めるものの、多様な遺物も発見することができた。輸入陶磁器には青磁、青花があり、青磁は龍泉窯（09）、青花は景徳鎮窯（03,05～08）、漳州窯（04）、のものを見出せた。景

徳鎮窯については16世紀前半ごろの年代が与えられる。また、備前焼の擂鉢（14～17）や壺（02）も16世紀前半から半ばに比定されるため、城の盛期は16世紀前半を中心とする時期と想定できる。『宇和舊記』などの近世地誌によれば、天正8（1580）年ごろに落城したことが伝えられているが、考古資料から城の存続期間について検討ができるようになってきたことは、大きな成果を得たといえる。

また、鉄滓（M01，02）や砥石（S01，02）が採集されていることから、城内で鉄製品が生産されていたことも明らかになった。鉄滓は城の先端部（郭13）で発見されており、郭12（W-11トレンチ）で検出した柱穴群は、こうした鉄製品の生産に伴っていた可能性もある。ただし、後世の削平などによる影響も大きく、鍛冶炉や被熱痕などは発見することができなかった。

一方、多様な遺物を発見しながらも、土師質土器を1点も確認できなかった点は特筆すべきであり、城の性格を考察するうえで重要である。

（藏本）

## 表3-01　猿ヶ滝城跡 土器・陶磁器・土製品一覧表

| 番号 | 出土位置 | | | 遺物内容 | | | 寸法 | | | 色調 | 特徴 | 挿図番号 | 図版番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 郭 | トレンチ | 層位遺構 | 種別 | 器種 | 部位 | 器高(mm) | 口径(mm) | 底径(mm) | | | | |
| 01 | 郭3 | — | 表採 | 備前焼 | 甕 | 口縁部 | 64 | — | — | 5YR3/4暗赤褐 | 玉縁状の口縁。焼成は堅緻で器表面に光沢あり。 | 3-05 | 25-1 |
| 02 | 郭11 | E-6 | 攪乱 | 備前焼 | 壺 | 胴部 | 78 | — | — | 胎土:5Y5/1灰 | 徳利形。胴部最大径102mm。肩部に「×」「｜」のカマ印あり。 | 3-10 | 25-2 |
| 03 | 郭11 | — | 表採 | 青花 | 皿 | 胴部 | 13 | — | — | 胎土:2.5Y8/3灰黄 | 景徳鎮窯。外面には唐草文の一部と思われる文様。界線２条。見込みに界線２条。 | 3-11 | 25-3 |
| 04 | 郭12 | — | 表採 | 青花 | 皿 | 底部 | 19 | — | (53) | 胎土:10YR8/3浅黄橙 | 漳州窯。碁笥底。見込みに文字文か。 | 3-11 | 25-3 |
| 05 | 郭12 | W-6 | 1層 | 青花 | 碗 | 底部 | 11 | — | (48) | 胎土:10YR8/3浅黄橙 | 景徳鎮窯。見込みに玉取獅子か。目跡が残る。 | 3-21 | 25-4 |
| 06 | 郭12,13 | — | 表採 | 青花 | 皿 | 底部 | 9 | — | (66) | 胎土:7.5YR8/1灰白 | 景徳鎮窯。見込みに玉取獅子。高台は削り出し。 | 3-22 | 25-5 |
| 07 | 郭12,13 | W-11 | 1層 | 青花 | 皿 | 胴部 | 16 | — | — | 胎土:2.5Y8/2灰白 | 景徳鎮窯。外面に唐草文か。 | 3-30 | 25-6 |
| 08 | 郭12,13 | W-11 | SP5埋土 | 青花 | 皿 | 口縁部 | 29 | — | — | 胎土:2.5Y8/3淡黄 | 景徳鎮窯。外面に牡丹唐草文。口縁に界線１条。内面の口縁に界線１条。 | 3-30 | 25-6 |
| 09 | 郭12,13 | — | 表採 | 青磁 | 碗 | 口縁部 | 30 | — | — | 胎土:2.5Y8/2灰白 | 龍泉窯。外面に細蓮弁文。 | 3-31 | 25-7 |
| 10 | 郭12,13 | — | 表採 | 備前焼 | 壺 | 口縁部 | 25 | — | — | 10YR5/1褐灰 | 玉縁状の口縁。 | 3-31 | 25-7 |
| 11 | 郭12,13 | — | 表採 | 備前焼 | 甕 | 口縁部 | 58 | — | — | 外:5YR4/3にぶい赤褐<br>内:5YR5/3にぶい赤褐 | 細長い玉縁状の口縁。 | 3-31 | 26-1 |
| 12 | 郭12,13 | — | 表採 | 備前焼 | 甕 | 肩部 | 28 | — | — | 外:10YR4/1褐灰<br>内:5YR4/2灰褐 | 肩部に稜線が走る。 | 3-31 | 26-1 |
| 13 | 郭12,13 | — | 表採 | 備前焼 | 甕 | 底部 | 57 | — | — | 外:10YR5/1褐灰<br>内:10YR6/4にぶい黄橙 | 焼成があまく、軟質。 | 3-31 | 26-1 |
| 14 | 郭12,13 | — | 表採 | 備前焼 | 擂鉢 | 口縁部 | 22 | — | — | 2.5YR4/1黄灰 | 口縁帯に浅い凹線３条。 | 3-31 | 26-1 |
| 15 | 郭12,13 | — | 表採 | 備前焼 | 擂鉢 | 口縁部 | 43 | — | — | 外:5Y5/1灰<br>内:7.5YR4/2灰褐 | 胎土は田土。口縁帯に浅い凹線３条。 | 3-31 | 26-1 |
| 16 | 郭12,13 | — | 表採 | 備前焼 | 擂鉢 | 胴部 | 35 | — | — | 外:2.5Y5/1黄灰<br>内:5YR5/2灰褐 | 胎土は田土。スリメは１単位４条。 | 3-31 | 26-1 |
| 17 | 郭12,13 | — | 表採 | 備前焼 | 擂鉢 | 底部 | 39 | — | — | 5YR6/4にぶい橙 | 焼成不良品。スリメは１単位９条。 | 3-31 | 26-1 |
| 18 | 郭12,13 | — | 表採 | — | 土錘 | — | 49 | — | — | 5YR5/1褐灰 | 最大径12mm。孔径３mm。重量5.0g。外面に焼成破裂痕複数あり。焼成不良品。 | 3-32 | 26-2 |
| 19 | — | — | 表採 | 備前焼 | 擂鉢 | 口縁部 | 61 | — | — | 外:2.5YR5/4にぶい赤褐<br>内:5YR3/3暗赤褐 | 胎土は田土。1987.02.22採集。 | 3-34 | 26-4 |
| 30 | — | — | 表採 | 備前焼 | 擂鉢 | 口縁部～底部 | 101 | (300) | (144) | 外:10YR7/4にぶい黄橙<br>内:2.5Y7/2灰黄 | スリメは６条１単位。1997.01.14採集。 | 3-34 | 27-1 |
| 21 | 郭3～5 | — | 表採 | 備前焼 | 甕 | 口縁部 | 68 | — | — | 外:2.5YR4/3にぶい赤褐<br>内:2.5YR5/3にぶい赤褐 | 細長い玉縁状の口縁。2013.04.09採集。 | 3-34 | 27-1 |
| 22 | 郭3～5 | — | 表採 | 備前焼 | 甕 | 底部 | 93 | — | (388) | 外:2.5YR3/3暗赤褐<br>内:7.5YR5/2灰褐 | 2013.04.09採集。 | 3-34 | 27-1 |

※（　）内は推定値。

表3-02　猿ヶ滝城跡 石製品一覧表

| 番号 | 出土位置 郭 | トレンチ | 層位遺構 | 種別 | 石材 | 寸法(復元値) 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量 | 特徴 | 挿図番号 | 図版番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| S01 | — | — | 表採 | 砥石 | 砂岩 | 222 | 133 | 116 | 3.2kg | 砥粒は粗い。1面残。1997年採集。 | 3-35 | 27-3<br>27-4 |
| S02 | | — | 表採 | 砥石 | 砂岩 | 136 | 123 | 42 | 603g | 砥粒は粗い。2面残。 | 3-35 | 27-3 |
| S03 | 第3～5 | — | 表採 | 茶臼(下臼) | 砂岩 | — | 径(344) | 103 | 4.4kg | すり合わせ部径190mm、芯木孔径(24)mm、スリメは8～9条1単位、6分割か、受皿はミガキ、受皿以下はハツリによる整形痕あり。1997年採集。 | 3-35 | 28-1<br>28-2 |

※（　）内は推定値。

表3-03　猿ヶ滝城跡 金属製品・鉄関連遺物一覧表

| 番号 | 出土位置 郭 | トレンチ | 層位遺構 | 遺物内容 種別 | 器種 | 寸法(復元値) 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | 特徴 | 挿図番号 | 図版番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| M01 | 第12,13 | — | 表採 | 鉄滓 | — | 33 | 21 | 22 | 19.2 | ごくわずかに着磁性あり。発泡痕跡あり。 | 3-33 | 26-3 |
| M02 | 第12,13 | — | 表採 | 鉄滓 | — | 21 | 28 | 23 | 29.1 | 着磁性なし。全体に発泡痕跡あり。 | 3-33 | 26-3 |
| M03 | 第12,13 | — | 表採 | 青銅製品 | 刷印 | 35.5 | 17.1 | — | 31.4 | 方形部に篆書体で「諸取」。円形部の意匠は不明。1992.04.02採集。 | 3-36 | 27-2 |

※（　）内は推定値。

## ３．高尾城跡の調査成果

（１）城館の概要

高尾城は、肱川西岸の西予市野村町との市境、高尾山(三等三角点「高尾」、標高388.90m)に所在する城である。大洲市肱川町と西予市野村町との市境にあたる尾根筋の肱川に臨む東端部に所在するが、山容は尾根というよりほぼ独立丘陵に近く、直近の南東にある森集落からの比高は約130mある。また、既述の猿ヶ滝城の三角点「猿ヶ滝」は、三角点「高尾」の東南東1.47kmにあたる。

主郭は北北東と南東、南西に端部を持つ略三角形状の郭である。中心部の南北中心軸約42m、東西約48mの規模を有する。主郭には西側は高尾神社が祀られ石積によって羽子板状のひな壇が営まれている。郭の周囲には断片的に土塁がある。南の塁線にはわずかな土塁があり、0.3m程の高さしかない。東側は0.2mの土塁、北側では幅１m程度で高さ0.9mの土塁。

主郭の南側には腰郭状の細長い郭があり、幅は３m弱であるが、東端は竪堀状になっている。西側にも同様な腰郭があり、南の尾根続きからの進入路として開削されてはいるが、その北側では拡幅のための開削もなく、元々ある程度の腰郭状に帯郭が設けられていたと考えられる。

主郭の北には1.75m下に郭２がある。整地は不十分で、更に1.2mの段差があり、さらに中程でも1.0m程の段差がある。塁線には土留めの石積が各所で確認できるので、元々は石積が全周していた可能性が高い。北側の塁線際は幅1.2m程度、高さ0.3m程度の土塁が設けられている。また、主郭と郭２の周囲に竪堀が認められるが、具体的な戦術意図が考えられない配置である。

総体的に高尾城の縄張りを検討した場合、腰郭の築造や竪堀の使用などから在地勢力以外の関与を認めざるをえないが、軍事的緊張感を感じさせるものでもなく、また領主権力による統治下の合理的造営とも考えられないものであり、当地の複雑な軍事･政治状況を反映した遺構と考えられる。

（日和佐）

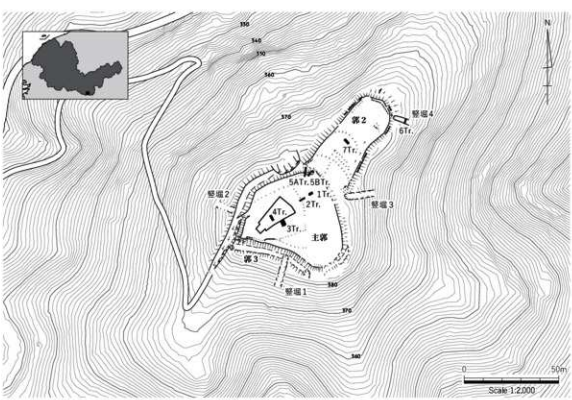



図3-37　高尾城跡 縄張図

（２）文献・伝承・その他特徴

高尾城跡では、完形の鉄製茶釜(図3-38)が発見されたと伝えられており、現在、大洲市埋蔵文化財センターに所蔵されている。蓋までほぼ完形で残されており、蓋を含めた全高は20.3cm、胴部最大径は26.9mを測る。左右の環付２つは竹の節の意匠が凝らされており、茶の湯の道具と考えられる。また、現在は所在不明となっているが、茶釜と同時に刀も発見されたと伝えられており、両者は何らかの理由で埋納されたと解釈されてきた。

『肱川町誌』や『大洲舊記』によれば、白石城と同様に、紀氏(北之川氏)の居城であった三滝城(西予市城川町窪野)の支城にあたるとされる。城主は紀親安の侍大将・兵頭藤左衛門であったと伝えられ、三滝城、白石城などの落城と同時に落城したと伝えられる。『大洲舊記』には、堀(溝)が掘られていることも記されている。なお、高尾城跡の南東麓には、落城時の死者を祀ったと伝えられる観音堂(廃寺となった盛正寺の後身)が建ち、この付近には墓石群や五輪塔などが林立する地点がある。ただし、いずれも江戸期のものであり、城との直接的な関係性は低いと思われる。

昭和49(1974)年３月16日、(旧)肱川町によって史跡に指定されている。　（藏本）

（３）試掘調査

**１トレンチ(図3-39)**　主郭に設定し、遺構および遺物の検出を目指した。１層は暗褐色砂質の表土で、上部は腐植土が覆う。２層は黄褐色砂質土だが、しまりは非常に強く、さらに直径10～20cmの角礫が無数に混入する。これら角礫は地山が由来であり、過去に盛土・整地された可能性を示す。ただし、いずれの層でも出土遺物はなく、行為の時期は不明である。

**２トレンチ(図3-40)**　主郭の傾斜変換部に設定し、段の構造および遺物の検出を目指した。表土の１層は褐色砂質土で、上部は腐植土が覆う。２層は明褐色砂質土だが、人力では容易に掘削できないほど、地山由来の角礫が混入している。この角礫の混入を除けば、主たる砕屑物の粒子は比較的揃っている。１トレンチ２層と同じく、改変

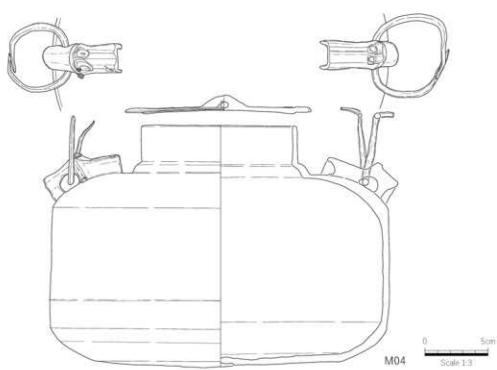



図3-38　伝・高尾城跡 採集茶釜実測図

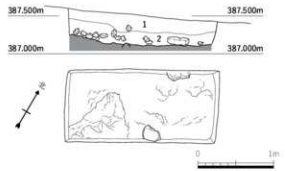



図3-39　高尾城跡 1トレンチ平面図・断面図

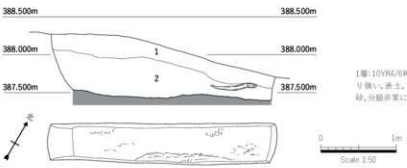



図3-40　高尾城跡 2トレンチ平面図・断面図

を受けたことを示すと思われるが、やはり出土遺物はなく、行為の時期は不明である。

**3トレンチ(図3-41)**　主郭の平坦部での遺構検出を狙い設定した。1層のみの堆積で、褐色砂質土の表土である。地山は岩盤質であり、平坦である。なお、神社跡を囲繞する石積みは地山直上から構築されており、検出した地山が当時の地表面であったことがわかる。

遺構、遺物の検出はなかった。

**4トレンチ(図3-42)**　神社跡中心部に設定し、神社創建に伴う土地改変もしくは遺構の検出を狙った。表土の1層は黄褐色砂質土である。2，3層は、明褐色砂質土で、土色や性質は地山とよく類似しており、地山砕屑物の堆積と思われる。いずれも強固なしまりがあり、地山から地表面までは神社のための盛土と考えられる。3トレンチの成果と併せて考えると、神社石積み内部は自然地形の削り出しではなく、盛土によって嵩上げされていることがわかる。

遺物の出土はなく、城館に伴う遺構の検出もなかった。

**5aトレンチ(図3-43)**　主郭北に残る土塁の構造を確認するために設定した。郭内側地表面から残存土塁頂部までの高さは、およそ0.6mである。まず、郭内側の地山上に角礫を多量に含む明褐色砂質土(8層)が盛られるが、これは郭の整地が目的とみられる。土塁はこの上に構築される。8層の上に盛られるのは、褐色土、暗褐色土、黒褐色土の暗色系盛土(7層)で、断面台形状をなす。いずれもしまりの弱い砂質土である。7層は4層に細分でき、堆積状況から7-④層は7-①～③層の崩落土と思われる。断面上で、7-④層と7-③層とに挟まれるように位置した巨礫を検出したが、これは土留めが目的とみられる。7-④層が崩落土であれば、この巨礫は本来、土塁郭外側表面に積まれていた可能性が高い。

7層を盛ったのち、郭内側を再び整地し(6層)、褐色土や明褐色土の明色系盛土(5層)が7層の上

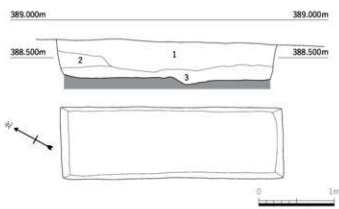



図3-41　高尾城跡 ３トレンチ平面図・断面図

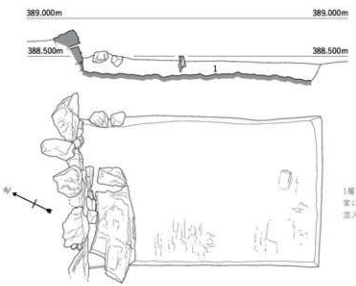



図3-42　高尾城跡 ４トレンチ平面図・断面図

に盛られる。この５層はつき固めたように強くしまる砂質土で、全体的に分級が良い。なお、土塁断面の郭内側寄りには、整地目的の８層から７層、５層にかけて直径10～40cmの角礫が縦に１列積まれている。これら角礫は、土塁構築の基礎として埋め殺されたものとみられる。各層が盛られた時期は判然としないが、各層共通して角礫の基礎が積まれていることから、それほどの時間差はないとみられる。

４～２層は、土塁の崩落土とみられる。

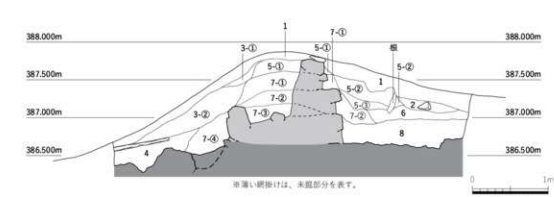
出土遺物はなかった。

**5bトレンチ(図3-44)**　5aトレンチで調査した土塁の北側の郭外側には、土留めを目的とした石積が残されており、その構造を探るために設定した。

整地層である６層のうえに、暗色系盛土(５層)と明色系盛土(４層)とが土塁として構築されており、基本的な構造は5aトレンチで確認したものと変わらない。ただし、5aトレンチで検出したような土塁中央部に埋め込んだ礫は、ここでは検出できなかった。

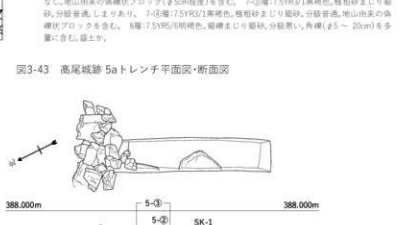
主郭側を一部掘削して土坑(SK)が設けられているが、出土遺物などはなく、時期や土坑の性格は不明である。

**６トレンチ(図3-45)**　郭２北西の急傾斜に残る竪堀４の構造を確認するために設定した。



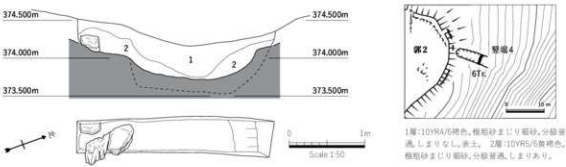
1層：10YR5/6黄褐色、極粗砂まじり細砂、分級普通、表土。　2層：10YR5/6明黄褐色、極粗砂まじり細砂、分級悪い、しまりあり、5層崩土か。　3-①層：10YR4/6褐色、極粗砂まじり細砂、分級良い、しまり強。【暗色系盛土】3-②層：10YR4/3暗褐色、細礫まじり細砂、分級普通、しまりなし。　4層：10YR3/4暗褐色、細礫まじり細砂、分級普通、しまりなし、角礫（φ5cm程度）を含む。
【明色系盛土】5-①層：10YR4/6褐色、極粗砂まじり細砂、分級良い、しまり強固。　5-②層：7.5YR5/8明褐色、極粗砂まじり細砂、分級普通、しまりあり、角礫（φ5 ～ 10cm）混入。　5-③層：7.5YR5/8明褐色、極粗砂まじり細砂、分級良い、しまり5-②層より強い、角礫（φ5 ～ 10cm）混入。　6層：7.5YR4/4褐色、極粗砂まじり細砂、分級普通、しまりあり、盛土か。　【暗色系盛土】7-①層：10YR3/4暗褐色、細礫まじり細砂、分級普通、しまりなし。　7-②層：7.5YR4/4褐色、細礫まじり細砂、分級悪い、しまりなし、地山由来の偽礫状ブロック（φ5cm程度）を含む。　7-③層：7.5YR3/1黒褐色、極粗砂まじり細砂、分級普通、しまりあり。　7-④層：7.5YR3/1黒褐色、極粗砂まじり細砂、分級普通、地山由来の偽礫状ブロックを含む。　8層：7.5YR5/6明褐色、細礫まじり細砂、分級悪い、角礫（φ5 ～ 20cm）を多量に含む、盛土か。

図3-43　高尾城跡 5aトレンチ平面図・断面図



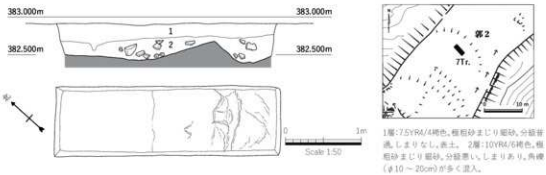

1層：10YR4/6褐色、極粗砂まじり細砂、分級普通、表土。　2層：10YR4/4褐色、極粗砂まじり細砂、分級普通、しまりあり。　3層：10YR4/6褐色、極粗砂まじり細砂、しまりあり、盛土か。　【明色系盛土】4層：10YR4/6褐色、極粗砂まじり細砂、分級良い、しまり強固。　【暗色系盛土】5-①層：10YR3/4暗褐色、細礫まじり細砂、分級普通、しまり強い。　5-②層：10YR4/6褐色、極粗砂まじり細砂、分級普通、しまり強い、暗色～黄褐色の偽礫状ブロックが少量まじる。　5-③層：7.5YR3/4褐色、極粗砂まじり細砂、分級普通、しまり強い、暗色～黄褐色の偽礫状ブロックがわずかにまじる。　5-④層：7.5YR4/4褐色、極粗砂まじり細砂、分級悪い、しまり強い。　5-⑤層：10YR3/4暗褐色、細礫まじり細砂、分級非常に悪い、しまりなし、角礫（φ5 ～ 10cm）が少量まじる。　6層：10YR5/6黄褐色、細礫まじり細砂、分級非常に悪い、角礫（φ5 ～ 10cm）が多量まじる。

図3-44　高尾城跡 5bトレンチ平面図・断面図




1層：10YR4/6褐色。極粗砂まじり細砂。分級普通。しまりなし。表土。　2層：10YR5/6黄褐色。極粗砂まじり細砂。分級普通。しまりあり。

図3-45　高尾城跡 6トレンチ平面図・断面図




1層：7.5YR4/4褐色。極粗砂まじり細砂。分級普通。しまりなし。表土。　2層：10YR4/6褐色。極粗砂まじり細砂。分級悪い。しまりあり。角礫（φ10～20cm）が多く混入。

図3-46　高尾城跡 7トレンチ平面図・断面図

堀底は平坦で、箱堀状となる。ただし、現状では地山面から堀底までは20～40cmほどの深さしかない。これは、竪堀の上半部が崩落してしまったためと思われる。

出土遺物はなかった。

**7トレンチ(図3-46)**　郭２中央付近に設定し、遺構の検出を目的とした。

表土は褐色砂質土、２層は地山由来の角礫が多量に混入する砂質土である。地山面は平滑だが起伏があるため、２層は整地のための可能性がある。

遺構は検出できず、出土遺物もなかった。(蔵本)

（４）試掘調査の成果

合計８箇所を掘削したが、出土遺物は得ることができず、築廃城などの時期については課題を残した。

また、掘立柱建物などの建物遺構についても検出は叶わなかったが、土塁の構造が判明したことは成果といえる。土塁は礫を埋め殺して基礎とし、２段階に盛土し、郭外側に土留めのための石積を施すというもので、今後は周辺地域で他の類例を調査する必要がある。類例の集積によって、地域性や各領主の特徴が表れてくることを期待したい。　(蔵本)

表3-04　伝・高尾城跡 金属製品遺物一覧表

| 番号 | 出土位置 | | | 遺物内容 | | 寸法 | | | | 特徴 | 持図番号 | 図版番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 郭 | トレンチ | 層位遺構 | 種別 | 器種 | 器高(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量 | | | |
| M04 | — | — | 表採 | 鉄製品 | 茶釜 | 191 | 径269 | — | 4.7kg | 完形品。蓋径146mm。蓋重量398g。湾付は半裁竹管の差跡。 | 3-38 | 29-1 |

## ４．白石城跡の調査成果

（１）城館の概要

白石城は、大洲市肱川町大谷、合併前の旧大洲市・旧肱川町・旧野村町（現西予市野村町）の旧３つの旧自治体境界付近にある御在所山（二等三角点「御在所」標高668.91ｍ）の北に位置する水が峠の東約300ｍの尾根に比定されている。愛媛県教育委員会による『愛媛県中世城館跡分布調査報告書』(1987)によれば、「白石氏の居城とされているが、縄張りは確定できず。」と報告されている。

縄張りは確定できずと報告されているように、現地を確認したところ、現在比定されている場所は尾根の稜線部分に一切防御ラインと想定される堀切や切岸が存在しない。したがって、現在の比定地に城館遺構は認められなかった。（日和佐）

（２）文献・伝承・その他特徴

御在所山の南側では、大洲市内としてはめずらしく石灰岩を産出する地点があり、地区名および城跡名の「白石」は、この石灰岩に由来するものと思われる。

『宇和舊記』などによれば、白石城は北之川氏（紀氏）の居城であった三滝城（西予市城川町窪野）の支城にあたるとされ、白石甲斐助（笹田甲斐助とも）、大塚源十郎が居城したとされる。白石甲斐助は、高尾城と掛持ちであったことも記されている。

昭和49(1974)年３月16日、（旧）肱川町によって史跡に指定されている。（藏本）

（３）試掘調査

**１トレンチ（図3-48）**　平坦部１の西側に設定し、遺構の検出を目指した。当初1.0×2.0ｍで設定したが、柱穴の検出に伴って随時拡張した。１層は褐色砂質の耕作土および表土である。２、３層も１層と同じく褐色砂質土だが、栽培されているイチョウの樹根が無数に混入する。２層は覆土

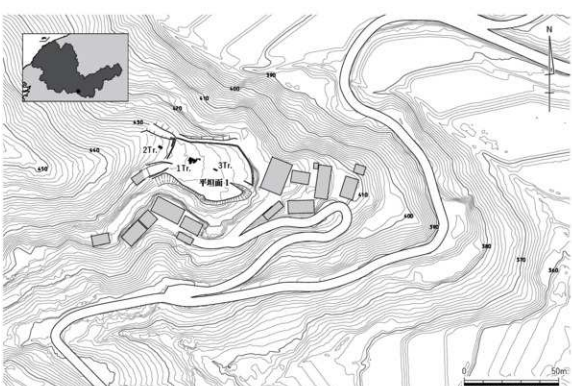



図3-47　白石城跡 概測平面図

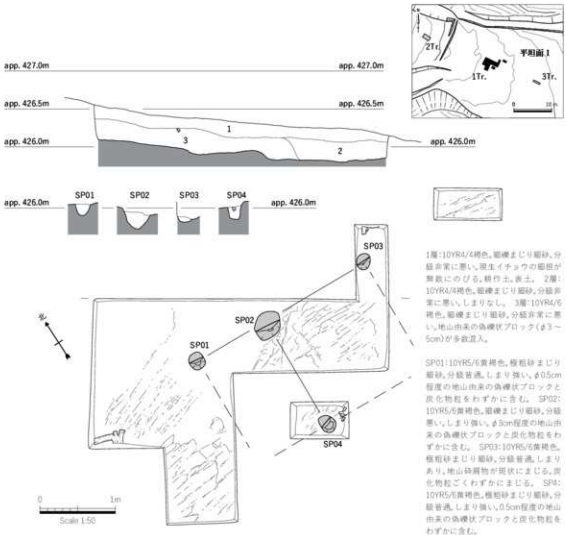



図3-48　白石城跡 １トレンチ平面図・断面図

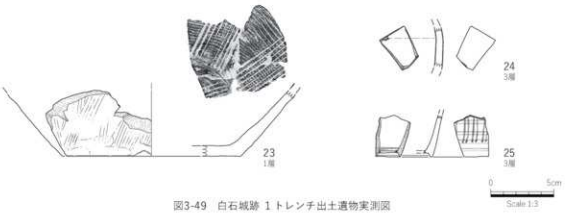



図3-49　白石城跡 １トレンチ出土遺物実測図

にしまりがなく、３層は直径３～５cmの地山由来の偽礫状ブロックを多数含む。遺物は、１層と３層とで検出した。

地山を掘り込んだ柱穴４基を検出した。SP01-02-03は、おおよそ西一東を軸として直線に並び、SP02-04はこれに直交する。SP02-03,04間の距離

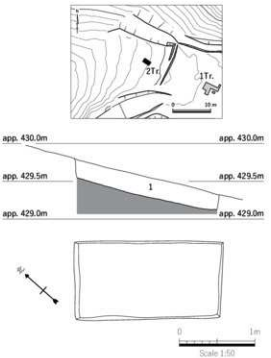



図3-50　白石城跡 ２トレンチ平面図・断面図

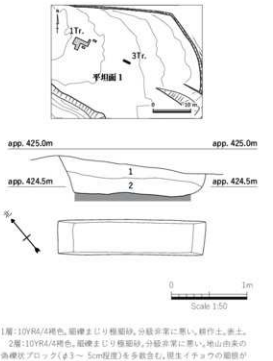



図3-51　白石城跡 ３トレンチ平面図・断面図

は約1.5mであるのに対し、SP02-01間の距離は約1.0mと短い。いずれの柱穴も遺物はなく、礎石のようなものも確認できなかった。調査期間の都合上、さらなる柱穴の確認は叶わなかったが、柱穴の配置からは、桁行もしくは梁行１間以上に復元できる掘立柱建物跡の可能性を示しておきたい。

**１トレンチ出土遺物(図3-49)**　１層で23が出土している。23は瓦質土器の擂鉢で、体部が直線的に広がる器形である。スリメは中心からおおむね放射状にのび、９条で１単位となっている。見込みにもスリメが施されている。外面、内面ともに、ハケメが強く残っている。中世後半以降のものとみられる。

３層では24，25が出土している。24は青磁の壷と思われる破片で、25は砥部焼とみられる蕎麦猪口の底部片である。いずれも近世以降のものである。

**２トレンチ(図3-50)**　平坦部１西側の斜面に設定した。覆土は褐色砂質土の１層のみで、耕作土である。地山は現地表面と同様の斜度で緩やかに東側へ傾斜する。遺構等は存在しなかった。

出土遺物はなかった。

**３トレンチ(図3-51)**　平坦部１の中央部に設定し、１トレンチに引き続き遺構の検出を目指した。１層は褐色砂質の耕作土である。２層は、１層と同じく褐色砂質土であるが、地山由来の偽礫状ブロック（直径３～５cm程度）が多数まじり、栽培されているイチョウの細根も無数にのびる。地山は肌荒れ状態がひどく、遺構等は存在しなかった。

１層から磁器細片が数点出土しているが、図化にはいたらなかった。いずれも近世のものとみられる。　（藏本）

（４）試掘調査の成果

３箇所を掘削し、平坦部１に設定した１トレンチで掘立柱建物跡に復元できる可能性のある柱穴４基を検出した。柱穴埋土に遺物は伴っておらず、また、直上の包含層（３層）で近世の磁器が複数出

土している状況であるため、城が機能していた当時の遺構かは、にわかには判断しかねる。一方、表土からではあるが、中世後期にさかのぼるとみられる瓦質土器擂鉢(23)が出土しており、年代を探る手掛かりになっている。

ただし、「城館跡」としての評価は難しい。大谷方面、蔵川方面、野村方面を結ぶ水が峠という交通の要衝に立地しながら、前項でも指摘のあるように尾根稜線に防御ラインがないため、城館と認定しにくい。高尾城と相互に視認できる地点にあることから、高尾城を補完する役割や、戦時の一時避難場などの可能性が考えられるものの、いずれも想定の域を脱するものではない。　（藏本）

表3-05　白石城跡 土器・陶磁器一覧表

| 番号 | 出土位置 | | | 遺物内容 | | | 寸法 | | | 胎土色調 | 特徴 | 挿図番号 | 図版番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 郭 | トレンチ | 層位遺構 | 種別 | 器種 | 部位 | 器高(mm) | 口径(mm) | 底径(mm) | | | | |
| 23 | 平坦面１ | 1 | 1層 | 瓦質土器 | 擂鉢 | 底部 | 52 | — | (140) | 5Y5/1灰<br>胎土:5Y8/1灰白 | スリメは９条１単位。中心から放射状にのびる。見込みにもスリメあり。 | 3-49 | 34-3 |
| 24 | 平坦面１ | 1 | 3層 | 青磁 | 蓋？ | 胴部 | (34) | — | — | 胎土:2.5Y7/3浅黄 | | 3-49 | 34-3 |
| 25 | 平坦面１ | 1 | 3層 | 染付 | 蓋皮<br>猪口 | 底部 | 33 | — | — | 胎土:2.5Y8/2灰白 | 砥部焼か。外面に格子文。 | 3-49 | 34-3 |

※（　）内は推定値。

## 5．八黒城跡の調査成果

（1）城館の概要

大洲市肱川町宇和川の肱川西岸の中腹標高 80 m前後に比定されている。愛媛県教育委員会による『愛媛県中世城館跡分布調査報告書』（1987）によれば、「汗生城の支城、八黒氏の居城」とされ、４つの郭で構成されると報告されている。しかし、現地を確認したところ、尾根先端の平坦部は認められるものの、西側は市道で大きく開削され、仮に市道によって掘削された箇所に堀切があったと仮定しても、想定される堀切外側にあたる西側が平坦面より高い位置にあるため、堀切の機能を果たさないことから、現在の比定地を城館遺構とするには無理がある。（日和佐）

（2）文献・伝承・その他特徴

小田留義氏による『大洲城砦址』（1966 年）や『肱川町誌』など昭和期以降に発行された文献によれば、汗生城の支城とされており、汗生城主であった冨永直安の家老・八黒関右衛門が居城したという。ただし、近世地誌の『大洲舊記』に八黒関右衛門の記述はみられるものの、城館跡としては『大洲秘録』や『大洲舊記』などに明確な記載がない。

前項で指摘のあった堀切状の部分は、昭和期まで水田として利用され、現在は市道が通されている。この堀切状の底部（市道）から高まり頂部までの高さは約５mになっており、城外側の上端も同様の高さである。ただし、堀切状部分の城外側は、市道敷設の際に開削・盛土されるなどしてできた地形であり、後世の改変の著しいことが土地所有者などの証言によって明らかとなっている。

高まりの一部や平坦部２～４には、亜円礫を用いた石積が残されている。ただし、これは畑作地として利用されていた当時のものと推定され、城跡周辺の耕作放棄地でも同様の石積を複数確認することができる。

昭和 49（1974）年３月 16 日、（旧）肱川町によっ

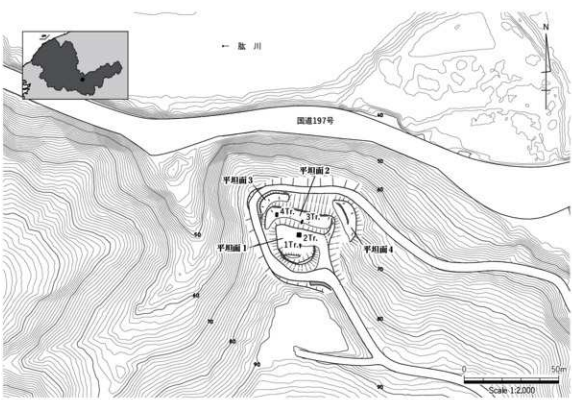



図3-52　八黒城跡 概測平面図

て史跡に指定されている。　（蔵本）

（３）試掘調査

**１トレンチ（図 3-53）**　平坦部１と土塁状の高まりとの傾斜変換部に設定した。１層は砂質の表土で、上部は腐植土が覆う。２層は分級の悪い黄褐色砂質土で、直径 10 ～ 30cm の亜円礫が多量に混入する。３層も黄褐色砂質土である。４層は明黄褐色砂質土で中礫がまじり、地山砕屑物の堆積と考えられる。

地山はおおむね平坦だが、土塁状の高まりに向けて傾斜がついている。このため、土塁状の高まりは盛土による構築物ではなく、自然地形を利用もしくは改変して形成されたものと想定する。

出土遺物はなかった。

**２トレンチ（図 3-54）**　平坦部１の中央部に設定し、遺構の検出を狙った。覆土は黄褐色砂質土の１層のみで、上部は腐植土が覆う。地山は緩やかに北側へ傾斜しており、全体的に小さく起伏している。遺構等は存在しなかった。

出土遺物はなかった。

**３トレンチ（図 3-55）**　平坦部１下端と平坦部２との傾斜変換部に設定した。平坦部１切岸から平坦部２にかけて設定し、平坦部１から流出した遺物の検出を目指した。表土は黄褐色極砂質土で、上部は腐植土が覆う。２層は褐色砂質土である。地山は北側に向けて大きく傾斜しており、さらにトレンチ中央付近で約 30cm の段が形成される。

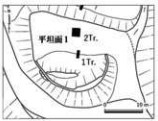
出土遺物はなかった。

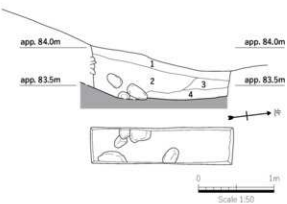
**４トレンチ（図 3-56）**　平坦部２西側に設定し、遺構の検出を目指した。黄褐色砂質土の表土１層のみで、上部は腐植土が覆う。地山は起伏しながら、北側へと傾斜している。遺構等は存在しなかった。

出土遺物はなかった。　（蔵本）

（４）試掘調査の成果

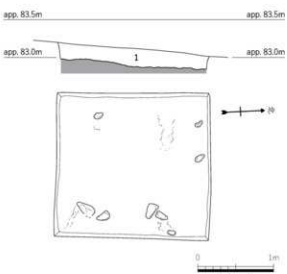
前項において、主に地形的な特徴から城館跡の存在が否定されたが、試掘調査でも城館跡を示唆するような遺構や遺物は検出することができな



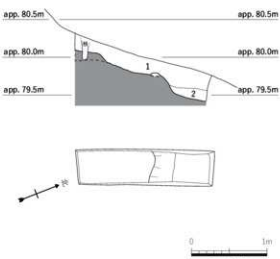

1層:10YR5/4にぶい黄褐色、礫まじり細砂。分級非常に悪い。しまりなし。表土。　2層:10YR5/6黄褐色、礫まじり細砂。分級悪い。しまりなし。φ10 ～ 30cmの亜円礫が多量混入。　3層:10YR5/8黄褐色、礫まじり細砂。分級悪い。しまりあり。　4層:10YR6/8明黄褐色、礫まじり中砂。分級悪い。しまりあり。

図3-53　八黒城跡 １トレンチ平面図・断面図



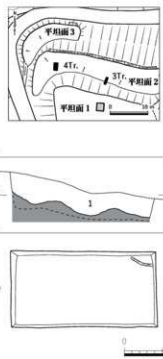

1層:10YR5/8黄褐色、礫まじり細砂。分級悪い。しまり強い。表土。

図3-54　八黒城跡 ２トレンチ平面図・断面図




1層:10YR5/6黄褐色。極粗砂まじり細砂。分級悪い。しまりあり。表土。　2層:10YR4/6褐色。細礫まじり中砂。分級悪い。しまりあり。

図3-55　八黒城跡 3トレンチ平面図・断面図




1層:10YR5/6黄褐色。極粗砂まじり細砂。分級悪い。しまり強い。表土。

図3-56　八黒城跡 4トレンチ平面図・断面図

かった。

八黒城跡の「存在」が明記されるようになるのは昭和期以降のことのようであり、城館跡として認定された過程も今後は検証する必要があろう。

（藏本）

# ６．笹の森城跡の調査成果

（１）城館の概要

笹の森城は、近代まで河川舟運が行われていた肱川が小田川と分岐する鳥首付近から東にのびる旧肱川町（現大洲市肱川町）と旧五十崎（現内子町）の行政境となっていた山脈の中で、最も西端に位置する大迫山（三等三角点「大迫」標高 559.83 m）から南西に位置する京の森（2.5 万分の１地形図「内子町」京の森の標高 548 m）から、小田川に栗太郎で合流する栗太郎川に向かって南東に派生する尾根先「日之平」に位置する城館である。

本城は３つの郭と堀切で構成され、尾根の微高地を主郭とし、尾根の山側に堀切、主郭の尾根先に郭２と郭３が設けられている。主郭は長軸 15.8 m、短軸 6.8 mの方形に近く、その中心には伊勢宮の小さな社が営まれている。主郭の堀切側は削り残しと思われる土塁があり、郭面からの高さは 2.4 mを測る。

堀切は幅 7.2 m、城内側は土塁上面まで 6.6 mの深さとなっており、城外側はわずか 1.1 mの深さしかない。堀切の西側は現在では軽トラックも通行できるようになっているが、かつては堀切が続いていたと考えられる。

郭２は主郭との比高 3.1 m、長軸 49 m、短軸 22.1 mの広い郭で、南端からは坂虎口で郭３とつながっている。郭３は郭２の北東側と南東側に広がる郭で、整地は甘く外縁に向かって緩やかに傾斜している。郭の北端には主郭側から幅 1.3 mの土塁が傾斜しながら続き、坂虎口を形成している。郭の南端は高さ 9.0 mの切岸となっている。その南も曖昧な平坦地があるが、整地が曖昧で明確な切岸もないため、郭３の切岸を削り出した際の残土と解釈した。（日和佐）

（２）文献・伝承・その他特筆

土地所有者によれば、郭２．３は、昭和期に整地され、クワやクリ、タバコなどが栽培されていたというが、現在は遊休農地となっている。過去、遺物等が表面採取された例はない。

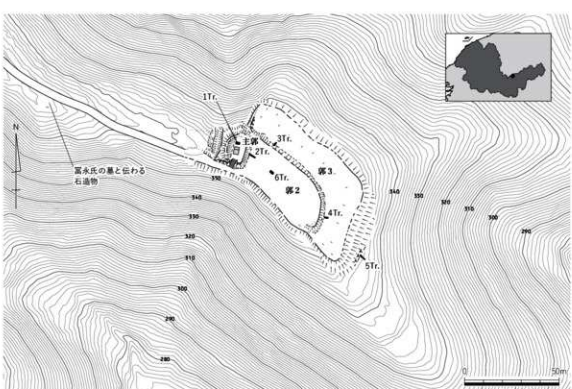



図3-57　笹の森城跡 縄張図

『大洲秘録』には、永禄から天正年間（1558～1591年）に冨永氏が居城していたと伝わる。『大洲舊記』では同じく冨永氏の居城とするが、城の背後にある山（京の森のことか）が高く、そこから射下ろされる矢を防ぐことが難しくなったことから、冨永氏19代のときに橘城へ移ったとも伝わる。ただし、『大洲舊記』の著者である冨永彦三郎は、本城跡のある中居谷村の出身であり、多少調色されている可能性も否めない。このほか、『肱川町誌』などに、喜多郡では最古の城とする説明もあるが、その根拠は不明である。

なお、主郭にある小堂宇は、城主であったとされる冨永氏を祀ったものであり、城跡の近くには冨永氏の墓と伝わる石造物１基が残されている（図版37-8）。

昭和49（1974）年４月６日、（旧）肱川町によって史跡に指定されている。（藏本）

（３）試掘調査

**１トレンチ（図3-58）**　主郭に設定し、遺構の検出を目指した。１層は暗褐色砂質土の表土であり、攪乱のように地山まで到達している部分もある。２層は黄褐色砂質土、３層は明黄褐砂質土で、いずれも地山を巻き上げたような覆土である。地山はおおむね平坦になっているが、遺構等は確認できなかった。

出土遺物はなかった。

**２トレンチ（図3-59）**　主郭切岸から郭２にかけて設定し、主郭から流出した遺物の検出を目指した。１層は暗褐色砂質土の表土であり、厚さ10cm未満の腐植土である。２層は黄褐色砂質土、３層は明黄褐色砂質土、４層は明黄褐色砂質土である。２～４層はいずれも分級が悪い。郭２，３は、昭和期に重機を用いて整地し、耕地化していたという土地所有者の証言もあることから、現代に攪拌された耕作土と思われる。

出土遺物はなかった。

**３トレンチ（図3-60）**　郭２切岸から郭３にかけて設定し、郭２から流出した遺物の検出を目指した。１層は黄褐色砂質土の表土で、２層は明赤褐色砂質土である。２層は堆積厚が50cm近くあり、地山の崩落土もしくは耕作土と思われる。

出土遺物はなかった。

**４トレンチ（図3-61）**　３トレンチと同じく、郭２切岸から郭３にかけて設定し、郭２から流出した遺物の検出を目指した。１層は明褐色砂質土の表土である。２層は黄褐色砂質土、３層は明黄褐色砂質土である。２，３層は地山砕屑物を多く含んでおり、２，３トレンチと同様、地山崩落土もしくは耕作土と考えられる。

出土遺物はなかった。

**５トレンチ（図3-62）**　郭３切岸から城外の平坦部にかけて設定し、郭３から流出した遺物の検出を目指し、堀等の有無の確認を目的とした。１層は腐植土の表土である。２層は黄褐色砂質土、３，４層は明褐色砂質土、５層は黄褐色砂質土で、いずれも地山崩落土もしくは耕作土と考えられる。地山も平坦になっていることから、城外にかけても尾根筋に沿って耕地化されていたと推測する。

切岸の傾斜は60度を超え、郭３との高低差は約９mにも及ぶ。ただし、堀などの防御設備の存在は確認できなかった。

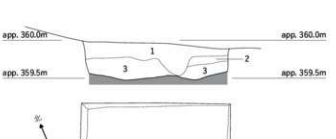
出土遺物はなかった。

**６トレンチ（図3-63）**　郭２の中央部に設定し、柱穴など遺構の検出を目指した。１層は黄褐色砂質土の表土である。２層は明褐色砂質土、３層は明黄褐色砂質土、４層は明褐色砂質土である。いずれも分級は悪く、地山を巻き上げたような覆土である。トレンチ中央部で地山には段が生じているが、建物や溝などを意図するものではなく、重機などによる掘削痕の可能性がある

出土遺物はなかった。（藏本）

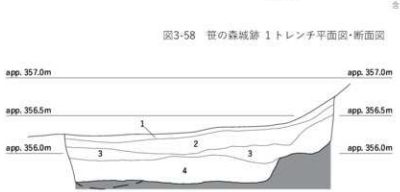
（４）試掘調査の成果

合計６箇所を掘削したが、残念ながら遺構、遺物の検出はできなかった。とくに、２～４，６トレンチは、地山以上の覆土がすべて近現代の整地や耕作にともなう層と考えられ、郭２，３の大部分は原状を保っていない可能性が高い。表採でき



1層：10YR3/4暗褐色。細礫まじり極細砂。分級普通。腐植土。表土。　2層：10YR5/6黄褐色。細礫まじり細砂。分級普通。しまりなし。　3層：10YR6/6明黄褐色。礫まじり細砂。分級悪い。しまりあり。地山由来の角礫を多く含む。

図3-58　笹の森城跡 １トレンチ平面図・断面図




1層：10YR3/4暗褐色。細礫まじり細砂。分級悪い。腐植土。表土。　2層：10YR5/6黄褐色。細礫まじり細砂。分級普通。しまり強い。　3層：10YR6/6明黄褐色。細礫まじり細砂。分級悪い。しまり強い。　4層：10YR6/6明黄褐色。細礫まじり細砂。分級非常に悪い。しまりなし。地山由来の角礫（φ３～５cm程度）を含む。

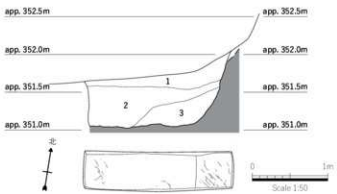
図3-59　笹の森城跡 ２トレンチ平面図・断面図

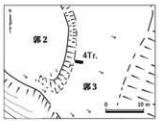
1層：10YR5/8黄褐色。細礫まじり細砂。分級非常に悪い。しまりなし。表土。　2層：5YR5/8明赤褐色。細礫まじり極細砂。分級悪い。しまり強い。耕作土。

図3-60　笹の森城跡 ３トレンチ平面図・断面図

た遺物もなく、現段階では考古学的に時期を検討することは難しい。

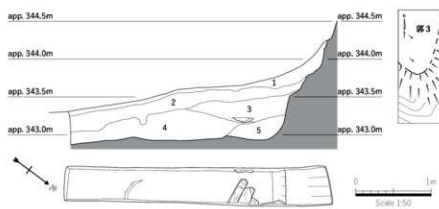
ただし、（ⅰ）尾根筋の堀切、（ⅱ）主郭に築かれる土塁、（ⅲ）尾根の端部側に連なる郭、といった特徴は、東側に位置する橘城跡と共通している。両城の時期的な前後関係は不明であるが、この地域の地域性を表しているか、同じ勢力によって築城されたと考えたい。　（藏本）

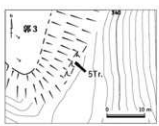



1層:7.5YR5/6明褐色。礫礫まじり極細砂,分級非常に悪い,表土。 2層:7.5YR5/8黄褐色。礫まじり粗砂,分級非常に悪い,しまりなし。φ3cm以上の礫が多量混入。 3層:10YR6/6明黄褐色。礫まじり細砂,分級非常に悪い,しまりあり。φ3cm以上の礫が混入。

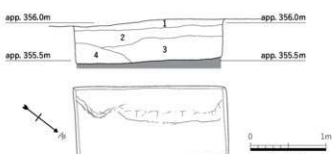
図3-61　笹の森城跡 4 トレンチ平面図・断面図




1層:7.5YR3/2黒褐色。礫礫まじり細砂,分級悪い,混粗土,表土。 2層:10YR5/6黄褐色,礫礫まじり細砂,分級普通,しまり強い。 3層:7.5YR5/6明褐色,極粗砂まじり細砂,分級普通,しまり強い。 4層:7.5YR5/6明褐色,極粗砂まじり細砂,分級普通,3層よりしまり強い。 5層:10YR5/8黄褐色,極粗砂まじり細砂,分級良い,3,4層よりしまり強い。

図3-62　笹の森城跡 5 トレンチ平面図・断面図



1層:10YR5/6黄褐色,礫礫まじり細砂,分級悪い,混粗土,表土。 2層:7.5YR5/8明褐色,礫礫まじり細砂,分級悪い,しまり強い。 3層:10YR5/6明黄褐色,礫礫まじり細砂,分級非常に悪い,地山砕質物で全体が埋め尽くされたような状態。 4層:7.5YR5/8明褐色,極粗砂まじり極細砂,分級悪い,しまり強い。

図3-63　笹の森城跡 6 トレンチ平面図・断面図

## ７．橘城跡の調査成果

（１）城館の概要

橘城は、大洲市肱川町と内子町の行政界をなす東西に長い尾根の南側山腹にあり、東西の尾根稜線にある石上峠西側約 100 mの山（標高 519 m）から南に派生する尾根の先端に所在する。尾根の傾斜が緩やかになる場所には中居谷集落があり、城跡は尾根の南端にあって、北の尾根続き以外は急傾斜となっている。笹の森城とは谷一つ挟んだ東 550 mにある。

主郭は南側を底辺とする三角形に近い形状で、八幡神社が鎮座しており、その規模は底辺約 28 m、高さ 19.1 mを測る。南側と西側で縁辺部に土留めの角礫が積まれて配列されている。東側に神社の参道である石段が有り、北西側に車用の坂路があるが、むろん後世の物である。主郭の北側尾根続きに堀切が設けられており、最大幅 12.7 mで、城内側で深さ 7.0 m、城外側で 2.5 mを測る。西側は主郭の本殿横に出る車道の坂路で埋められ、東側は郭２にいたる道のために開削され、その廃土が東斜面に広げられている。

郭２は主郭から約５m下に設けられた広い郭で、東西長軸 51.8 m、南北短軸 21.8 mを測る。主郭南西から幅 1.9 mの土塁が傾斜しながら郭２の北西端に伸びており、坂路となっている。郭２より下にも郭２を取り囲むように細長く腰郭状に平坦面が数段あるが、整地が不十分で外側に向かって傾斜しているので、果樹や野菜の耕作地であったと判断した。

『愛媛県中世城館跡分布調査報告書』（1987）では、主郭の北側に、「北辺には土盛がなされ、土塁跡と推定されるが、神社築造のため一部が削り取られている。」と報告されている。同報告書には掲載されていないが、同調査時（昭和 60 年３月）に作成された調査票（愛媛県教育委員会文化財保護課所蔵）によれば、土塁の高さは主郭から 3.5 mあったという。また、既述のように同報告書では郭２の下にも複数段の郭が連続していたと報告されているが、本報告では耕作地跡と判断してい

図3-64　橘城跡 縄張図

る。なお、その外にも、主郭の東西に竪堀が複数報告されているが、現地で確認したところ、若干の凹凸はみられるものの、埋没の可能性も含め竪堀と判断できるものではなかった。

以上、①尾根側に堀切を設けて、その背後に主郭を置き、尾根先に郭を展開する。②主郭の堀切側に土塁を設ける。③主郭から下位の郭へは土塁を垂れた坂路を設ける。という点で、笹の森城と橘城は同じ縄張り構造の城といえる。　（日和佐）

（２）文献・伝承・その他特徴

城跡には中居谷八幡神社が建立されており、明和７（1770）年に描かれた『大洲藩領大絵図』には「八幡社」と表現されている。現在も信仰をあつめ、近年では平成８（1996）年に社殿が改築されている。

また、境内（城跡内）一帯の樹木は、大洲市指定天然記念物「中居谷八幡神社社叢」として保護されている。

『大洲秘録』『大洲舊記』などによれば、冨永氏、大野氏の居城とされ、「櫻か城」や「櫻ノ城」の別称もみられる。当初、冨永氏は笹の森城に居城していたが、笹の森城の防御的機能不全を理由に、冨永氏19代のときに橘城へと機能が移されたとされる。その後、菅田城城主・大野直之の兄にあたる大野直澄が城主となり、子の大野直範に引き継がれたと伝えられる。長宗我部氏との数度の衝突ののち、直範は天正年間（1573-1592年）に降伏したとも伝えられている。

昭和49（1974）年４月６日、(旧）肱川町によって史跡に指定されている。　（藏本）

（３）試掘調査

**１トレンチ（図3-65）**　主郭に設定し、遺構の検出を目指した。１層は表土であり、暗灰黄色の砕石で覆われ、堆積厚は約10cmである。その直下は地山である。なお、地山を掘り込んだ現代の攪乱坑を検出した。遺構の可能性が極めて低いことから、約30cmを掘削するに留めた。攪乱坑の状況から、神社社殿改築時に旧材の一部を廃棄した土坑と思われる。

現代以前にさかのぼる出土遺物はなかった。

**２トレンチ（図3-66）**　郭２の西部に設定し、遺構の検出を目指した。当初1.0×2.0ｍで設定したが、柱穴の検出に伴って随時拡張した。表土は褐色砂質土で、表面には人為的に砕石が撒かれいている。２層は暗褐色砂質土で細礫がまじり、分級は非常に悪い。層の上部には、部分的に腐植土が薄く堆積しており、ある時期までは２層上面が地表だったことがわかる。なお、表土から２層までは、現代のプラスチックやガラス片が含まれる。３層は黄褐色砂質土で、地山の砕屑物の堆積である。４層は褐色砂質土で直径0.5cm程度の地山由来の偽礫状ブロックが散らばる。トレンチのわずかな範囲でしか確認できず、また堆積も薄いが、１～３層よりも分級が良く、明確に分層できる。

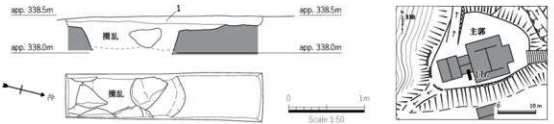
柱穴を２基検出した。おおよそ南北方向を軸として、約1.8ｍ（約１間分）の間隔で並び、直径は40～50cm程度である。ただし、この他に柱穴は確認できず、建造物などを推定するまでにはいたっていない。SP01埋土は褐色砂質土、SP02埋土はにぶい黄褐色砂質土で、４層と同じく地山由来の偽礫状ブロックが混入し、さらに炭化物粒も少量混入する。いずれも埋土から遺物は出土しなかったが、28の土師器片１点については、SP01埋土直上の２層で発見している。

**２トレンチ出土遺物（図3-67）**　１層では26，27が出土した。26は型紙摺絵印判の湯呑碗である。27は染付の歪であり、見込みに山稜と鳥を表した風景が描かれる。いずれも近世以降のものである。

２層で出土したM05は銭貨である。寛永通宝で、裏面は無文である。

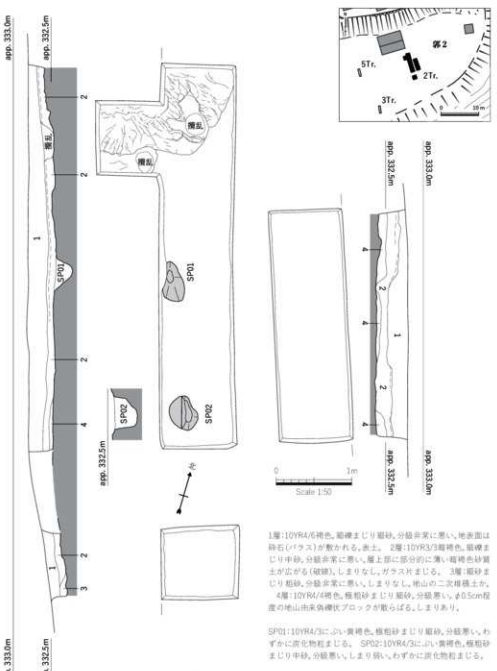
３層で出土した28は、土師質土器の皿底部と考えられる。全体に著しく摩耗しているが、内面は回転調整痕がわずかに確認できる。

調査時の排土中から、29，30を発見した。29は土師質土器の皿で、内面に沈線化した回転調整痕が残る。底部は摩耗が進んでいるが、回転ヘラ




1層：2.5Y5/2暗灰黄色。砕石（バラス）層。表土。　攪乱：10YR5/6黄褐色。大礫～巨礫が多量混入。モルタルやプラスチック片も混入。

図3-65　橋城跡 1トレンチ平面図・断面図




1層：10YR4/6褐色。礫礫まじり細砂。分級非常に悪い。地表面は砕石（バラス）が敷かれる。表土。　2層：10YR3/3暗褐色。礫礫まじり中砂。分級非常に悪い。層上部に部分的に薄い暗褐色砂質土が広がる（破線）。しまりなし。ガラス片まじる。　3層：細砂まじり粗砂。分級非常に悪い。しまりなし。地山の二次堆積土か。
4層：10YR4/4褐色。極粗砂まじり細砂。分級悪い。φ0.5cm程度の地山由来偽礫状ブロックが散らばる。しまりあり。

SP01：10YR4/3にぶい黄褐色。極粗砂まじり細砂。分級悪い。わずかに炭化物粒まじる。　SP02：10YR4/3にぶい黄褐色。極粗砂まじり中砂。分級悪い。しまり弱い。わずかに炭化物粒まじる。

図3-66　橋城跡 2トレンチ平面図・断面図

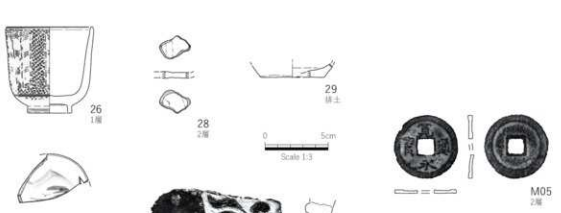
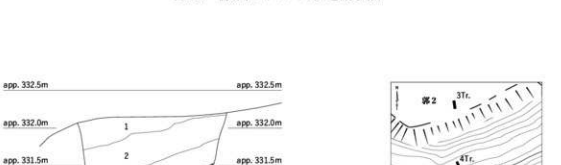



図3-67　橋城跡 2 トレンチ出土遺物実測図




1層：10YR4/6褐色、細礫まじり細砂、分級悪い、表土。 2層：7.5YR6/4にぶい橙色、礫まじり細砂、分級非常に悪い、地山砕屑物が多数まじる。 3層：10YR5/6黄褐色、細礫まじり細砂、分級悪い、2層より少ないが地山砕屑物が多数まじる、しまりなし。

図3-68　橋城跡 3 トレンチ平面図・断面図

1層：10YR4/3にぶい黄褐色、粗粗砂まじり中砂、分級悪い、表土。 2層：10YR4/4褐色、細礫まじり中砂、分級悪い。 3層：10YR4/6褐色、細礫まじり細砂、分級悪い、しまり強い。 4層：10YR4/4褐色、細礫まじり細砂、分級普通、しまりなし、角礫（φ5cm程度）多くまじる。

図3-69　橋城跡 4 トレンチ平面図・断面図

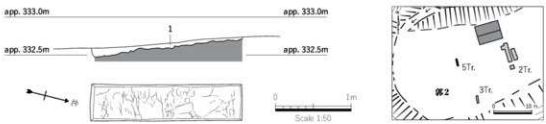



図3-70　橋域跡 ５トレンチ平面図・断面図

切りと思われる。30は焼成不良の軒平瓦で、瓦当面には唐草文と上下２段の子葉が配される。中心飾りはほとんど失われているが、半菊文と思われる花弁がわずかに残る。近世後半以降のものと考えられる。

**３トレンチ（図3-68）**　郭２の南側縁辺部に設定し、土塁等の痕跡の検出を試みた。１層は褐色砂質土の表土で、切岸方向に向けて堆積厚が増す。２層はにぶい褐色砂質土、３層は黄褐色砂質土であり、いずれも地山に由来する覆土で、分級は悪い。２、３層も切岸に向けて傾斜しており、地山も同様である。これは、郭縁辺を拡張する目的の盛土と思われる。土塁などの構築物は確認できなかった。

出土遺物はなかった。

**４トレンチ（図3-69）**　郭２下の緩斜面部に設定し、郭の可能性を検討するほか、遺物の検出を目指した。１層はにぶい黄褐色砂質土の表土である。２層は褐色砂質土、３、４層は褐色砂質土である。２～４層は地山に由来する覆土であり、いずれも分級は悪い。地表面の傾斜とほぼ同じ傾斜で堆積しており、郭２切岸の崩落などによる堆積と考えられる。地山は平坦にみえるが、凹凸が著しく、これは耕作に伴う影響とみられる。

出土遺物はなかった。

**５トレンチ（図3-70）**　郭２の西部に設定し、２トレンチと同様に遺構の検出を目指した。覆土は表土のみで、褐色の腐植土である。堆積厚は浅い地点で５cm 未満である。地山は岩盤質で肌荒れしたような状態であり、南側へ緩やかに傾斜している。

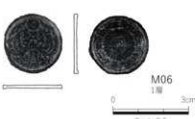



図3-71　橋域跡 ５トレンチ出土遺物実測図

遺構の検出はできなかった。

**５トレンチ出土遺物（図3-71）**　１層で出土したM06は銭貨である。50銭銀貨で、大正12(1923)年製である。表面に菊花紋章、桐文、鳳凰が表現され、裏面には桜、日章、八稜鏡が表現される。

（４）試掘調査の成果

主郭、郭２において、合計５箇所を掘削した。主郭は神社社殿の造営、改築による後世の改変の影響が大きく、残念ながら土塁や遺構などは残されていなかった。郭２では、東側に設定した２トレンチで柱穴２基を検出した。ただし、柱穴埋土からの出土遺物はなく、時期は特定しかねる。

出土遺物の大半は近世以降のものであり、中世段階にさかのぼる可能性のある遺物は、土師質土器の皿細片２点（28,29）のみであった。『大洲舊記』の記述にもあるように、谷を挟んで反対側に位置する笹の森城跡との時間的関係性も課題のひとつであったが、残念ながら今回の調査では解明までにはいたらなかった。今後は周辺地域の小規模城館跡の類例を集積しながら、時間的もしくは地域的な位置づけを明確にしてゆく必要がある。

（藏本）

表3-06　橋城跡 土器・陶磁器一覧表

| 番号 | 出土位置 | | | 遺物内容 | | | 寸法(復元値) | | | 色調 | 特徴 | 時図番号 | 図版番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 郭 | トレンチ | 層位遺構 | 種別 | 器種 | 部位 | 器高(mm) | 口径(mm) | 底径(mm) | | | | |
| 26 | 第2 | 2 | 1層 | 染付 | 湯呑碗 | 口縁部～底部 | 68 | (70) | (35) | 胎土:2.5Y8/2灰白 | | 3-67 | 40-1 |
| 27 | 第2 | 2 | 1層 | 染付 | 蓋 | 口縁部～底部 | 30 | 66 | (22) | 胎土:2.5Y8/2灰白 | 見込みに風景画。 | 3-67 | 40-2 |
| 28 | 第2 | 2 | 2層 | 土師質土器 | 皿 | 底部 | 4.5 | — | — | 7.5YR7/4にぶい橙 | 内面に回転調整痕がわずかに残る。SP01埋土の直上で出土。 | 3-67 | 40-3 |
| 29 | 第2 | 2 | 掘土 | 土師質土器 | 皿 | 底部 | 2.1 | — | (5.0) | 5YR6/4橙 | 内面に沈線化した回転調整痕。 | 3-67 | 40-3 |
| 30 | 第2 | 2 | 掘土 | 瓦 | 軒平瓦 | 瓦当部 | 3.0 | — | — | 7.5YR6/4にぶい橙 | 唐草文。 | 3-67 | 40-2 |

単位（　）内は推定値。

表3-07　橋城跡 金属製品一覧表

| 番号 | 出土位置 | | | 遺物内容 | | 寸法(復元値) | | | | 特徴 | 時図番号 | 図版番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 郭 | トレンチ | 層位遺構 | 種別 | 器種 | 最大長(mm) | 最大幅(mm) | 最大厚(mm) | 重量(g) | | | |
| M05 | 第2 | 2 | 2層 | 銭貨 | 寛永通寶 | 2.5 | — | 1.25 | 2.4 | 完形品。穿輪径9mm。裏面は無文。 | 3-67 | 40-4 |
| M06 | 第2 | 5 | 1層 | 銭貨 | 50銭銀貨 | 2.3.5 | — | 1.4 | 4.8 | 完形品。品位:銀720、銅280。大正12(1923)年製。 | 3-71 | 40-5 |

## ８．まとめ

今回は旧肱川町域の大小６箇所の中世城館跡について報告した。これまで文献や伝承でしか特徴を把握することができなかった城館跡において、客観性の高い成果を得ることができた。以下でまとめとしたい。

肱川沿いに立地する猿ヶ滝城跡は、肱川中流域としては比較的規模の大きな山城であり、計４つの郭群（郭群Ａ～Ｄ）で構成されることが判明した。それぞれの郭群は築城思想が異なるとされ、これは年代差もしくは勢力差に起因する可能性が浮上してきた。試掘調査では、井楼と思われる建物跡や柱穴群を発見することができたほか、採集品が大半を占めるものの、輸入陶磁器や備前焼を多く確認することができた。これらの形態的特徴から、城の盛期は16世紀前半ごろと推定できるようになった。この地域の山城において、地誌など文献以外の手法で年代観を検討できるようになったことは、重要な成果である。また、この地域としては初めて鉄滓を発見することができ、城内で鉄製品を生産していたことも明らかとなった。

肱川を挟んで対岸の高尾城跡では、その縄張りから在地勢力以外の関与が示された。また、試掘調査ではとくに土塁の構造が明らかとなった。埋め殺した礫を中心に２段階に分けて盛土し、郭外側表面には土留めとして礫を積むという構造である。礫による土留めという点では、高知県中土佐町久礼（くれ）に所在する西山城跡と共通している。盛土の方法や郭内側に礫を積むという差異はあるものの、さらに視野を広げて比較検討をおこなう必要がある。

以上の２城は舟運や往来に重要であったと思われる肱川を挟むように立地している。また、土佐国境にも近く、各在地領主も点在するなど、一見すると極度の軍事的緊張のなかで築かれたかのように思われる。しかし、高尾城は合理性や緊張感のない構造であり、猿ヶ滝城も郭群に特徴の差があるなど、築城には単に緊張のみでは片付けられない様々な背景や要因が存在したと考えられる。その背景や要因については、文献史学の成果も踏まえながら、総合的に調査研究する必要がある。

肱川本流から、低平な山稜をひとつ越えた位置にある中居谷地区の笹の森城跡、橘城跡については、いずれも中世段階の遺物がほとんどなく、時期の検討が困難であるものの、堀切や土塁、郭の配置などが共通していることが明らかとなった。いずれも小規模な城館であるが、地域もしくは支配領主の共通性を示しているといえよう。今後は、こうした共通性などを、どこまで類型化できるかも課題のひとつになろう。

一方、白石城跡と八黒城跡とについては、城館跡という明確な根拠を得られなかった。白石城跡については近世地誌に城として記載があり、また、掘立柱建物跡を検出することができながらも、城として必須の防衛線が構築されていないため、評価が難しい。八黒城跡については、城館そのものの存在に疑問符が付される結果となった。

今回の調査では、残念ながら城館跡の存在が否定的になった対象もあったが、ある程度の標準化された作業を実施することで、おおよそ一定の基準のもと、城館跡を評価することができた。冒頭でも紹介したように、大洲市内に存在する城館跡は101件を数え、本書で報告した城館跡はそのごく一部に過ぎない。今後も調査を着実に進め、客観的な情報や成果を得ることで、適切な文化財の保護に努めたい。　　（藏本）

【参考文献】
小野正敏　1982「15 ～ 16 世紀の染付碗・皿の分類の年代」『貿易陶磁研究』№2、日本貿易陶磁研究会
愛媛県教育委員会文化振興局 編 1987『愛媛県中世城館跡分布調査報告書』、愛媛県教育委員会
瀬戸哲也　2015「14・15 世紀の沖縄出土中国産青磁について」『貿易陶磁研究』№35、日本貿易陶磁研究会
乗岡　実　2017「戦国時代の備前焼編年」『東洋陶磁』第46号、東洋陶磁学会